

# 石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要23

①

—昆布山谷地区・宗岡家住宅・町並み保存地区—

2015年3月

島根県大田市教育委員会

# 石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要23



—昆布山谷地区・宗岡家住宅・町並み保存地区—

2015年3月

島根県大田市教育委員会

# 序

世界遺産・石見銀山遺跡は16世紀から20世紀にかけて採掘から製錬までが行われた鉱山跡を中心とする、山城跡や街道、港湾や港町などからなる複合遺跡です。

考古学的な遺跡としての石見銀山遺跡に関する発掘調査は、昭和58年度に始まり、昭和63年から発掘調査が継続、その後県市の一体的な調査が進み、平成14年にはその成果として、石見銀山遺跡の柵内を主な範囲とする史跡の追加指定がなりました。

今年度は、銀山地区内の昆布山谷と重要な伝統的建造物群保存地区内の宗岡家住宅敷地の発掘調査を実施しました。併せて史跡・伝建地区内において小規模な掘削を作らう現状変更行為の際に立会調査と遺構・遺物の記録作成を随時実施したところです。

昆布山谷地区は、銀山の開発初期から利用されている地域であり、銀山の開発と居住の様相を明らかにすることを目的として調査を進めているもので、詳細な分布調査を基に調査地点を選んで発掘調査を実施しています。

本年度の調査では、谷の中ほどで岩盤加工遺構が良好に保存されていることが明らかとなり、石垣で平坦面を構築している現在の地形は、18世紀の後半以降に形成されたことも明らかとなっています。具体的な遺構としては18世紀末～19世紀初頭の建物遺構が2か所、明治期の藤田組に関連する建物遺構が1か所検出されています。

宗岡家住宅の調査は住宅の保存整備事業に先立ち実施したもので、本年度は敷地の東部を対象とし、納屋や庭施設の跡など、現存しない施設の遺構や、宗岡家以前の遺構が検出され、敷地内における地形の形成過程が一部明らかとなるなどの成果が得られたところです。

立会・試掘調査は、5か所で実施し、江戸時代初期の遺物を作らう遺構や、中世須恵器片や古瀬戸瓶・壺器系の痕などの遺物とともに柱穴や土坑などの遺構が検出され、初出の資料となりました。

宗岡家住宅と昆布山谷地区においては、発掘調査の現地説明会を開催し、調査成果の説明と普及をはかったところです。

発掘調査にあたっては土地所有者、調査指導者、地元関係者、作業員の皆さんのご理解と多大な協力を頂き誠にありがとうございました。

平成27年3月

鳥取県大田市教育委員会

教育長 大國晴雄

# 例 言

- 本書は、島根県大田市大森町に所在する史跡石見銀山遺跡の発掘調査概要である。
- 調査は国庫補助事業として大田市教育委員会が事業主体となって実施した。
- 本書の内容は、平成26年度の尾山地区、宗間家住宅及び、町並み保存地区についての調査概要をまとめたものである。
- 調査体制は下記のとおりである。

〔石見銀山遺跡調査監修会議員会〕

勝部 昭（元島根県教育委員会教育次長）	黒田乃生（筑波大学大学院准教授）
高安克己（島根大学名誉教授）	田邊征夫（（公財）大阪府文化財センター理事長）
田中哲雄（元東北芸術工科大学芸術学部教授）	中塙 弘（DOWAホールディングス副取締役）
仲野義文（石見銀山資料館館長）	中村俊郎（中村プレイス㈱代表取締役社長）
村田信夫（大田市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員）	
和上惠子（石見銀山ガイドの会前会長）	

〔石見銀山遺跡調査専門委員会〕

井上雅仁（島根県立三瓶自然館学芸課長代理）	大槻泰夫（島根大学法文学部教授）
勝部 昭（元島根県教育委員会教育次長）	黒田乃生（筑波大学大学院准教授）
田邊征夫（（公財）大阪府文化財センター理事長）	中西哲也（九州大学総合研究博物館准教授）
仲野義文（石見銀山資料館館長）	原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校准教授）
村上 隆（京都美術工芸大学教授）	

〔事務局〕 大田市教育委員会石見銀山課

〔調査員〕 山手貴生・新川 隆・尾村 勝（大田市教育委員会石見銀山課）

〔遺物監理〕 高村玲子・井上伸子・浅野美貴

〔調査指導〕 文化庁記念物課・奈良文化財研究所

島根県教育庁文化財課・世界遺産室・埋蔵文化財調査センター

5. 採図の縮尺は、図中に示した。

6. 採図中の方位は世界測地系の軸方位である。またレベル高は海拔高を示す。

7. Fig. 1 - Fig. 2 は国土交通省国土地理院発行の地形図を縮小縮集し、一部加筆して使用した。

8. 本文中に使用した略号は下記のとおりである。

S B - 建物跡 S D - 溝跡 S K - 土坑 S W - 石垣・石積み S X - 炉跡・特殊遺構 S L - 烧土面

9. 採図中のマンセル表記及び土色は農林水産省技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によった。

10. 調査中及び報告書作成段階で、下記の方々のご指導・ご教説を賜った。(50音順、敬称略)

大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問）・大槻泰夫・中村唯史（島根県立三瓶自然館）

11. 宗間家住宅における科学調査については、文化財調査コンサルタント㈱に委託して実施し、調査成果は第5章に掲載した。

12. 本書の執筆は第2章第1節を尾村が、第4章第1節、第2節第3項を新川が、第5章を渡邊正巳（文化財調査コンサルタント㈱）が、それ以外を山手が行い、編集は筆者協議の上、山手・新川が行った。

13. 出土資料及び実測図・写真などは大田市教育委員会で保管している。

# 凡 例

## 1. 図版の表現

遺構・遺物図版中における表記は下記による。

これ以外のものについては個別に図中に示した。

(遺 物)



被蒸土壤



岩盤



炉盤



黃色粘土



灰白色粘土



灰色土

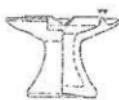


カラミ (結露泥)



黑色土 (炭塵)

(遺 物)



健



腐状付着物



原化物



被熱部分

図中の▼印あるいは一点鎖線（図中↑箇所）は施釉範囲の境界を示す。

## 2. 本文中の語句

以下の語句については、カタカナ表記に統一し、その意味を定義しておく。

ズリ・・・・・選鉱過程にて除去される化学的変化に起因しない目的外試験をいう

# 本文目次

## 第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と概要 .....	1
第1項 遺跡の位置と概要 .....	1
第2項 調査の経過 .....	2
第2節 平成26(2014)年度の調査 .....	2
第1項 調査の概要 .....	2
第2項 指導関係及び公開事業 .....	2

## 第2章 昆布山谷地区の調査

第1節 調査地の周辺環境 .....	5
第2節 調査の概要 .....	5
第1項 過去の調査の経緯と成果 .....	5
第2項 調査区の設定 .....	5
第3項 平成26(2014)年度の発掘調査の概要 .....	7
第3節 I区 .....	7
第1項 調査の概要 .....	7
第2項 層序 .....	7
第3項 検出遺構 .....	10
第4項 出土遺物 .....	13
第4節 II区 .....	16
第1項 調査の概要 .....	16
第2項 層序 .....	16
第3項 検出遺構 .....	19
第4項 出土遺物 .....	23
第5節 III区 .....	24
第1項 調査の概要 .....	24
第2項 検出遺構 .....	24
第3項 出土遺物 .....	27
第6節 小結 .....	27

## 第3章 宗岡家住宅の調査

第1節 調査の概要 .....	37
第1項 調査地の周辺環境 .....	37
第2項 平成26(2014)年度の発掘調査の概要 .....	37

第2節 調査の成果	37
第1項 検出遺構	37
第2項 出土遺物	46
第3節 小結	47

#### 第4章 本年度の試掘・立会調査

第1節 本年度の試掘・立会調査対象箇所とその対応	55
第1項 大森銀山伝統的建物群保存地区	55
第2項 温泉津伝統的建物群保存地区	55
第2節 大森座南地点浄化槽埋設に伴う試掘調査	58
第1項 調査の概要	58
第2項 層序	58
第3項 検出遺構	58
第4項 出土遺物	58
第3節 小結	61

#### 第5章 石見銀山遺跡宗岡家住宅発掘調査検出便槽状遺構の自然科学分析

第1節 はじめに	68
第2節 採取資料について	68
第3節 分析方法及び分析結果	69
第1項 寄生虫卵分析	69
第2項 C N分析及び全リン分析	69
第4節 遺構が「便槽」であったことの可能性	70
第1項 寄生虫卵分析結果から	70
第2項 リン分析、C N分析から	70
第5節 小結	70

#### 第6章 総括

第1節 見布山谷地区	71
第1項 I 区	71
第2項 II 区	71
第3項 III 区	72
第2節 宗岡家住宅	72
第3節 試掘・立会調査	73

# 挿図目次

Fig. 1 石見銀山遺跡位置図 ( S = 1 / 100,000)	1
Fig. 2 石見銀山遺跡調査地点位置図 ( S = 1 / 25,000)	4
Fig. 3 昆布山谷地区調査地点位置図 ( S = 1 / 1,500)	6
Fig. 4 昆布山谷地区第5地点周辺地形図 ( S = 1 / 160)	8
Fig. 5 昆布山谷地区第5地点出土遺物配置図 ( S = 1 / 120)	9
Fig. 6 昆布山谷地区第5地点I区平面図・断面図 ( S = 1 / 100)	12
Fig. 7 昆布山谷地区第5地点I区S X 02 平面図・立面図 ( S = 1 / 80)	14
Fig. 8 昆布山谷地区第5地点I区S W 02 平面図・立面図 ( S = 1 / 80)	15
Fig. 9 昆布山谷地区第5地点II区平面図・断面図 ( S = 1 / 100)	17
Fig.10 昆布山谷地区第5地点II区S B 02・03 平面図・礎石断面図 ( S = 1 / 80)	18
Fig.11 昆布山谷地区第5地点II区S K 01、S X 07・10・11 平面図・礎石断面図 ( S = 1 / 30)	20
Fig.12 昆布山谷地区第5地点II区S W 04・05 平面図・立面図 ( S = 1 / 40)	22
Fig.13 昆布山谷地区第5地点III区S B 04 平面図・断面図 ( S = 1 / 80)	25
Fig.14 昆布山谷地区第5地点III区S K 02、S X 14・15・16 平面図・断面図 ( S = 1 / 30)	26
Fig.15 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図 I ( S = 1 / 3 )	28
Fig.16 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図 II ( S = 1 / 3 )	29
Fig.17 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図 III ( S = 1 / 3 )	30
Fig.18 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図 IV ( S = 1 / 3 、 1 / 4 )	31
Fig.19 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図 V ( S = 1 / 6 、 1 / 8 )	32
Fig.20 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図 VI ( S = 1 / 1 、 1 / 2 )	33
Fig.21 大森銀山伝統地区内調査・試掘・立会地点 ( S = 1 / 10,000 )	38
Fig.22 宗岡家住宅調査区配置図 ( S = 1 / 1,000 )	39
Fig.23 宗岡家住宅出土遺物配置図 ( S = 1 / 120 )	40
Fig.24 宗岡家住宅S B 01 平面図・断面図・立面図 ( S = 1 / 100 )	41
Fig.25 宗岡家住宅S B 02、S X 03 平面図・断面図 ( S = 1 / 60 )	42
Fig.26 宗岡家住宅S W 01、S X 04・05 平面図・断面図 ( S = 1 / 80 )	43
Fig.27 宗岡家住宅下層礎石トレンチ平面図・断面図 ( S = 1 / 60 )	44
Fig.28 宗岡家住宅出土遺物実測図 I ( S = 1 / 3 )	48
Fig.29 宗岡家住宅出土遺物実測図 II ( S = 1 / 2 、 1 / 3 )	49
Fig.30 宗岡家住宅出土遺物実測図 III ( S = 1 / 3 )	50
Fig.31 宗岡家住宅出土遺物実測図 IV ( S = 1 / 2 、 1 / 3 )	51
Fig.32 宗岡家住宅出土遺物実測図 V ( S = 1 / 3 )	52
Fig.33 温泉津伝建地区内試掘・立会地点 ( S = 1 / 4,000 )	56
Fig.34 1 T 堆積状況 ( 北西から )	57
Fig.35 2 T 水路検出状況 ( 北東から )	57
Fig.36 大森岸南地点調査地位図 ( S = 1 / 1,000 )	59

Fig.37 大森座南地点トレンチ平面図・断面図 ( S = 1 / 40).....	60
Fig.38 大森座南地点出土遺物実測図 I ( S = 1 / 3 ).....	62
Fig.39 大森座南地点出土遺物実測図 II ( S = 1 / 3、1 / 4 ).....	63
Fig.40 大森座南地点出土遺物実測図 III ( S = 1 / 1、1 / 2 ).....	64
Fig.41 大森座南地点出土遺物実測図 IV ( S = 1 / 4、1 / 6 ).....	65
Fig.42 調査区配置及び試料採取地点.....	68
Fig.43 S X 03 断面図及び試料採取位置.....	69
Fig.44 検出された回虫卵化石.....	70

## 表目次

Tab. 1 石見銀山跡地調査一覧.....	3
Tab. 2 昆布山谷地区調査地点一覧.....	7
Tab. 3 昆布山谷地区第5地点出土遺物観察表 I.....	34
Tab. 4 昆布山谷地区第5地点出土遺物観察表 II.....	35
Tab. 5 昆布山谷地区第5地点出土遺物観察表 III.....	36
Tab. 6 宗岡家住宅出土遺物観察表 I.....	52
Tab. 7 宗岡家住宅出土遺物観察表 II.....	53
Tab. 8 宗岡家住宅出土遺物観察表 III.....	54
Tab. 9 大森座南地点出土遺物観察表 I.....	66
Tab.10 大森座南地点出土遺物観察表 II.....	67
Tab.11 検出寄生虫卵化石組成表.....	69
Tab.12 寄生虫の種類と生態的な特徴.....	69
Tab.13 P C N 測定結果一覧.....	69

# 図版目次

P L . 1	昆布山谷地区第5地点 I・II区調査区設定状況(東より)	P L . 10	宗間家住宅 外観(北東より)
同	調査区設定状況(南西より)	同	I・II区調査区設定状況(北東より)
P L . 2	昆布山谷地区第5地点 S X 02 全景(南東より)	同	III区調査区設定状況(南西より)
同	I c 区北壁土層断面(東より)	同	III区西側調査区設定状況(西より)
同	I c 区東壁土層断面(南西より)	同	IV区調査区設定状況(北東より)
同	S D 02-①完掘状況(北東より)	P L . 11	宗間家住宅 S B 01 完掘状況(南東より)
同	S D 02-②検出状況(南東より)	同	S B 01 東半完掘状況(南より)
P L . 3	昆布山谷地区第5地点 I 区完掘状況(南東より)	同	S B 01 東半完掘状況(南東より)
同	S B 01 検出状況(南より)	同	S B 01 西半検出状況(南西より)
同	S W 02 北側(北西より)	同	S B 01 便所跡半蔵状況(西より)
同	I d 区北壁土層断面(南東より)	P L . 12	宗間家住宅 S B 01 東西土層断面(南西より)
同	S X 05 検出状況(南東より)	同	S B 01 塔北土層断面①(東より)
P L . 4	昆布山谷地区第5地点 II 区完掘状況(南東より)	同	S B 01 南北土層断面②(東より)
同	II a 区東壁土層断面(南より)	同	S B 01 部屋内土層断面③(南東より)
同	II c 区東壁土層断面(南より)	同	S B 01 土壇部壁床下(南東より)
同	II c 区北壁土層断面(南東より)	P L . 13	宗間家住宅 III区完掘状況(北より)
同	II d 区北壁土層断面(南東より)	同	III区完掘状況(東より)
P L . 5	昆布山谷地区第5地点 SX09、SX10、SX11 検出状況(北より)	同	下層壁認トレンド東壁(西より)
同	S X 09、S X 10、S X 11 完掘状況(北東より)	同	下層壁認トレンド西壁(東より)
P L . 6	昆布山谷地区第5地点 S X 10(南西より)	同	下層壁認トレンド南壁(北より)
同	S X 10 滑落部(西より)	同	下層壁認トレンド北壁(南より)
同	S X 11 完掘状況(南より)	P L . 14	宗間家住宅 S X 03 検出状況(北西より)
同	S X 11 半蔵状況(東より)	同	S X 03 上層断面(北より)
同	S X 08 西半部断面(南より)	P L . 15	宗間家住宅 S X 03 北半蔵状況(北より)
同	S X 08 東半部断面(東より)	同	S X 03 土壇サンプル採取状況(北西より)
同	S X 07 検出状況(北より)	同	Ⅲ区堆積西側完掘状況(北より)
同	S X 07 半蔵状況(南東より)	P L . 16	宗間家住宅 IV区完掘状況(北東より)
P L . 7	昆布山谷地区第5地点 S B 02 南側床面(南東より)	同	IV区完掘状況(北西より)
同	S B 02 南部床面(南西より)	P L . 17	大森座南地点 剥離前状況(東より)
同	S D 03-④ 熱出状況(南東より)	同	北壁断面(南より)
同	II c 区南半部土層認定剖面断面(南西より)	同	柱検出状況(東より)
同	S X 08 検出状況(南西より)	同	S D 01 検出状況(東より)
同	S X 08 半蔵状況(北東より)	同	S X 01 検出状況(南西より)
同	S K 01 半蔵状況(南東より)	同	S K 01、S P 01 検出状況(南より)
同	S X 12 検出状況(北西より)	同	S K 01、S P 01 半蔵状況(東より)
P L . 8	昆布山谷地区第5地点 III区完掘状況(南東より)	同	第20層上面(北西より)
同	S B 04 南北断面(南東より)	P L . 18	昆布山谷地区第5地点出土遺物I
同	S X 16 半蔵状況(南東より)	同	昆布山谷地区第5地点出土遺物II
同	S X 15 半蔵状況(南東より)	P L . 19	昆布山谷地区第5地点出土遺物III
同	S K 02 半蔵状況(南東より)	同	昆布山谷地区第5地点出土遺物IV
P L . 9	昆布山谷地区第5地点 S X 14 完掘状況(北西より)	P L . 20	昆布山谷地区第5地点出土遺物V
同	S X 14 東部断面(東より)	宗間家住宅出土遺物I	
同	石見系大底(87) 出土状況(南東より)	P L . 21	宗間家住宅出土遺物II
同	脚窓痕(北東より)	宗間家住宅出土遺物III	
同	Ⅲ区北壁強張帶地盤面検出状況(北西より)	P L . 22	大森座南地点出土遺物I
同	瓦出土状況(北より)	同	大森座南地点出土遺物II
同	西壁土層断面①(東より)	P L . 23	大森座南地点出土遺物III
同	西壁土層断面②(東より)	同	大森座南地点出土遺物IV

# 第1章 遺跡の概要

## 第1節 遺跡の概要

### 第1項 遺跡の位置と概要 (Fig. 1)

石見銀山遺跡は島根県の中央部の大田市に位置する。大田市は旧国名では石見国に属し、東端の一部は出雲國に接している。遺跡の周辺は、仙ノ山や豊前山などの海抜400～500mの山々が点在り、平地は極めて少ない。

遺跡は16世紀から20世紀にかけて採掘から精錬までが行われた鉱山跡を中心として、周囲の山城跡や

姫鶴山から港までを結ぶ2本の街道、銀鉱石・銀の積み出しや姫山で必要な礦物資を搬入した港湾などからなる複合遺跡である。銀の生産から撤出に至る鉱山開発の社会機構及び社会基盤施設の全体を示すこれらの良好な遺跡群は、鉱山町や港湾などの建造物群とともに、当時の土地利用の在り方と機能の一部が現在の土地利用の在り方にも伝達されつつ、自然と共に共生した顯著な特徴的価値を持つ文化的景観の象徴として、平成19(2007)年にユネスコ世界遺産に登録された。

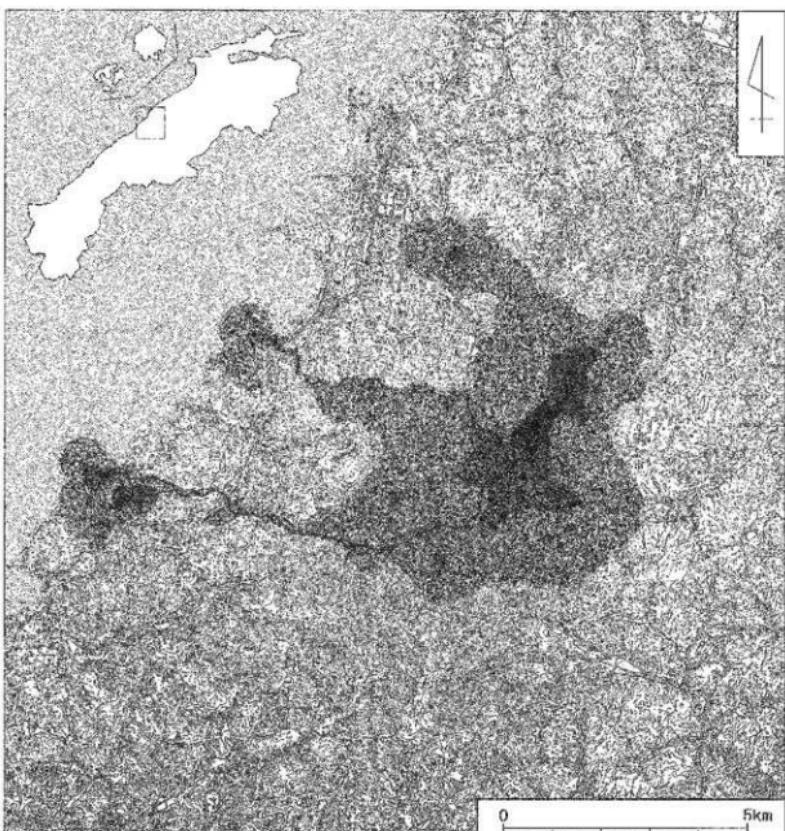


Fig. 1 石見銀山遺跡位置図 ( $S = 1 / 100,000$ )

## 第2項 調査の経過 (Tab. 1)

石見銀山遺跡の発掘調査は、昭和 58(1983) 年度から昭和 60(1985) 年度にかけて島根県教育委員会と大田市教育委員会(以下「市教委」)が策定した「石見銀山遺跡総合整備計画」と同時に開始された。昭和 63(1988) 年からは市教委を主体として毎年継続して発掘調査を実施している。

平成 8(1996) 年度からは、石見銀山遺跡総合調査が開始し、平成 14(2002) 年にはその成果として、石見銀山遺跡の広域的な保存を目的とした史跡範囲の追加指定が行なわれた。その後、調査の進展と共にさらに保護措置の拡大が図られ、平成 20(2008) 年には、史跡指定総面積は 389ha となった。これまでの調査地点と調査の経過については Tab. 1 のとおりである。

## 第2節 平成 26(2014) 年度の調査

### 第1項 調査の概要

石見銀山遺跡の調査研究は平成 26(2014) 年度の調査で 30 年目となった。平成 26(2014) 年度は、銀山地区内の足布山谷地区と伝建地区内の宗岡家住宅の発掘調査を実施した。また、史跡・伝建地区内において小規模な発掘を伴う現状変更行為が発生した際には立会調査を随時実施し、遺構・遺物の記録を行なった。

足布山谷地区は、石見銀山の開発初期から利用が始まったとされる地域で、石見銀山の開発と居住の様相を明らかにすることを目的として、平成 22(2010) 年から発掘調査を開始した。発掘調査は本年度で 4 年目となる。本年度の発掘調査は、平成 24・25(2012・2013) 年度に断続的に実施した分布調査の成果を基に調査地点(足布山谷地区第 5 地点)を設定して実施した。本年度の発掘調査の結果、谷の中ほどで岩盤加工遺構が良好に保存されていることが明らかとなった。本年度検出された岩盤加工遺構は、江戸時代初期から利用されていたことが山上遺物から判明した。また、石垣で平坦面を構築している現在の地形は、18 世紀後半以降に形成されたことも明らかとなった。遺構としては、江戸時代末期まで利用されていた建物遺構が 2 軒と、明治期の藤山組に関連する可能性がある建物遺構が 1 軒検出された。また、建物遺構に伴って滑や軌跡などの遺構も検出された。

宗岡家住宅の発掘調査は活用を目的とした保存整備事業に先立ち、建物の修理や復原に必要な情報を得ることを目的として実施した。本年度は敷地内の東部を対象とした。発掘調査では納屋や庭施設の跡や、宗岡家以前の土地の利用状況を示す遺構が検出され、当初の目的であった保存整備に必要な情報が得られるとともに、土地の利用履歴の一部が明らかとなつた。また、下層確認によって、敷地内における地形の形成過程の一部が明らかとなるなどの成果が得られた。平成 27 年度には現在の主張が述べている敷地内中央部の製造を予定している。

立会・試掘調査は、本年度は 5か所で実施した。内訳は、立会調査が大森町で 3 件と温泉津町で 1 件、試掘調査が大森町で 1 件である。特に顕著な成果が得られたのは大森町の浄化槽設置工事に伴う試掘調査で、江戸時代初期の遺物を伴う遺跡面が 2 面検出され、当該期における活発な利用の様相が明らかとなつた。また、下層からは 13 世紀代に比定できる中性須恵器片や吉浦印模・磁器系の表などの遺物と、柱穴や土坑などの遺構が検出された。石見銀山遺跡において鎌倉時代の遺物の出土は初であり、これからのおよび重要な成果である。

### 第2項 指導関係及び公開事業

本年度の調査に關連して、大橋泰夫教授(島根大学)からは 5 月 29 日に宗岡家住宅の、10 月 9 日に足布山谷地区の発掘調査地別場において、調査方針などの講習会に關わる指導を頂いた。中村唯史氏(島根県立三瓶自然館)からは 7 月 30 日に宗岡家住宅の下層における堆積状況と建物の基礎に使用されている石材の種類について指導を頂いた。また、大橋謙一氏(佐賀県立九州陶磁文化館)からは 10 月 29 日に足布山谷地区的出土陶磁器についてご教示を頂いた。

公開事業としては、宗岡家住宅と足布山谷地区において、5 月 31 日に宗岡家住宅の、11 月 8 日に足布山谷地区的発掘調査地説明会を開催し、多くの見学者の来場があった。

Tab. 1 石見銀山遺跡調査一覧

年 度	西 暦	調 査	調 査 地 点	備 考
昭和 58 年	1983	発掘調査	①代官所跡、④成田寺口番所跡	石見銀山西跡総合整備計画の策定
60 年	1985	分布調査	大田市、瀬戸津町、仁摩町、邑智町、赤来町、大和村、羽須美村に所在する石見銀山関連遺跡	
63 年	1988	発掘調査	⑥船原守聞跡	
平成元年	1989	発掘調査	成田寺口番所跡、②向陣屋跡、⑩上市場	
2 年	1990	発掘調査	成田寺口番所跡、⑨大船寺谷、⑤旧河内家	
3 年	1991	発掘調査	⑤下河原吹屋跡	
4 年	1992	発掘調査	⑦山吹城跡下尾敷	
5 年	1993	発掘調査	⑩石銀千畳敷	
6 年	1994	発掘調査	石銀千畳敷	
7 年	1995	発掘調査	石銀千畳敷	
8 年	1996	発掘調査	⑫石銀腰帯	総合調査開始
9 年	1997	発掘調査	⑪宮ノ前、⑫出土谷、石銀藤田	
10 年	1998	発掘調査	⑬堀畑谷、石銀藤田、⑭於紅ヶ谷、⑮竹田	
11 年	1999	発掘調査	宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田、	
12 年	2000	発掘調査	宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田	
		分布調査	相子谷地区	
13 年	2001	発掘調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、⑬本谷、町並み保存地区(内 部家、熊谷家)	
14 年	2002	分布調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、本谷、町並み保存地区(内 部家、熊谷家)	
15 年	2003	発掘調査	宮ノ前、⑭下河原下郷、出土谷、本谷	
16 年	2004	分布調査	宮ノ前、本谷、港鶴集落、町並み保存地区	
17 年	2005	発掘調査	本谷、町並み保存地区(内家)	
18 年	2006	発掘調査	本谷、町並み保存地区(宗内家)	
19 年	2007	発掘調査	⑭安原谷、下河原、町並み保存地区(渡辺家)	世界遺産登録
20 年	2008	発掘調査	安原谷、町並み保存地区(柳原家、渡辺家)、清水谷 製錬所跡	
21 年	2009	発掘調査	安原谷、本谷、町並み保存地区(杉谷家、渡辺家)、清 水谷製錬所跡	
22 年	2010	発掘調査	安原谷、本谷、星布山谷	
23 年	2011	発掘調査	⑮星布山谷、石銀、町並み保存地区(旧大住家)	
24 年	2012	発掘調査	星布山谷	
25 年	2013	発掘調査	星布山谷	
26 年	2014	発掘調査	星布山谷、宗内家	

※ ○数字は 4 頁の地図上の番号



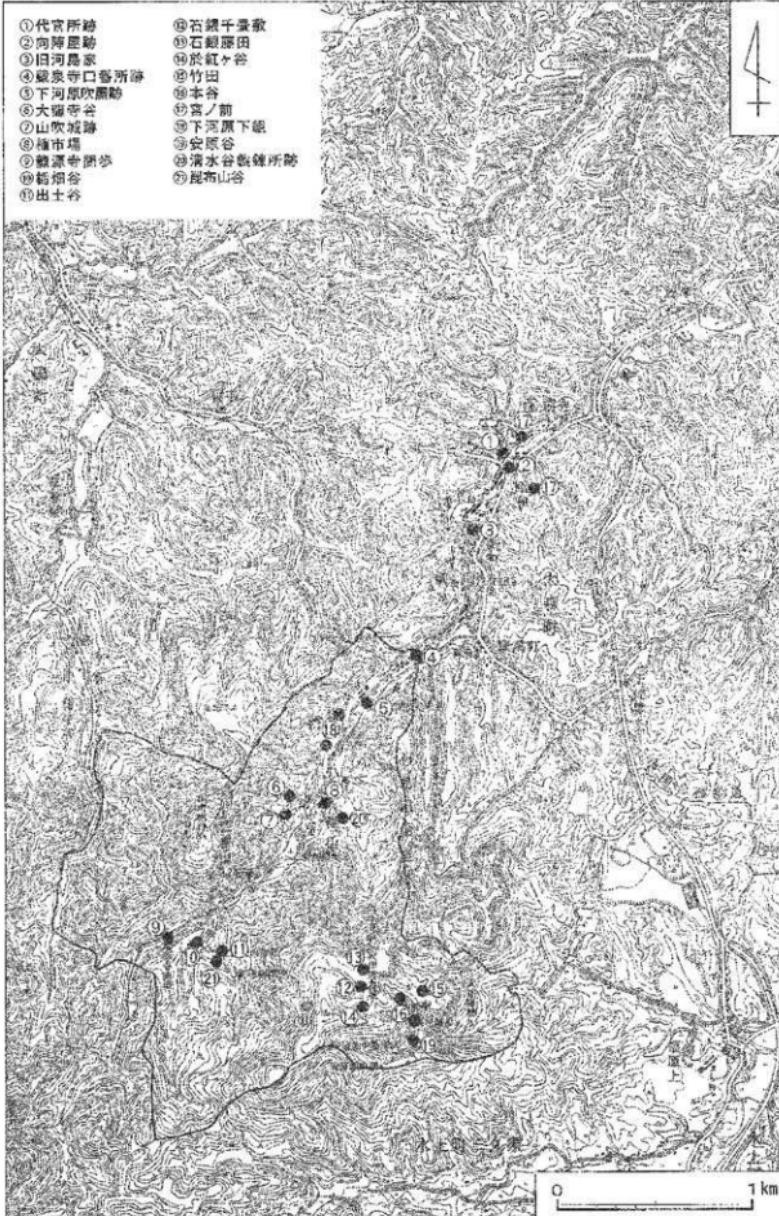


Fig. 2 石見銀山遺跡調査地点位置図 ( $S = 1 / 25,000$ )

## 第2章 昆布山谷地区の調査

### 第1節 調査地の周辺環境

昆布山谷は、巌山の核である仙ノ山の北西に位置している。谷の方角は、ほぼ北から南にかけて走っており、全長約600mである。谷の入口に当たる北側は、東西に走る筋屈谷と接し、東には尾根を挟んで昆布山谷と平行して南北に出土谷が走る。谷の東西には尾根が連なり、佐那丸山神社や長樂寺跡・虎岸寺跡などの寺社跡もある。周辺の尾根上には墓地が点在し、墓石の紀年銘は天文年間(1573~1593年)まで遡るものもある。

谷底の幅は約30~40mで、両脇は岩盤がむき出しになっている。岩盤には「新横相開歩」や「村上坑」を始めとする大小さまざまな坑口があり、70近くを数える。また、柱穴や岩盤を彫り込んだ洞などもある。

谷の入口から南に400m程度までは、中央に道と溝がある。道と溝は平行に走っており、石組で作られている。また、その範囲には谷の両側に段状の石垣が組まれている。これは敷地別の石垣とみられ、昆布山谷の集落跡と考えられる。こより南は渓がなくなり、急勾配の道を登って西側の尾根上の字名「本馬場」に達する。本馬場には、70m四方の広い平坦面がある。ここで谷は終わるが、道はそのまま急勾配で続き、萩崎口の番所跡推定地に到着する。ここを時として水上町の三久須方面に下る。

昆布山谷は、過去の文献史料にも多く登場している。例えば、「巌山日記」には「天文八年(中略)昆布山にて鉛を吹」や、「高野山淨心院過去帳」の「一、昆布山(中略)天文二十一年」などの奈町時代後期の記載がある。また、「安田家文書」には江戸時代中期の長樂寺周辺の様子が伺える絵図も残っている。近代の様子が分かる資料としては、明治20年から大正12年の休山まで石見銀山の開発を行なった藤田組(現、DOWAホールディングス)が、鉱山経営に関わる書類の控えや記録を纏めた「要書録」がある。要所録には、開発した土地の番地や建物の規模、年代などが詳細に記録されている。以上のように、昆布山谷は石見銀山の開発初期から隆盛、衰退を経て近代の再開

飛までに密接に関わっており、鉱業活動や鉱山生活を知る上で重要な谷といえる。

### 第2節 調査の概要

#### 第1項 過去の調査の経緯と成果

昆布山谷地区の近辺ではこれまでに佐那丸山神社を挟んで東側の出上谷地区や、隣接する筋屈谷地区で発掘調査を実施しており、16世紀後半にさかのぼる遺構・遺物や、18世紀後半の銅鉛鉄にも関わる遺構が検出されている。昆布山谷地区的発掘調査は、平成22(2010)年度から開始され、平成26(2014)年度で5年目である。これまでに4地点の調査が実施され、18世紀後半から近代にかけての資料が出土した。

#### 第2項 調査区の設定(Fig. 3・4、Tab. 2)

昆布山谷地区においてはこれまでの4年間で4か所の発掘調査を実施した。しかし、年度によって調査地点名が統一されておらず、混乱をきたしていた。そのため、まずは調査地点の名称を統一し、調査地点の整理を図りたい。調査地点は以下のように統一する。佐那丸山神社下地点を第1地点、長樂寺守下地点を第2地点、H 24-1トレンチを設定した場所を第3地点、昆布山谷2区を設定した場所を第4地点、そして本年度調査を実施した場所を第5地点とする。各地点においては、試掘段階ではトレンチ名を1から順に設定し、本格的に調査を実施する際には調査区を1区から順に設定する。ただし、第2地点についてはトレンチ名が第1地点からの継ぎですでに記載しているため、トレンチ名の再設定はせず、これまでのトレンチ名をそのまま使用する。各調査地点の位置はFig. 3に記載した。

以上を踏まえて本年度の調査地点と調査区について整理する。本年度調査を実施した地点は、昆布山谷地区第5地点(大田市大森町二270-1番地)である。第5地点においては、分布調査の段階で地表面に遺構の一部が露出していることが確認されていたため、遺構範囲の確認が不要であった。そのため、これまでの調査のようにトレンチ調査は行わず、調査対象範囲内に調査区を設定して発掘調査を実施した。

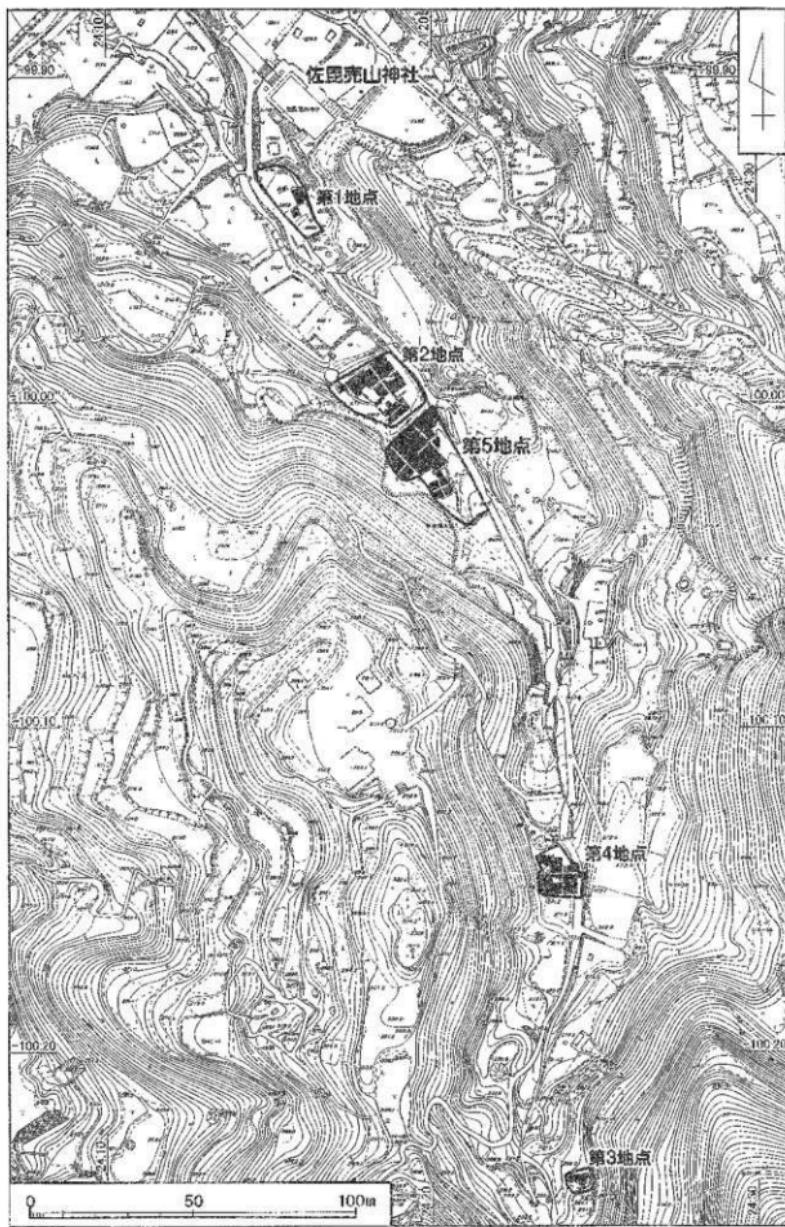


Fig. 3 昆布山谷地区調査点位置図 ( $S = 1 / 1,500$ )

### 第3項 平成26(2014)年度の発掘調査の概要(Fig. 3~5)

昆布山谷地区第5地点は昆布山谷の中ほどである。調査地点の南側には新横木上坑が、山道を挟んで東側には新横木下坑と呼ばれる坑口が所在する。

昆布山谷地区第5地点は、平成24(2012)年から平成25(2013)年にかけて断続的に実施した分布調査の際に、近代の遺物がほとんど確認できなかった地点である。加えて、現地表面上に岩盤加工遺構や石垣、礎石等の遺構が確認されていたことから、開発初期の様相までを明らかにできる可能性が考慮されていたため、発掘調査対象地とした。

調査に当たっては調査対象範囲内に1~5の調査区を設定し、各調査区をa~dの小区に分けて出土遺物の取上げなどを行なった。

調査期間は平成26(2014)年7月14日から11月21日で、調査範囲は当該地域内の約252m<sup>2</sup>である。

### 第3節 土区

#### 第1項 調査の概要

T区は石垣(SW02)によって構築された平坦面で、

広さは東西5.5m(約18尺)、南北15.5m(約51尺)である。調査区西側には階段状遺構や溝状遺構・水溜め・柱穴などが彫り込まれた岩盤加工遺構(SX02)がある。調査区内の一部には土層が厚く堆積しており、その中からは瓦や17世紀初頭の遺物などが出土した。これらは、調査区西側の斜面から流れてきた遺物とみられる。

発掘調査はまず地表面に厚く堆積した土を除去し、遺構面の検出を行なった。遺構面上を踏査し、遺構の有無及び範囲の確認をした後に、遺構に影響を与えないよう配慮して、I c区とI d区北壁沿いで下層確認を行なった。下層では岩盤加工遺構が現地表面よりも下まで続いており、江戸時代の初期から利用されていたことが、出土遺物より明らかとなった。また、土層断面で7面の壁面が確認できたことから、江戸時代をとおして何回か造営をしていたことが明らかとなり、現在の地形が形成されたのは18世紀後半以降と推定できた。

#### 第2項 層序(Fig. 6)

I区の堆積状態について報告する。各段地面の様相については次のとおりである。

Tab. 2 昆布山谷地区調査地点一覧

調査年度		旧地点名	新地点名	新地點名	調査区名	
		旧地点名	トレンチ名	新地点名	トレンチ名	調査区名
2010	H22	佐鹿丸山神社下地点	1T	第1地点	1T	
			2T		2T	
		長楽寺下地点	3T	第2地点	3T	
			4T		4T	
			5T		5T	
			6T		6T	
			7T		7T	
		佐鹿丸山神社下地点	8T	第1地点	8T	
			A区			I区
			B区			II区
			C区			III区
			D区			IV区
			E区			V区
			F区			VI区
2012	H24		H24-1 トレンチ	第3地点		
2013	H25		昆布山谷2区	第4地点		
2014	H26		昆布山谷2区	第4地点		
				第5地点		I区
						II区
						III区

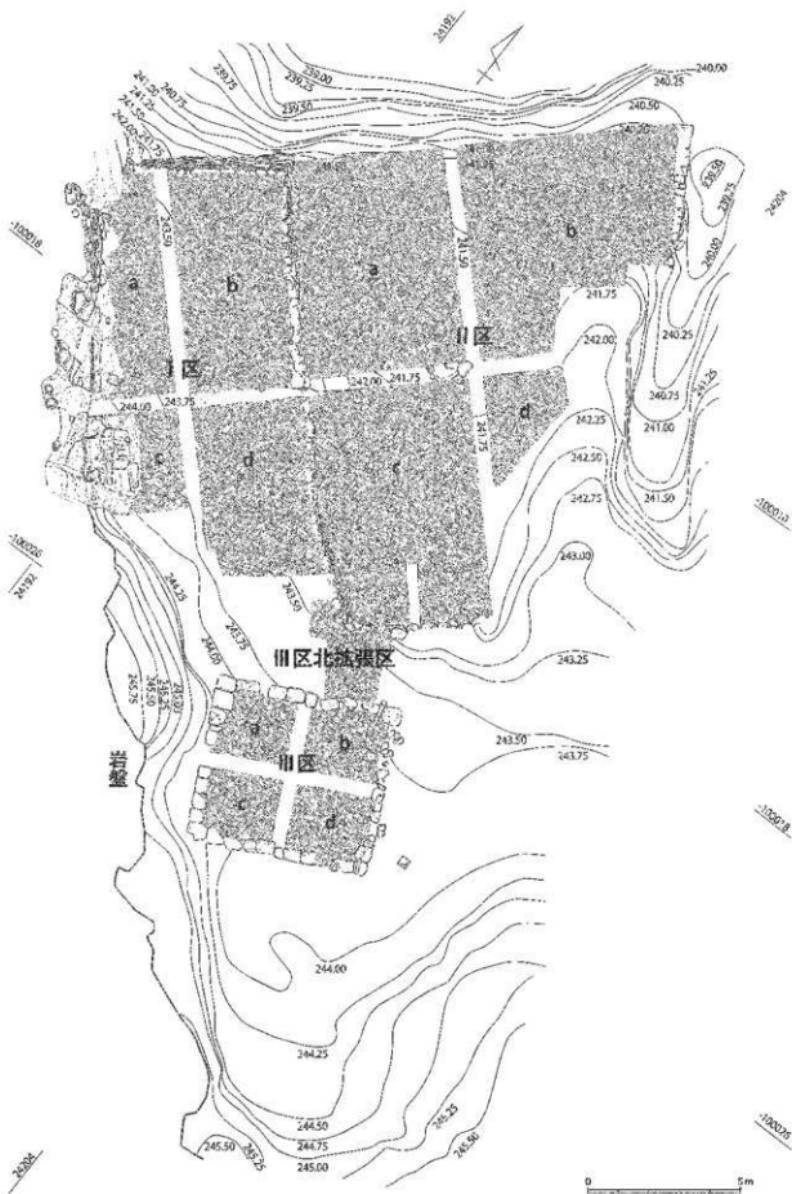


Fig. 4 民布山谷地区第5地点周辺地形図 ( $S = 1/160$ )

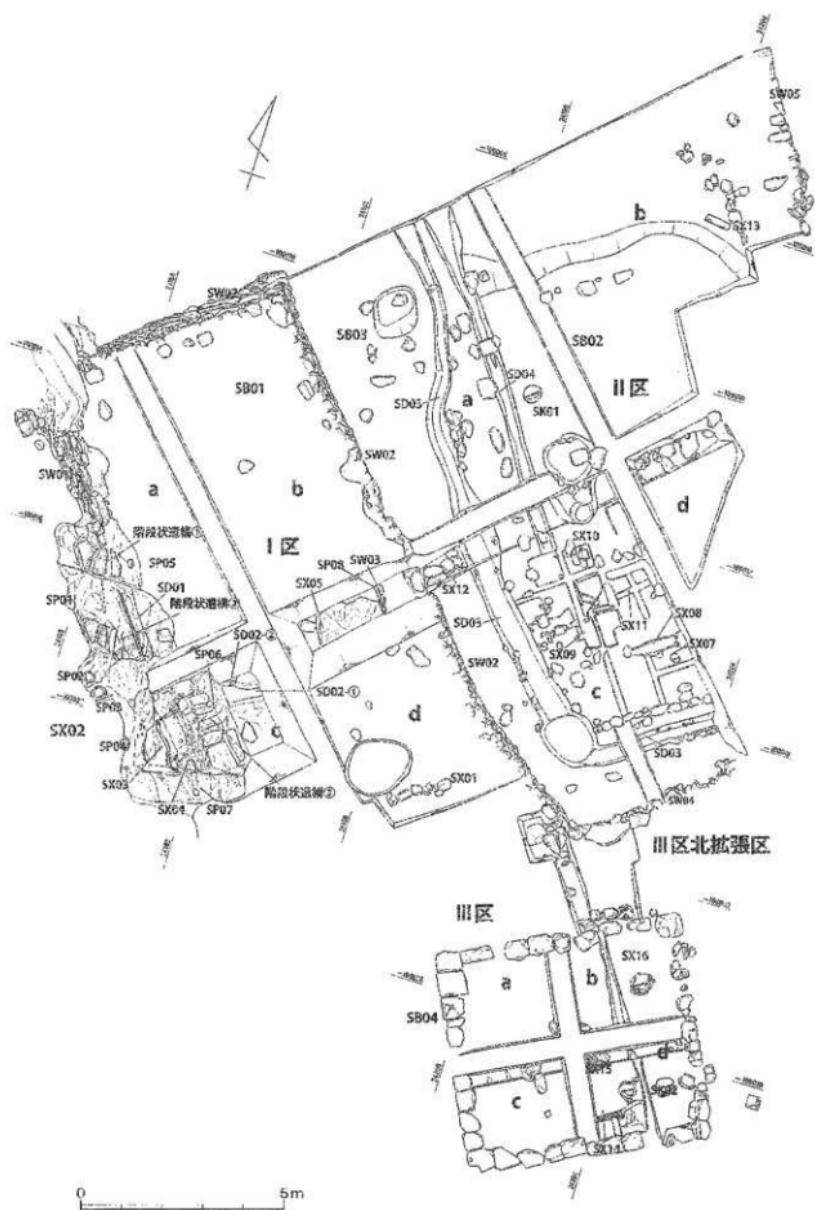


Fig. 5 昆布山谷地区第5地点検出遺構配図 (S = 1 / 120)

### 【第1面】

第4層上面である。明黄褐色粘質土で、上面には遺物遺構(SB01)がある。標高は243.5mである。造成土は探査時に排出されたズリを含む灰色土である。

上面から在地系陶器の蓋(15)や調製品(97・98)などが出土しているが、時期を明確に示すものはなかった。ただし、明治期の遺物はほとんど含まれていないため、利用時期は幕末までとみられる。

### 【第2面】

第9層上面である。標高は242.3mで、第1面から0.9~1.1m下で検出された。造成土は厚さ4~20cmで、ズリを利用したとみられる礫層である。第2面の上面から遺物は出土しなかったが、第1~第2面間の造成土内から18世紀後半の遺物(26)が出土していることから、現在の地形は18世紀後半以前に形成されたものと考えられる。

### 【第3面】

第13層上面である。標高は242.4~242.6mである。造成土はにじい黄色~黄褐色で、一部に小礫を多く含んでいる。第3~8面では遺物が出土しなかったため、それぞれが造成された年代は不分明である。

### 【第4面】

第15層上面である。標高は242.3~242.4mで、第3面から5~10cm下で検出された。造成土はしまりの強い黄褐色土である。

### 【第5面】

第17層上面である。標高は242.1mで、第4面から5~10cm下で検出された。表面は黒褐色でしまりが強く、造成土は灰オーラー色粘質土と一部に炭化物が混じる黒色土であった。上面から柱穴(SP08)が掘り込まれていることが断面で確認された。

### 【第6面】

第23層上面である。標高は241.6~241.9mで、東側に向かって下がっている。

### 【第7面】

第20層上面である。標高は241.5~241.8mで、第6面と同じく東側に向かって下がっている。

第7面よりも下位から検出された溶状遺構(SD02-①)の埋土から17世紀前半の肥前窯器(27)が出土している。

### 第3項 検出遺構(Fig. 5~8)

#### 【SB01】(Fig. 5, 6)

SB01は1区の第1面上で検出された礫石建物跡で、石垣(SW02)で嵩上げされた平坦面に建てられている。軸は南東方向で、西側の岩盤と平行になっている。調査区の南北部は竹根の影響で遺構面が擾乱されており、遺構は明確に確認できなかった。確認できた範囲での規模は東西4.8m×南北3.2mで、東西が三面、南北が二面である。東西の柱間については、中央が約105cm(約3尺5寸)で、中央以外は約184cm(約6尺)である。これまでに石見銀山遺跡で検出された建物遺構は6尺5寸を基準とするものが多かったが、SB01はその基準では短てられていない。礫石は圓丸形または不定形の扁平な割石で、大きさは北東側のものが約65×45cmとやや大きいが、それ以外は約35×30cm程度である。礫石上面の標高は243.4~243.5mで、高さはそろっている。内部に遺構を作わないため、遺物の性格は不明である。第1面上面における出土遺物から、幕末まで利用されていたものと考えられる。

#### 【SP08】(Fig. 5, 6)

SP08は1d区北壁で確認された遺構で、幅20cm、深さ60cmの柱穴である。埋土内には柱材とみられる木質が残っていた。第5面から掘り込まれている。

#### 【SW01】(Fig. 5~7)

SW01は岩盤溶洞(SX02)の北部に構築された石垣で、南北方向の幅約3.6mにわたって構築されている。高さは約2.9mで、最高点の標高は246.5mであった。岩盤にそって構築されており、岩盤を一部削って石材をはめ込みながら積み重ねている。表面での観察から、礫石を積み上げただけで嵩めではない。基底部は岩盤から積み上げており、1区の第1面よりも下がらないことから、1区が全て造成されたのちに構築された石垣と判断でき、18世紀後半以降に造られたものと考えられる。なお、基底部標高は243.6mである。

築石は周囲の岩盤と同質で、凝灰岩質の割石を使用している。最大のもので幅約80cmだが、多くは約20~50cmである。礫石の表面には豊富が残るものもあり、大きさや形をある程度調整した様子が窺える。上

部が後述する階段状遺構①と接していることから、上の平垣面に登るための通路を確保する目的で構築された石垣の可能性がある。

#### 【SW 02】(Fig. 5・6・8)

SW 02はI区の北面(北側)とI・II区の境(東側)に構築された石垣で、北側は幅約5.5m、東側は幅約15.5mである。東側は劣化が激しく、中央部の約4.5mの範囲と、北から2.5mよりも南側の天端が崩れていた。高さは約2.5mで、天端の標高は243.4mである。基底部はI区の第5面及びII区の第2面で、標高は241.1m～241.8mである。ただし、北東隅では240.8mまで下がっており、場所によって基底部の標高がやや異なっている。

築石はSW 01と同様に凝灰岩質の割石である。いずれの面でも幅40～70cmの大きな石と、幅20～30cmの小さな石を使用しているが、東側下部の約30cmの範囲は幅20cm程度の小さい石を使用している。また、築石の表面には傷痕が残るものも含まれている。

石積みは基本的に瓦積みだが、北東隅は算木積みである。石垣の角度は北側が約75°、東側が約80°で、いずれの面もやや内側に反っている。石垣の裏面には、最下段の梁石から西に最大で約90cmの範囲に粘土質土を詰めており、グリ石や砂利などはない。

#### 【SW 03】(Fig. 5・6)

深掘部の東端部分で検出された遺構で、約25×15cmの割石を南北に並べ、2段積み上げた遺構である。第7面から立ち上がりており、標高は基底部が241.4m、上端部が241.7mである。SW 02とは逆に西側に面を持っており、第7面の時期にはII区側を盛り上げて生活面としていた可能性がある。

#### 【SX 01】(Fig. 5・6)

SX 01は1d区南端部の第1面上で検出された石列で、幅30～40cmの角線を東西に並べている。縦5点で幅約1.6mだが、西側は土層が厚く堆積しており、調査が困難であったため、遺構の全体は確認していない。SW 02北壁と平行しており、SW 02北壁からSX 01の間を敷地としていた可能性がある。

#### 【SX 02】(Fig. 5～7)

SX 02はI区西側の岩盤に彫り込まれた岩盤加工遺構で、南北方向の幅約12.5mの範囲が加工されて

いる。彫り込まれた範囲には柱穴(S P 01～07)や階段状遺構・水溜め(S X 03)・溝(S D 01・02)などがある。最下部の溝(S D 02)埋土内で17世紀前半の肥前磁器(27)が出土したことから、江戸時代の初期頃から加工されていたことが明らかとなった。加工痕より、加工には器が使用されていたものとみられる。高さはI区の第1面から2.7m、最下部からは4.8mである。最高点の標高は、段差された範囲では246.2m、最下部は241.4mである。表面には多くの凹みが彫り込まれており、槓を架けるための機能などが想定される。岩盤には凹みのほかに柱穴も複数彫り込まれていることから、岩盤に沿うようにして建物か底があった可能性がある。

#### ①階段状遺構

階段状遺構は岩盤の中央部に2か所、両端部に1か所の計3か所が彫り込まれてあり、北から順に階段状遺構①・②・③とする。階段状遺構①・②・③のいずれにも槓による加工痕が見られる。

階段状遺構①はSX 02の北側に位置しており、岩盤に対して西側に約50°斜めになっている。段数は3段あり、1段目が標高243.9m、3段目が標高244.5mで、1段当たりの高さは約30cmである。また、幅は約40cmで、奥行は約20cmである。1段目は第1面から55cm離れており、一足で登るのはやや困難である。1段目の下には柱穴が設けてあることから、岩盤沿いに何らかの施設があり、そこから階段に上るようになっていた可能性もある。先にも指摘したように、SW 01と同様する可能性があり、第1面が形成されたのちにできた遺構とみられる。

階段状遺構②はSX 02の中央部に位置しており、岩盤に対して西側に約40°斜めになっている。段数は5段あり、1段目が標高244.4m、5段目が標高245.6mで、1段当たりの高さは20～30cmである。1段目は第1面から約1m離れており、階段状遺構①と同様に一足で登るのは困難である。1段ごとの幅は40～60cmで、奥行は20～30cmであるが、1段目は非常に小さく、幅30cm、奥行き20cmで、平面形は三角形である。

階段状遺構③はSX 02の南側に位置しており、SX 02と平行に彫り込まれている。段数は7段あり、

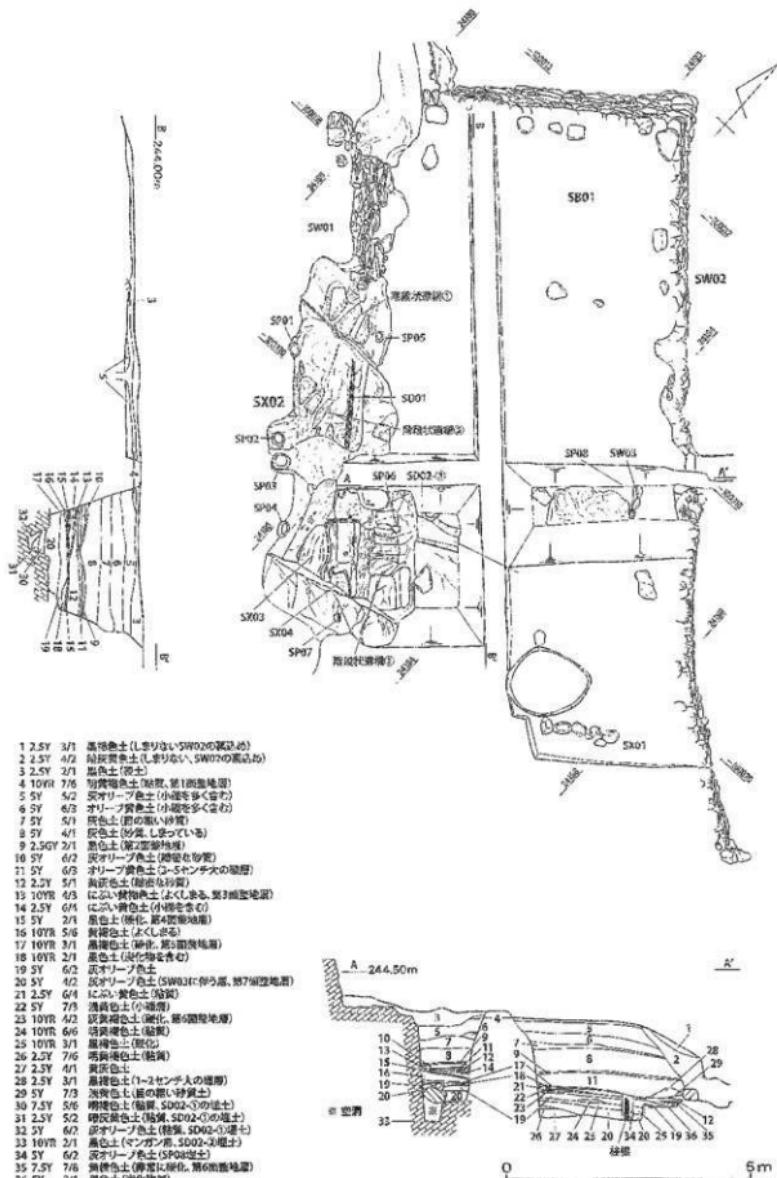


Fig. 6 星布山谷地区第5地点 I 区平面図・断面図 ( $S = 1/100$ )

1段目が標高242.6m、7段目が標高243.8mで、1段あたりの高さは10~30cmである。1段目はSX 02に直行しているが、2段目が踊り場状になっており、3段目からはSX 02に平行している。段の広さは1段目が幅約30cm、奥行き約20cmで、2段目が幅約55cm、奥行き約70cm、3段目が幅約60cm、奥行き約30cmで、4段目以降が幅約80cm、奥行き約20cmである。1段目の下方約20cmの第5面から平面が55×35cm、厚さ15cmの割石1点が出土した。第5面から階段に上るための踏石として利用されていた可能性がある。

途中に土蔵調査用扉を挟んでいるため明瞭ではないが、南段状造構②・③は本來一連の造構であった可能性もある。

#### ② SX 01

SX 01は階段状造構②の下に彫り込まれた幅約8cmの細い溝である。轍は西に35°の方向で、おむねSX 02に平行である。SX 02中央部分の約1.8mの範囲に彫り込まれている。標高は北側が244.145m、南側が244.037mで、南側が若干低い。溝としては非常に浅く、彫り込みの深さは1cm程度である。

岩盤加工遺構で導水の機能を持つ溝は安原谷地区や本谷地区で検出されており、SD 01も似たような機能をもつ可能性もある。

#### ③ SX 02

SX 02はI区の剥地表面から1.65m下の標高241.8m地点で検出された遺構である。岩盤に対して直行する東西に彫り込まれた溝(SX 02-①)と、岩盤に沿って南北に彫り込まれた溝(SX 02-②)がL字形につながる部分が横山された。SX 02-①は上部の幅55cm、底幅25cm、深さ30cmで、断面は逆台形である。検出範囲での様相から、東方向に延びているが、どこまで続いているのかを確認することはできなかった。埋土から17世紀前半の遺物(27)が出土した。

SX 02-②はI区北壁の新面で確認された遺構で、暗渠状になっていたため、方向が分かる状態であった。幅36cm、深さ40cmで、断面は長方形である。確認できる範囲では溝の上部に溝があり、暗渠状になっていたため、溝内に埋土はほとんどなかった。検出さ

れた範囲での様相から、SD 02-②は岩盤沿いにSW 02北面付近まで伸びている可能性もあるが、現状のSW 02北面では確認できない。

#### ④ SX 03

SX 03はSX 02南端部に位置する水溜め状の遺構で、標高は243.9mである。平面形は三角形で、最も長い辺が1.1m、奥行きが60cm、深さ15cmである。北端部に切り込みと東側に虹びる溝がある。SX 03西側の岩盤から流れてくる水を利用しているほか、SD 01から水を引き込んでいた可能性がある。

#### ⑤ SX 04

SX 04はSX 03の南東、標高243.8mに位置する。平面形は三角形で、幅60cm、奥行き40cm、深さ2cmである。機能としては水溜めなども考えられるが、彫り込みが浅く、周囲に廻連する施設もないため、用途は不明である。

#### ⑥ SP 01~07

SX 02内の岩盤上部の標高245.6~245.8mの範囲(SP 01~04)と、第1面付近の標高243.5~243.6mの範囲(SP 05~07)に彫り込まれていた。平面形はいずれも円形または溝丸方形で、SP 01~04は径約30cm、SP 05~06~07は径約20cmである。SP 01~02~04は約185cm間隔で直線に並んでいるため、一連の造構である可能性が高い。

#### 【SX 05】(Fig. 5・6)

SX 05はI区の下層岸認トレンチの最下面で検出された岩盤加工遺構である。西端部が西側に向かって1段深く彫り込まれ、その縁が被熱して色調が赤色~暗赤色に変化している。被熱した深さを調べることはできなかったが、平面での被熱輪郭や色調の変化具合から、一時的または短暫的な利用は想定しにくい。製鍊に関わる遺構の可能性が考えられるが、火を利用してした探査も検討される。

#### 第4項 山土遺物(Fig. 15~20, Tab. 3~5)

遺物としては陶器類や瓦、かなめ石や石造物などの石製品、斧や切羽・錢貨などの金属製品が出土した。出土した陶器類には広域に流通していた肥前や都戸などのほか、在郷系の陶器も含まれていた。また、点数は少ないが造土内から古い時期の輸入磁器(19・22)も出土している。

### 【馬頭磁器】

#### ①軽前磁器

碗(3・21・23・24・26・47)、皿(27)、鉢(4)、すり鉢(86)などが出土した。3は体部外面に唐か壺の文様が、口縁部内面に磨れた雷文がある。47も同様の偏体だが、接合はしない。文様の書き方も異なっているため、同一個体ではないとみられる。23は底部に「高貴長寿」の文字が記入され、見込み部には二重の圓線の中に文様がある。24は京焼風で、底部が露胎しており、直部と体部の境が段状になっている。外表面部には松葉の文様がある。26は外青磁で、外表面に青磁釉がかかっている。口縁部内面に四方連文があり、見込み部には二重の圓線とコンニャク自判による五弁花纹がある。18世紀代に比定できる遺物で、

第1～第2面の間の造土内から出土した。

27はSD 02-①の埋土から出土したもので、SD 02の年代を示すものと考えられる。見込み部に植物の文様がある。復元底であるが底部径が4.4cmと小さく、唇付を輪削ぎしていることや底部を押し上げていることなどの特徴から、17世紀前半のものとみられる。

4は体部外面には大小の丸文がある。口縁部内面が輪削ぎされていることから、壺がつくものとみられる。

#### ②肥前陶器

碗(9)、皿(10)、皿(8)、鉢(11)、灯明皿(14)などが出土した。

9は盤付けのみ輪削ぎし、見込み部には旋の目輪削ぎが見られる。8は見込み部に胎土目があり、二口月

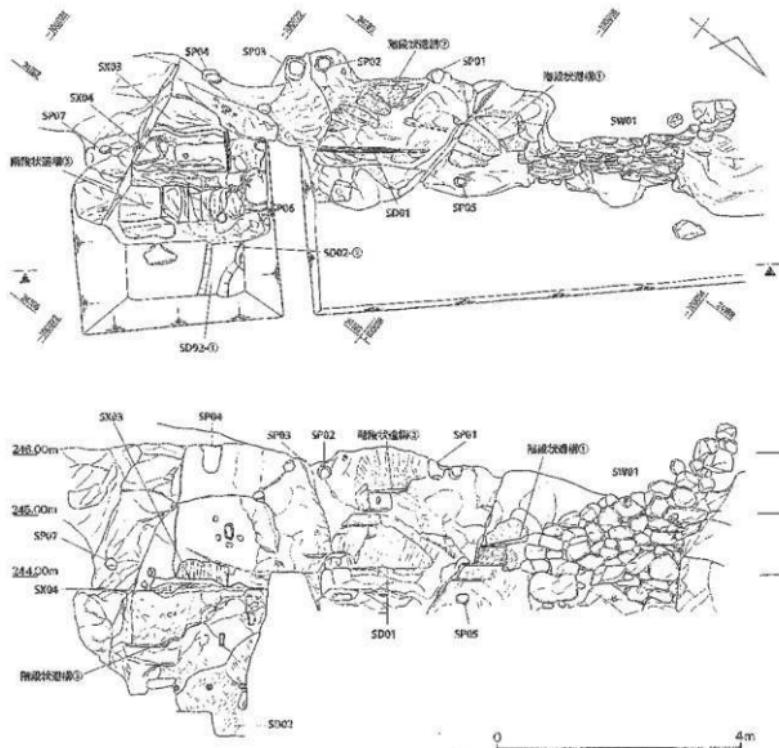


Fig. 7 昆布山谷地区第5地点Ⅰ区SX 02平面図・立面図 (5 = 1 / 80)

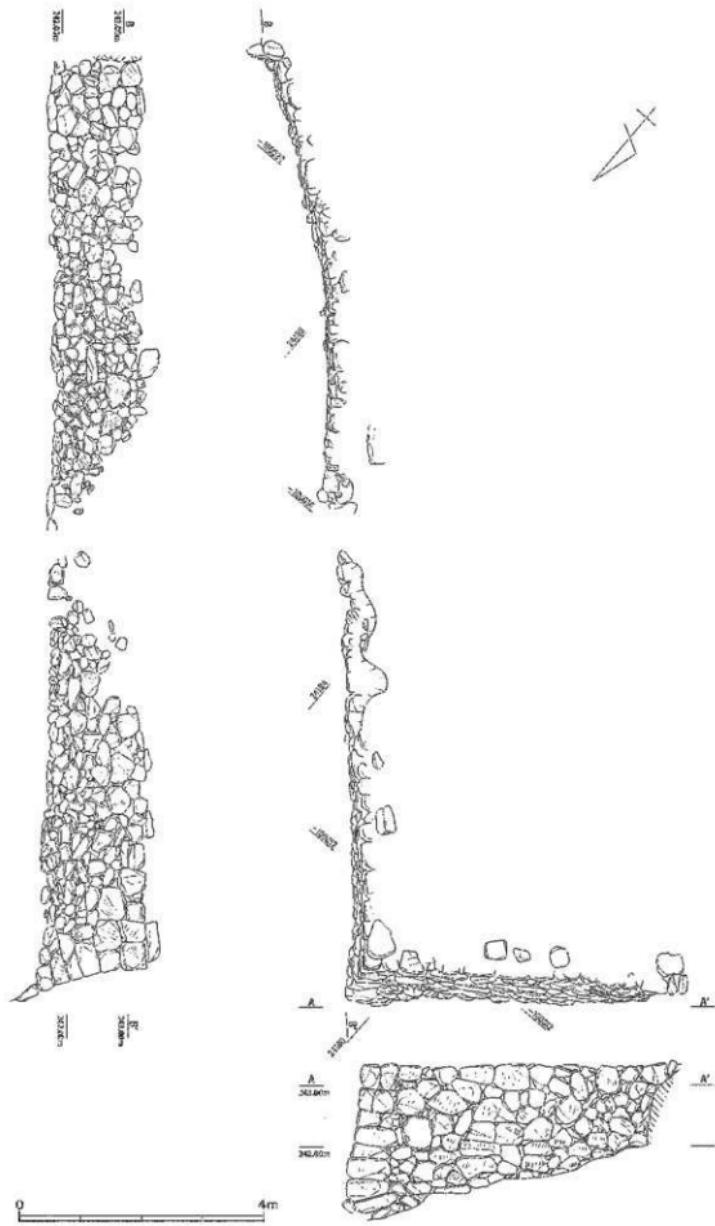


Fig. 8 晃布山谷地区第5地点I区SW 02 平面図・立面図 (S = 1 / 80)

高台を持つ。8・9は17世紀前半の資料だが、8は表裏によるもので、9は表上から出土したものであるため、I区の各遺構の時期を反映するものではない。I区ではこれら以外にも表土層や淀土内から17世紀前半の資料がいくつか出土しており、調査区西側からの流れ込みがあったものとみられる。

#### ③瀬戸、不明磁器

6は縁反碗の蓋で、瀬戸の可能性がある。体部外側に折枝の牡丹がある。また、見込みにも文様がある。7は瀬戸・美濃の皿で、内面にトテンの跡がある。37は肥前磁器または瀬戸の碗で、見込み部に文様がある。7の瀬戸・美濃は16世紀末の遺物である。

#### ④在地系陶器

15は銅の蓋で、外側に飛鯨による文様がある。

#### ⑤その他の磁器、湯器、土器

19・22は青花の皿で、19は1c区の第7層から、22は1d区の第5～8層から出土した。16世紀末～17世紀初頭に比定できる遺物だが、5～8層はいずれも第1面から第2面の間で、第1面が18世紀後半以降に造成されたと考えられることから、造成の年代を示してはいないとみられる。

12は発もしくは窓で、胎土や種類の特徴から信楽とみられる。

1・25は土質質土器で、1は皿、25は焰焰である。

85は須佐のすり鉢で、I・II区境のSW 02から出土した。

#### 【瓦】

91・92は焼瓦、93は軽瓦である。91は軒平瓦で瓦当面には唐草の一部と蓮の文様がある。瓦当面の一郭を面取りしており、丁寧な作りである。92は軒根瓦で、瓦当面の文様は中央に蓮のある均正唐草文である。文様の横に「上」のスタンプがある。このスタンプは製品管理に関わる印や、製作された窯を示すものなどが考えられる。圓化していないが、「上」以外に六角形のスタンプのある資料も出土している。93は來特輪のかかった軒根瓦で、瓦当文様は中央に楕の葉を配した均正唐草文である。

#### 【石製品】

94は凝灰岩(福光石)製の石造物で、形はほとんど立方体である。3面に瘤みがあるが、いずれも二次

的につけられたものとみられる。石見銀山遺跡内では竹田地区で94と同様に岩石の一部を瘤ませた石製品が出土しており、巣石の崩壊に使用された可能性が指摘されている。

95はかなめ石で、両面にそれぞれ10か所、5か所の凹部がある。

#### 【金属製品】

96は鉄製の斧で、上端部に柄を入れるための四角い穴がある。97・98は銅製品で、97は一枚板を丸めて成形した水差などの注口である。98は非常に小さい切羽で、脇差や小刀につけられていたものとみられる。100・107は寛永延寶で、いずれも新寛永である。

#### 第4節 II区

##### 第1項 調査の概要

II区はI区の東側に位置し、東側は水路と溝に面している。調査前から地表面に礫石の一帯が露出しており、建物遺構(SB 02)が存在することが明らかであった。調査によって4枚の擦地面とそれらに伴う遺構が確認された。

##### 第2項 層序 (Fig. 9)

第II区で確認された各整地面の様相は以下のとおりである。

#### 【第1面】

第3層上面で、表土直下で検出された。標高は241.70～241.82 mである。第1面はIIc区東壁の北部とId区北壁では確認できるが、調査区の西半部で表土付近が一部擾乱されており、不明瞭になっている。また、調査区北半部と南半部においても不明瞭である。

#### 【第2面】

第8層上面で、第1面から約5cm下で検出された。標高は241.70～241.80 mである。SB 02などのII区で検出された遺構の多くは第2面に伴う。また、I・II区の境に位置するSW 02も第2面から立ち上がりっている。上面及び第1面の堆積層内から広東碗や壺反碗などの磁器や、在地系の陶器類が多く出土している。広東碗は出土数が少なく、壺反碗が主体となっていることから、19世紀前半～19世紀中頃まで利用されていたと考えられる。

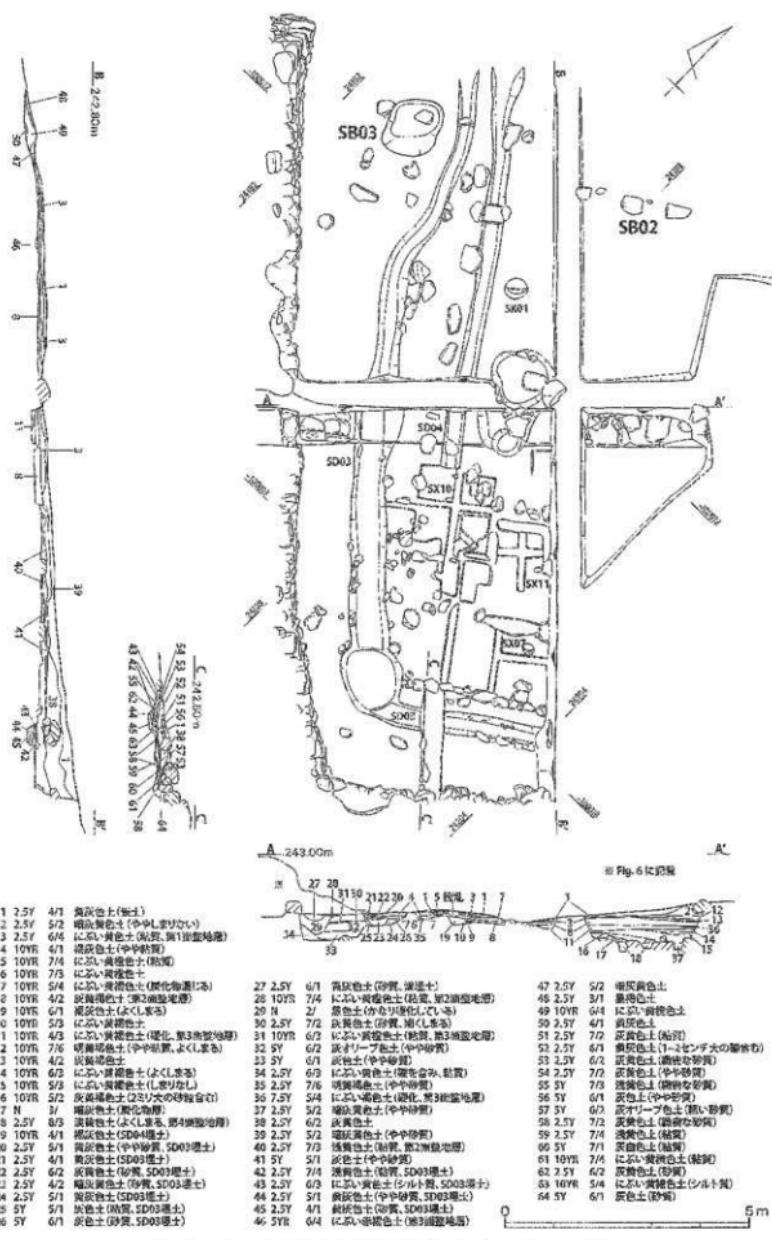


Fig. 9 昆布山谷地区第5地点II区平面图·断面图 ( $S = 1/100$ )

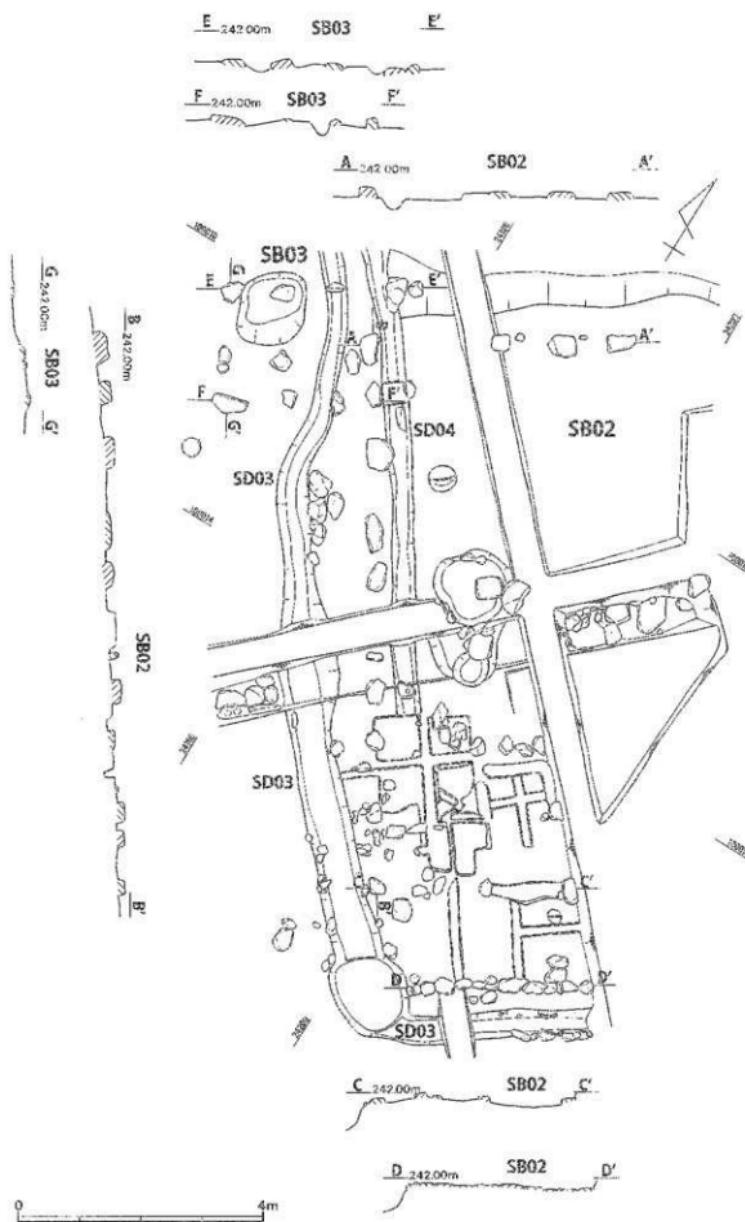


Fig.10 昆布山谷地区第5地点II区SB 02・03 平面図・礎石断面図 ( $S = 1/80$ )

### 【第3面】

第11層上面で、第2面から約10cm下、標高は241.54mである。II c区北壁の一部とII d区北壁で確認した。第2面からの堆積層を掘り下がった部分で確認されたため、面的な広がりは明らかではない。出土遺物(35)より、18世紀後半から利用されているとみられる。第1~3面はそれぞれ下位の整地面の直上を整地しており、各整地面の間に堆積層を挟んでいない。第1面までは時期幅が少ないとや、大規模な土地の改変が確認できることなどから、第3面から第1面までは連續して利用されていた可能性がある。

### 【第4面】

第18層上面で、II d区北壁及びII c区北壁の下層確認トレンドで確認された。直上の第17層は炭層であった。第3面から約25cm下で、標高は241.2~241.3mである。面的な広がりは確認できていないが、第3面との間に堆積層をいくつか挟んでおり、第3面まではある程度期間が窓いていた可能性がある。堆積層から遺物はほとんど出土しなかった。

### 第3項 検出遺構 (Fig. 5・9~12)

#### 【SB 02】(Fig. 5・9・10)

SB 02はII区の中央部、II a~c区にまたがって検出された礫石跡である。長辺は約10.5m、短辺は確認できた範囲では4mだが、遺構面が東に向かって広がっており、6m程度まで大きくなる可能性が強い。柱間は最辺が八間、短辺が四間以上で、礫石同士の間隔は約0.8mである。建物内にはSD 04やSX 07・09~11が、建物外にはSD 03など、多くの遺構を伴っている。床面を部分的に補修している様相が、堆積状態から確認された。SB 02に伴って壇反襻(29・30・32)が出土しており、19世紀前半から19世紀中頃まで利用されていたものとみられる。

#### 【SB 03】(Fig. 5・9・10)

SB 03はII a区の北西端部に位置する小規模な礫石跡である。長辺約3m、短辺約2mで、柱間は長辺が三間、短辺が二間である。遺構西側の一部がSB 02と重複しているが、礫石の一部がSB 02の床面よりも下にあることから、SB 02よりも古い遺物と判断できる。内部に遺構を伴わなかったため、性格は不明である。

#### 【SD 03】(Fig. 5・9・10)

II a~c区で検出された溝状遺構である。SB 02の周りを問のように配されており、北端部は法面まで延びる。機能としては、SB 02に雨水などが入らないようにするための排水溝などが想定される。幅は40~75cmで、深さは約20cmである。地面を掘りくぼめただけで敷石はされていないが、縁の一部で10~15cmの円溝が検出され、少なくとも一部の縁には石が並べてあったものとみられる。SB 02の周りを巡るほか、SB 02内のSX 10にも取りつく溝が伸びており、溝冲する遺構とみられる。II c区の南部では一部が後世のかく乱によって埋められている。また、II c区北壁付近では溝の縁に杭の跡が50~80cm間隔で残っており、板橋がかけられていた可能性がある。堆土内からは壇反襻(38)が出土しており、19世紀初頭~19世紀中頃の遺構と判断できる。また、石見系陶器などの在地系陶器(39、40、41、44、45)も出土している。

#### 【SD 04】(Fig. 5・9・10)

SD 04はII a~c区のSB 02内で検出された溝状遺構で、SB 02西壁と平行している。幅は35~40cmで、調査区北部の法面付近では約65cmまで広がっている。深さは約15cmでSD 03に比べてやや小さい。北端部は法面に、南端部は後述するSX 10につながっている。

#### 【SK 01】(Fig. 5・9・11)

II a区の東壁沿いで検出された直径47cmの円形の土坑である。深さは12cmで、断面形は皿形である。埋土には炭化物が多く含まれてあり、黒色を呈しているが、土坑内及び周囲に被焼痕はなかった。炉跡ではないが、埋土内から遺物が出土しなかったこともあり、性格を明らかにすることはできなかった。

#### 【SX 07】(Fig. 5・9・11)

II c区の南東部で検出された円形の遺構である。直径は23cm、深さは9cmで、断面形は皿形である。底面には厚さ1cm程度の炭化物層があり、その上に黄褐色粘土質土をかぶせている。底面に炭化物を敷いていることから、製錬炉とみられる。遺構の周囲に粘土を敷いて埋める典型的な炉の構造である。粘土質は商業された時に炉を埋めるためのものとみられる。

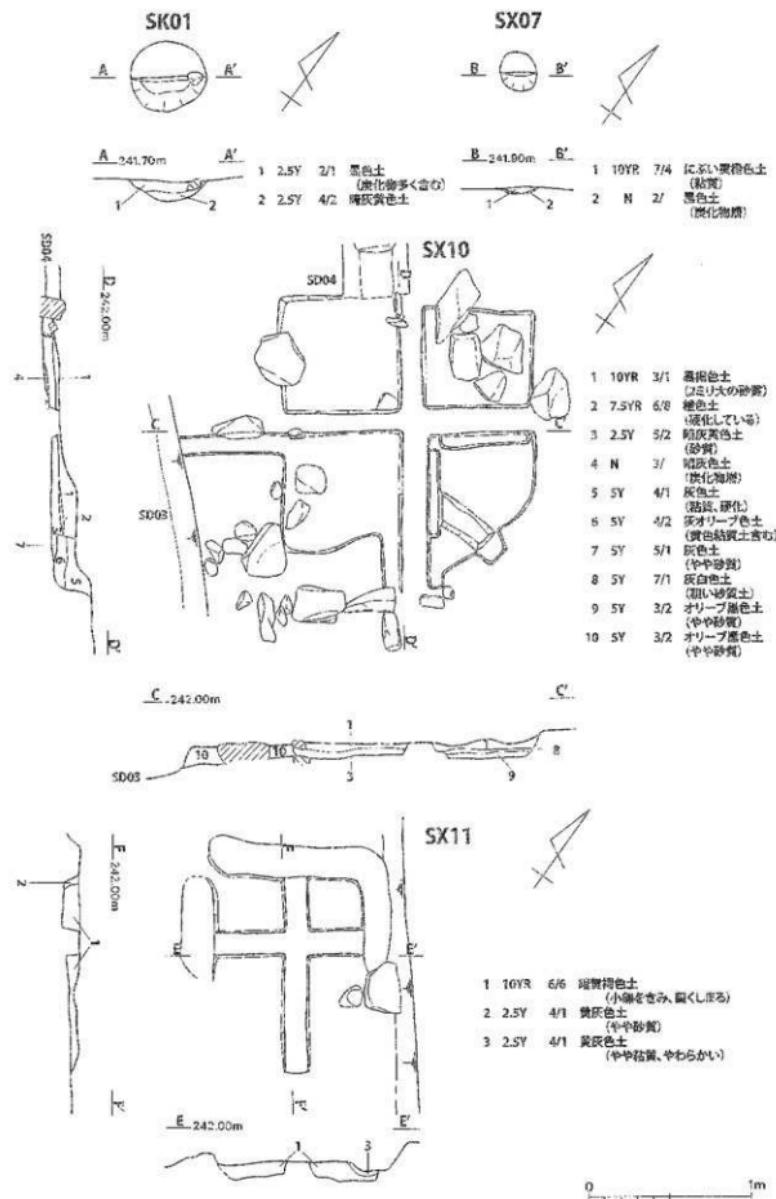


Fig.11 昆布山谷地区第5地点II区SK01・SX07・10・11平面図・断面図 (S=1/30)

### 【S X 08】(Fig. 5・9)

II c 区の東部、S B 02 の礫石の間で検出された溝状の遺構である。幅は約 35cm、深さは約 20cm である。礫石の間をつなぐようになっており、壁の下部廻透とも考えられる。

### 【S X 09】(Fig. 5・9)

II c 区の中央部で検出された。赤褐色の頗る面を層状に明き詰めた遺構で、遺構面から 10cm 程度高くなっている。平面形は約 1.4m × 0.9m の長方形で、長辺の中央部に幅約 10cm、深さ約 10cm の溝があり、東西に分かれている。前の側壁は直立に立ち上がっており、板状のものが嵌まっていた可能性がある。北側の反対には壁が並んで埋め込まれていた。遺構内からは肥前陶器(48) や、ガラス剣とみられる遺物(99) が出土しているが、肥前陶器は 16 世紀末から 17 世紀初頭に比定できる古い遺物のため、流入したものと判断される。これら以外にも磁器片が数点出土しているが、小片のため掲載しなかった。

### 【S X 10】(Fig. 5・9・11)

II c 区の S B 02 内で検出された遺構で、平面形は一辺約 155cm の方形で深さは約 10cm である。地面を掘りくぼめて作られた遺構で、床面は硬化している。北側に法面まで延びる S D 04 が取りついでいる。また、S X 10 の西側には S D 03 に延びる溝が、南北部分には S X 09・10 の方向に延びる溝が漏られており、それらが連通する遺構であった可能性があるが、現状では性格は不明である。類例の検出が待たれる。地中内からは肥前陶器(50) が出土した。

### 【S X 11】(Fig. 5・9・11)

II c 区の東部で検出された。東部の一部が東壁内にかかっているため全体の検出はできていないが、検出範囲では外側が東西 65cm、南北 44cm、内側が東西 92cm、南北 55cm、深さは約 10cm である。遺構の南側はなだらかに立ち上がっており、遺構面と明瞭に区別できなかった。掘り込みの周囲は灰色の硬質土を有するコの字形に成形しており、遺構内には小砾を多く含む固い明黄色土がつまっていた。附近に炭化物や焼土の散布はなかったが、遺構の周囲 10cm 程度のコの字形の範囲が硬化しており、使用に伴って変化した可能性がある。遺構の用途は不明である。

### 【S X 12】(Fig. 5・9)

II c 区の北東端で、東西ベルトの間に設置したサブトレーンチ内で検出された遺構である。第 2 遺構面からは約 50cm 下位となり、標高は約 241.3 m である。一辺 40 ~ 50cm 程度の上面が平らな石を敷き詰められており、石敷き遺構と考えられる。トレーンチ内では 4 個が検出されており、かなめ石を転用したものを見られる。検出範囲が狭小なため、石敷きの全体規模は不明であるが、検出レベルから第 4 面に伴う遺構の可能性が高い。

### 【S X 13】(Fig. 5・9)

II b 区の北東端で検出された遺構である。30 ~ 60cm の隙を東西方向と南北方向に並べた遺構で、検出された範囲では東西方向は縦 2 倍で幅約 1.4m、南北方向は縦 5 個で幅約 1.7m である。遺物の散在を区画するための石列とみられ、S W 05 と S X 13 の間は幅約 1.3m の通路状になっている。東西方向の石列には中央部に隙間があるが、本来は石を置いていた可能性がある。

### 【S W 04】(Fig. 5・9・12)

S W 04 は II 区南端部に構築された幅約 4.4m の石垣で、上半は崩れている部分が多い。S W 02 の東側と直角に接してあり、II 区北端の区画を広げる際に構築したものとみられる。高さは約 1.2m で、最高点の標高は約 242.3m、基底部の標高は約 241.6m である。

築石には凝灰岩質の割石を使用している。大きさは幅 20 ~ 40cm で、積み方は乱積みである。S W 02 の基底部よりも高い面から積み上げられており、S W 02 に後出する遺構である。

### 【S W 05】(Fig. 5・9・12)

S W 05 は II b 区北東端部の幅約 5.2m にわたって構築された石垣である。高さは約 1.3m で、最高点の標高は約 243.0m、基底部の標高は約 241.7m である。調査区東側の道と II 区の平坦面を区画するための石垣の可能性がある。

築石には S W 01・02 と同様に凝灰岩質の割石を使用している。築石のほとんどは不定形だが、表面には繊の痕が残るものもあり、大きさや形をある程度調整した様子が窺える。築石の多くは幅 30 ~ 80cm で、隙間に幅 10 ~ 15cm の小砾を詰めている。石積みの

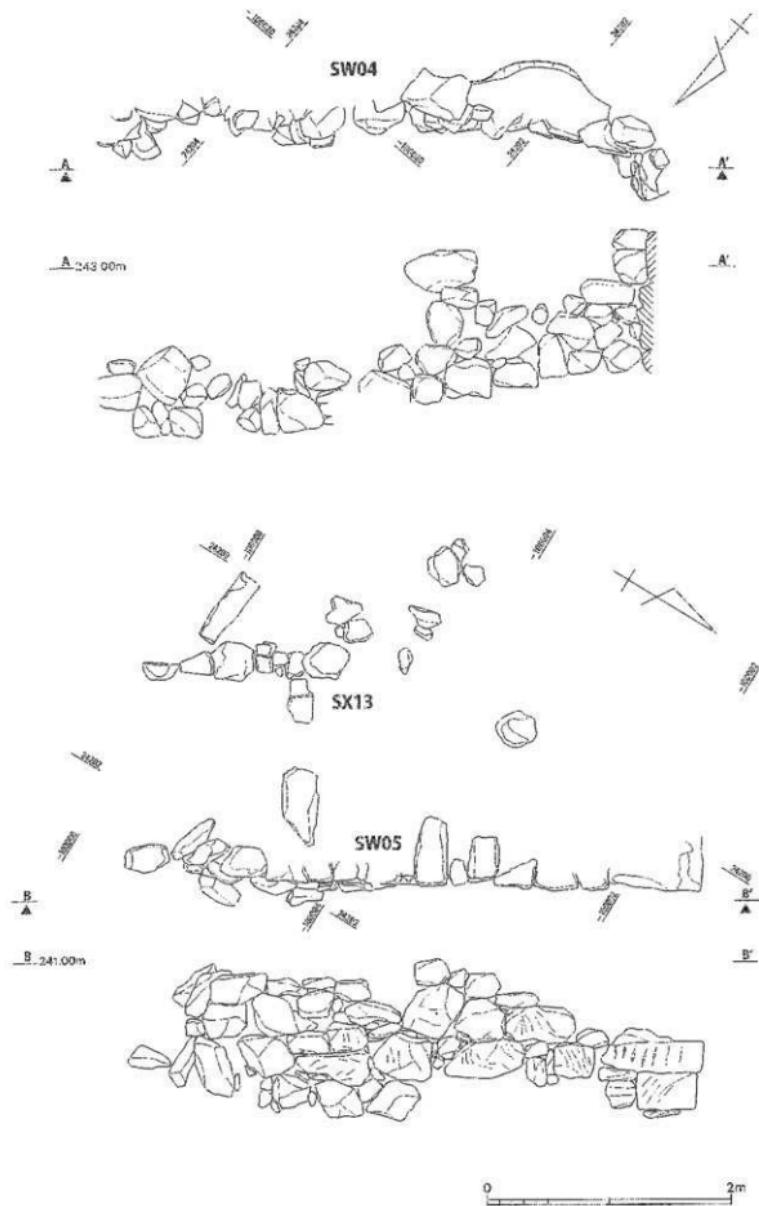


Fig.12 昆布山谷地区第5地点II区 SW04・05 平面図・立面図 ( $S = 1/40$ )

前面は割合整えられており、高さを調節しながら積んだ過程が窺える。北端部は四角形に成形した石を重ねて縫部を整えており、真木積みとしていた可能性が高い。見込めにはズリとみられる小理と粘質土が詰まっていた。

#### 第4項 山土遺物 (Fig.15-16・18~20, Tab. 3~5)

遺物としては陶磁器類と錢貨が出土した。陶磁器類には広域に流布していた肥前や瀬戸などのほか、石見系陶器などの在地系陶器がある。

##### 【陶磁器類】

###### ①肥前磁器

肥前磁器では、碗(16・17・30・35・36・37・38・51・52・53・54・63・69・70・77・78)、箭(5・49・50・65・71・79)、皿(28・55・60)、鉢(31・64)、紅皿(18)などが出土した。

35は外青磁で、口縁部内面に荒い四方彫文がある。30・36・38・51・52・54・70は壇反鏡である。30には口縁部内面に唐文帯があり、体部外面には筋の文様と溝・唐文がある。一部に焼継による補修痕がある。51は口径9.2cmで、普通のものに比べてやや小型である。体部外面と口縁部内面に櫻描きの波形の文様があり、見込み部には櫻描きの波形文様を六角形にあしらっている。52は口縁部内面に溝の文様があり、その上下に二条ずつ圓線が巡っている。見込み部には一条の圓線と文様がある。54は体部外面と口縁部内面に櫻模文がある。また、見込み部にも文様がある。70は文様構成が52と類似している。外面上には手描きによる丸文が8個ある。口縁部内面に溝の文様があり、その上下に二条ずつ圓線が引かれている。見込み部には一条の圓線と文様がある。69・77は広東碗である。69は口縁部の内外に二重の圓線があり、体部外面上には唐子と牛の絵がある。77には、体部外面上下に反転した花の文様がある。また、見込み部にも文様がある。

5・49・71・79は広東碗の蓋である。5には体部外面上とつまみの内側に文様がある。つまみは径が5.0cmと大きい。見込み部には一条の圓線がある。71は外面上に唐草文がある。つまみが大きく、丸く立ち上がる。79には体部外面上に龜の文様が、口縁部内面に四方彫文がある。50は段重の蓋で、口縁部に段がある。

文様は体部外面に丸文と二重の圓線がある。65は外周全体に花とつぼみの文様が3個ずつあり、内面には唐文と二条の圓線、見込み部には崩れた松竹梅の環状文がある。また、内面には焼成時に付いた段がみられる。松竹梅の環状文は18世紀後半からよく見られるが、この資料では文様が崩れている。そのため、時期的にやや下るものと考えられ、端反鏡の時期に比定できる。

55は輪花の皿で、見込み部に花と蝶の文様がある。60は大皿で、蓋付けが難削ぎされ、内面の全体に文様が描かれている。55・60にはいずれにも焼継による補修痕がある。

31は船の型四形高台を持つ鉢で、体部外面には唐草文様、体部内面には花と蝶文、見込み部には唐草の文様がそれぞれ描かれている。文様のタッチは荒い。64は型打成形による鉢で、有田の可能性がある。一部に焼継による補修痕がある。

###### ②肥前陶器

皿(48)、鉢(82)などが出土した。

48は底部が解説し、底部附近に段がある。内面には胎上目があり、製作年代は16世紀末~17世紀初頭とみられる。

###### ③瀬戸、不明磁器

碗(29)、小坪(2)、蓋(32)が出土した。

29・32は瀬戸である。29は壇反鏡で、外面上には竹の文様がある。口縁部内面と見込み部にも文様がある。2は器形が非常に薄く、内面には赤と金の上絵付けによる文様がある。32は壇反鏡の蓋で、外面上部は二本の直線と円形と三角形で構成される区画帯で五つに区画され、区画の中に花と溝の文様がある。口縁部内面には四方彫文が変化したような連続する三角形の文様がある。また、見込み部にも文様がある。2は瀬戸の可能性がある小碗で、内外に七輪付けによる文様がある。

###### ④在地系陶器

蓋(76)、皿(40・73・74)、鉢(41・61・68)、甕(45)、小甕(75)、瓶(33・58)、土瓶(62)、水注(44)、灯明皿(39・66・67)などが出土した。

40は皿で、内面に四条の櫻描き文があるほか、体部外面上に墨書きで「〇」を描いている。73は外面上に

たし、内面に3か所脂土目がある資料で、口縁部外側にススが付着していることから灯明皿として使用されていたものとみられる。74は見込み部に鉄剣で「寺」を書いている。また、底面と割れ面にススが付着している。

41は筒づくりの跡で、口縁部の内側が肥厚している。68は玉縁口縁をもつ鉢で、体部はやや肩が張っている。形態の特徴から片口がつく可能性がある。

33・58は鍋で、いずれも外面には施釉されていない。58には口縁部に2か所取手が外れた跡がある。また、外面下部はやや黒く、ススが付着していた可能性がある。

62は土瓶で、取手と注口が外れている。体部外側に鉄錆で「藤田組大森鎌山所」と記載されており、鎌山組に関連する遺物である。後述するがⅢ区の建物遺構(SB04)は明治期の藤田組に隣接する建物跡の可能性があり、そこから流入した可能性がある。

#### ⑤その他の上器、陶器、土製品

碗(72・80)、蓋(43・56・57・83)、皿(20・31)、すり鉢(13・34・84・85)、湯呑(42)、サナ(46)などが出土した。

72は萩で、高台が小さく京焼風の遺物である。底部は磨削し、表面は釉に嵌人がみられる。

42・80は布志名とみられる。

56は急須の蓋で、丸いつまみを持ち、その周囲を二重の網目が巡っている。裏面は無釉である。43・57は刷の蓋で、上面に飛鉈による施文がある。57には背面に蛇の目細刺ぎがある。

13・34・84・85はすり鉢である。13・34・84は玉縁口縁を持ち、標目の上端部はナデ消している。胎上のきめは粗い。85は須佐である。

#### 【金属製品・その他】

鍵 貨(101・102・103・104・105・106・108・109・110)、ガラス質の遺物(99)が出土した。

105・106・108・109は寛永通寶で、いずれも新寛永である。110は無文錢である。99は緑色でガラス質の遺物である。断面は正方形で、非常に形が整っている。鉢の一部の可能性がある。

## 第5節 Ⅲ区

### 第1項 調査の概要

第Ⅲ区は調査区全体の南部に位置する、礫石建物跡(SB04)を主とする調査区である。発掘調査によってSB04の内部から鐵冶炉とみられる遺構等が検出されたことから、鐵冶場として使用されていた可能性がある。SB04は調査前には一部が見える程度であったが、調査によって全体が検出され、特に溝土に覆われていた西半部は非常に良好な状態で残存していることが明らかとなった。

### 第2項 検出遺構(Fig. 5・13)

#### 【SB04】(Fig. 5・13)

SB04は圓石の基礎を持つ礫石建物である。袖は南西方向で、規模は東西約5.7m、南北約5.0mである。礫石は岩盤やSB01・02と同質の凝灰岩質の石材で、表面には鋸による加工痕が見られる。SB01・02とは異なり、礫石を隙間なく並べている。基礎の削石は西部では平坦なものと、東部では最大で厚さ約80cmの分厚いものを使用している。基礎の上面の大部分は平らに加工しており、土台建物の基礎であったとみられる。東面の一帯には土台をのせるための段状の加工が設けられている。基礎の南東部には建物の外につながる溝が彫られている。南面は礫石が一部抜かれている可能性があるが、北面の2つは礫石を切り込んでいた。床の西側は岩盤及び基礎層の上に粘土を貼り、東側は整地土の上に粘土を貼っている。整地土内(Fig.13、第7層)から明治期のものとみられる石瓦系陶器(87)の破片が出土したことから、明治時代以降に建てられた建物と判断できる。信別の遺構については後述するが、内部には土坑SK02・03、粘土貼りをしたSX14、鐵冶炉SX15・16などの遺構があることから、SB04は鐵冶場であった可能性が高い。また、第Ⅱ区で土瓶(62)が流れ込みによるものであれば、SB04は藤田組に関連する建物の遺構の可能性が考えられる。

SB04の北側に設定したⅣ区北拡張区では、重ねた瓦が礫石に沿って並べられていた。出土した瓦はほとんどが平瓦だが、陶瓦(90)なども含まれている。また、煙瓦や釉薬瓦など時期の異なるものが混在している。

【SK 02】(Fig. 5・13・14)

SK 02はSB 04の東半部に位置する。平面形は一部がやや凹円形で、直径は40~45cmである。遺構の南側に小穴があり、金床を固定していた杭の穴の可能性がある。深さは約20cmで、埋土の上半は炭化物を多く含む黒色土、下半はスラグや粉炭が二次的に固まつた黒色の再結合層状の堆積物である。

【SX 14】(Fig. 5・13・14)

SX 14は、SB 04の南端で検出された遺構である。平面形は、不整な反方形をしているが、東部はかく乱により不明瞭である。また、西端部は土層觀察用孔の下となるため、全体規模は不明で、現状で検出した規模は約120cm×70cm、深さは約15cmである。またの西

側では遺構が確認されなかったことから遺構西端は柱内で終息していると考えられる。遺構は建物南側の礎石列に接して平行に掘られており、底面は皿形をしている。遺構内の北端では遺構端部に沿って幅約10cmの黄色粘土が直線的に検出された。この粘土の南面は、高さ約10cm程ほぼ垂直に立ち上がっている。上層部(Fig.14)では確認できないが、底面直上で検出した灰黄色粘質土(Fig.14、第3層)上では一部硬化的面がほぼ水平に確認された。この面で黄色粘土が途切れたり、黄色粘質土はこの面から削離されたものと考えられる。こうした検出状況から、本遺構は一度掘り下げた後、灰黄色粘質土で埋めし、何らかの構築物を設置した痕跡と解釈することが可能である。また、

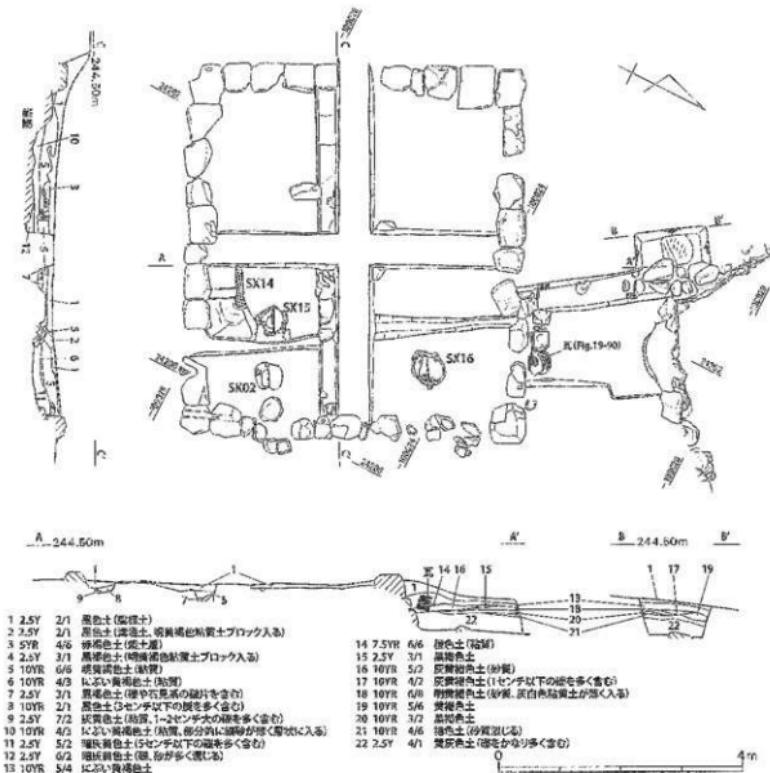


Fig.13 民布山谷地区第5地点Ⅲ区SB 04 平面図・断面図 (S=1/80)

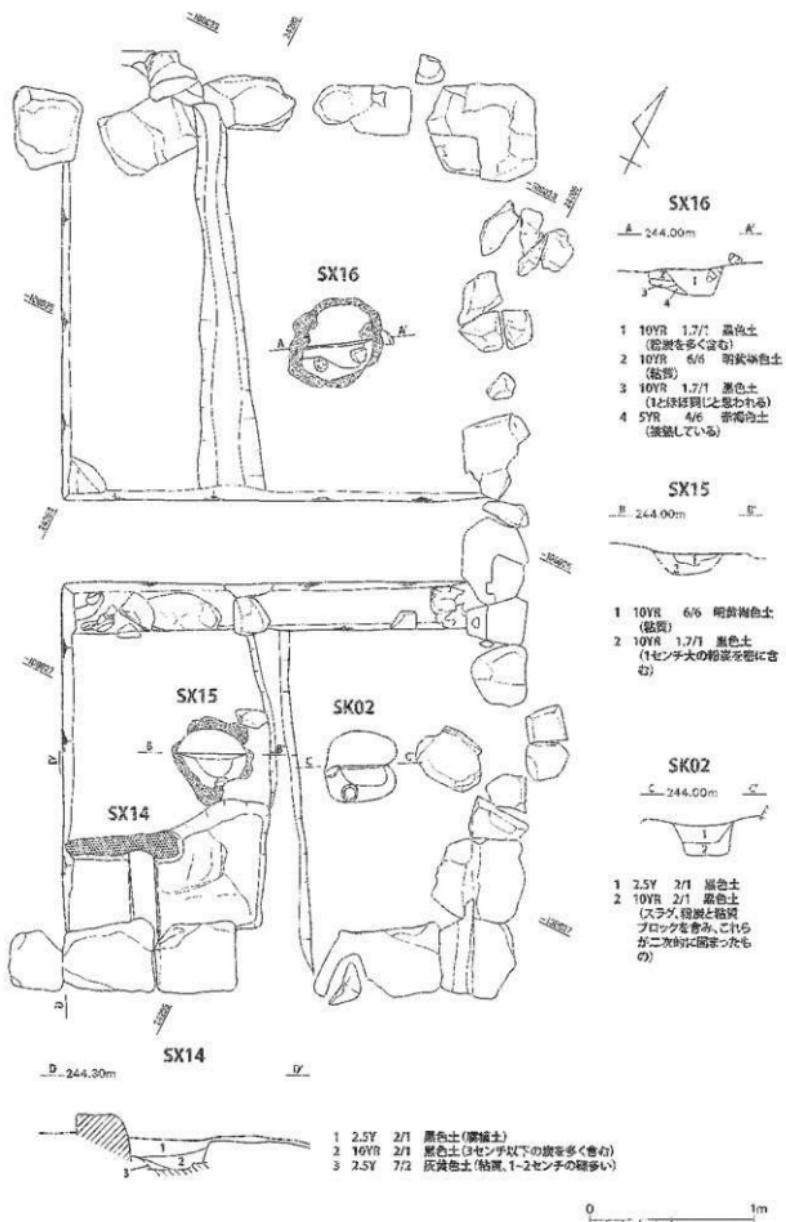


Fig.14 畏布山谷地区第5地点Ⅲ区SK02、SX14・15・16平面図・断面図 (S=1/30)

土層確認用柱で黄色粘土及び硬化面が確認できなかつた理由については、造構の西端部に当たることから、構築物がこの位置にまで及んでいなかったと推定することができる。

溝渠は建物南側に接していることから、想定される構築物は建物南壁にほぼ接して平行に整備されていたと考えられる。黄色粘土の南端から砕石までの距離は約45cmである。長さは不明ながら幅約45cm程度の構築物が想定される。

本造構は、上記の検出状況に加え、造構の北東側に存在する鍛冶炉（SX 15）、鉄床跡（SK 02）との位置関係などから、爐座の可能性が高いと考えられる。

【SX 15】(Fig. 5・13・14)

SX 15はSB 04の南東部に位置する。平面形は直徑約45cmの丸んだ円形、深さは13cmである。堆土内には1cm大の粉炭を密に含む黒色土の層がある。造構の周囲5~10cmの範囲が被熱しており、鍛冶炉の可能性がある。

【SX 16】(Fig. 5・13・14)

SX 16はSB 04の北東部に位置する。平面形は直徑約38cmの不規則形、深さは15cmである。造構の周囲5~10cmの範囲が被熱しており、造構埋土に粉炭を多く含む黒色土が含まれることから、鍛冶炉の可能性がある。造構の西部に10cm前後の粘土層があり、その下には炭化物が見られることから、本来は直徑約45cmの大きさであったが、一部を改修して小さくしている可能性がある。

第3項 出土遺物 (Fig. 15~20, Tab. 3~5)

SB 04の整地土内から右見系陶器の甕（87）が出土した。87は復元口径が44.0cmと大きく、大甕として使用されていたものとみられる。光沢のある釉薬が全体にかかっていることや、口縁部が内外に肥厚し、上部に平坦面を作っていること、口縁部から体部にかけて段があるなどの特徴から明治時代以前の遺物とみられる。59はⅢ区上面で表記された土瓶の蓋である。89は土師質の焼炉で、Ⅲ区北極張区第14層から出土した。外側全体にハケ口と縱方向にヘラ彫りした切れ口のような文様がある。

90はⅢ区北極張区で出土した割瓦で、瓦当には反時計回りの巴文と16個の連珠文がある。瓦当裏面に

は粘土がはみ出た痕跡と木目が残っており、瓦当文様の型起しの際についたものとみられる。平部の裏面にはヘラで「×」が彫いてある。I区の流土内から出土したものと接合した。

## 第6節 小結

昆布山谷地区においては谷の中ほどを第5地点として発掘調査を実施した。調査成果としては、①岩盤加工遺構（SX 02）が良好な保存状態で検出されたこと、②I~Ⅲ区の各調査区で建物跡が検出され、土地の利用状況が明らかとなったこと、③I区平坦面における下層塗壁によって、少なくとも17世紀前半から土地の利用が始まったことや現在の地形が形成された時期が明らかとなってきたことが挙げられる。

SX 02は第5地点の西側で検出された岩盤加工遺構で、岩盤に階段状造構や水溜状溝渠、柱穴などが彫り込まれている。階段状造構は第5地点西側の狭い平坦面に統一しており、斜面西側の平坦面上に何らかの施設があった可能性が想定される。第5地点の南側には長窓寺跡と感があるため、そこに続く道があったとも考えられる。

本年度調査を実施したI~Ⅲ区ではそれぞれで建物遺構（SB 01~04）が検出された。I区で検出されたSB 01は、出土遺物より草木堁まで利用されていたとみられる建物跡である。内部に造構を伴わないと想定を明らかにすることはできなかったが、石垣で造成した平坦面の広い範囲に建てられており、昆布山谷の景観を考える上では重要な造構といえる。Ⅱ区で検出されたSB 02は、建物内で鍛冶炉とみられるSX 07が検出されたことから、製錬にも関連する建物であったとみられる。内部の造構は南半に集中しており、北半ではほとんど検出されなかったため、北半と南半で利用方法が異なっていた可能性が考えられる。Ⅲ区で検出された建物遺構（SB 04）は、出土遺物から近代以降に建てられたとみられる建物跡である。建物内に金床を置いていた可能性のある造構や鍛冶炉が検出されたことから、鍛冶場として利用されていた建物跡と考えられる。また、屋邊で出土した土瓶（62）から、近代に石見銀山の開発を主導した藤田組に関連する可能性が考えられる。

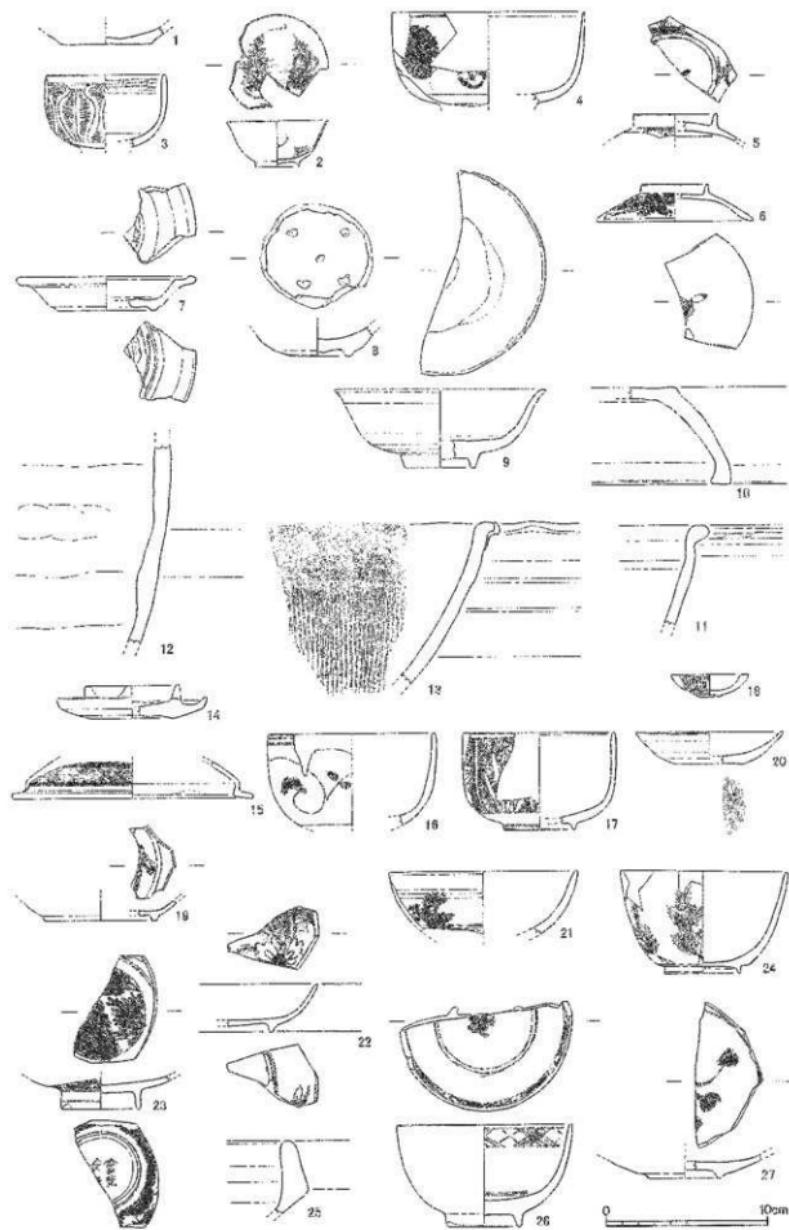


Fig.15 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図 I (S = 1 / 3)

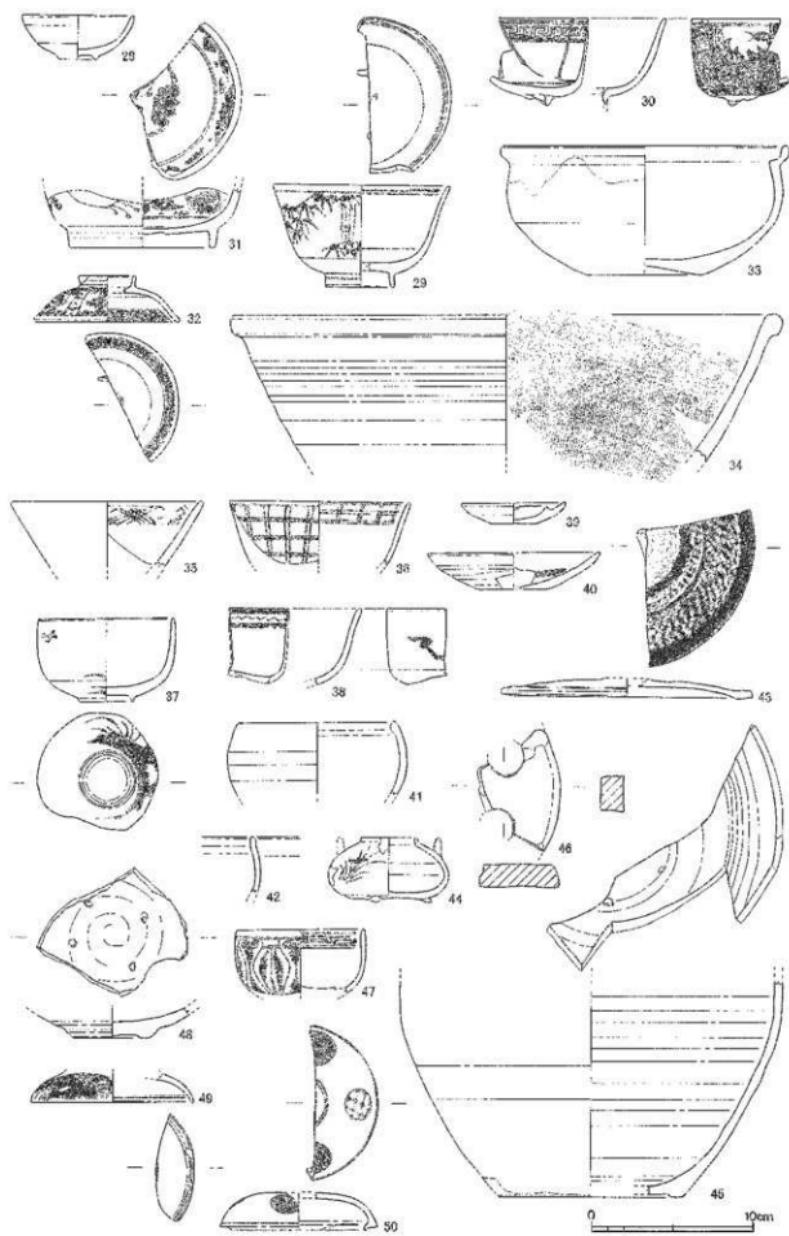
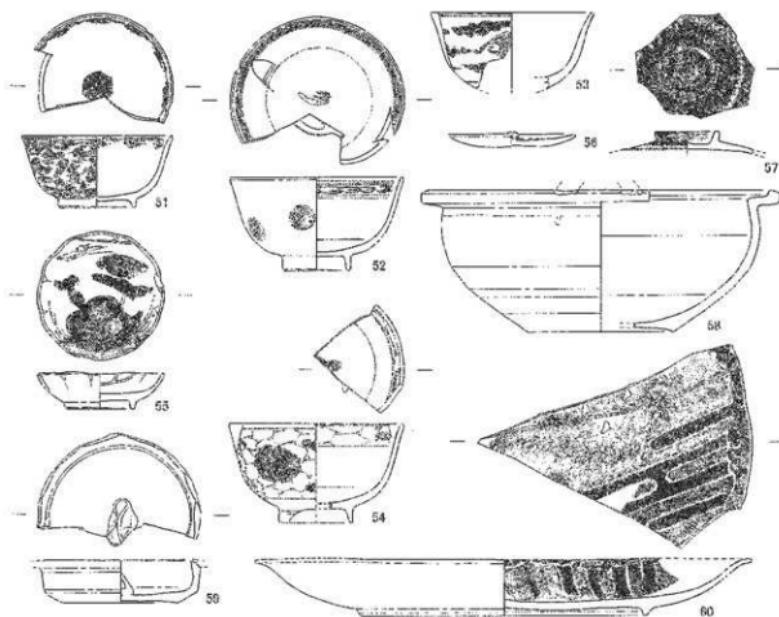


Fig.16 岸布山谷地区第5地点出土遺物実測図II (5=1/3)



所山谷大系螺貝

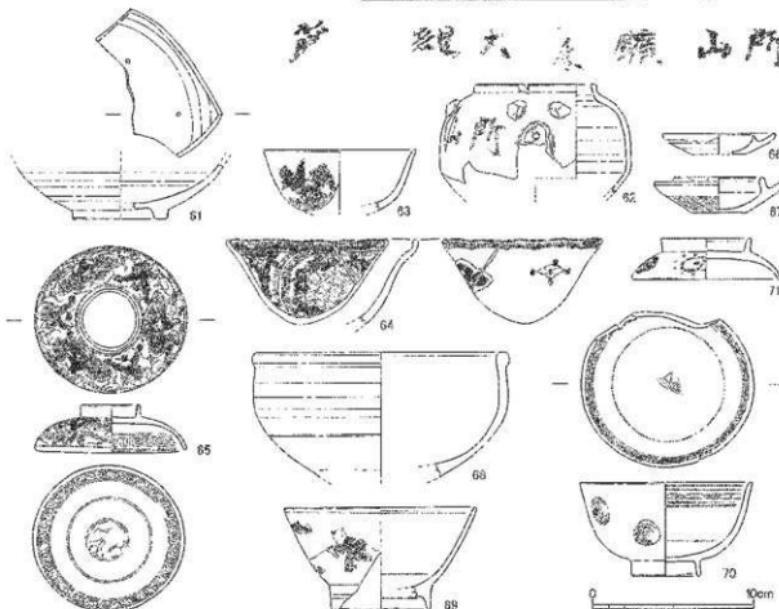


Fig.17 崑布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅲ (5 = 1 / 3)

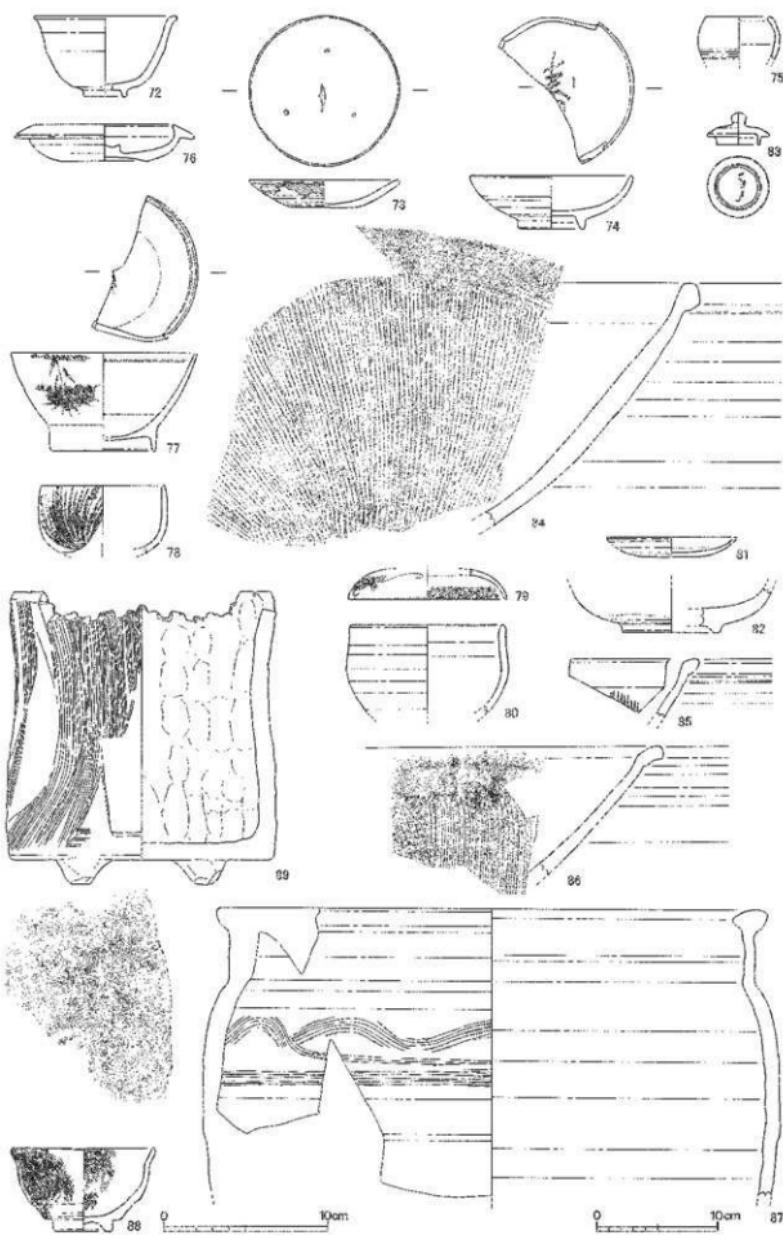


Fig.18 民布山谷地区第5地点出土遺物実測図IV (S=1/3、1/4)

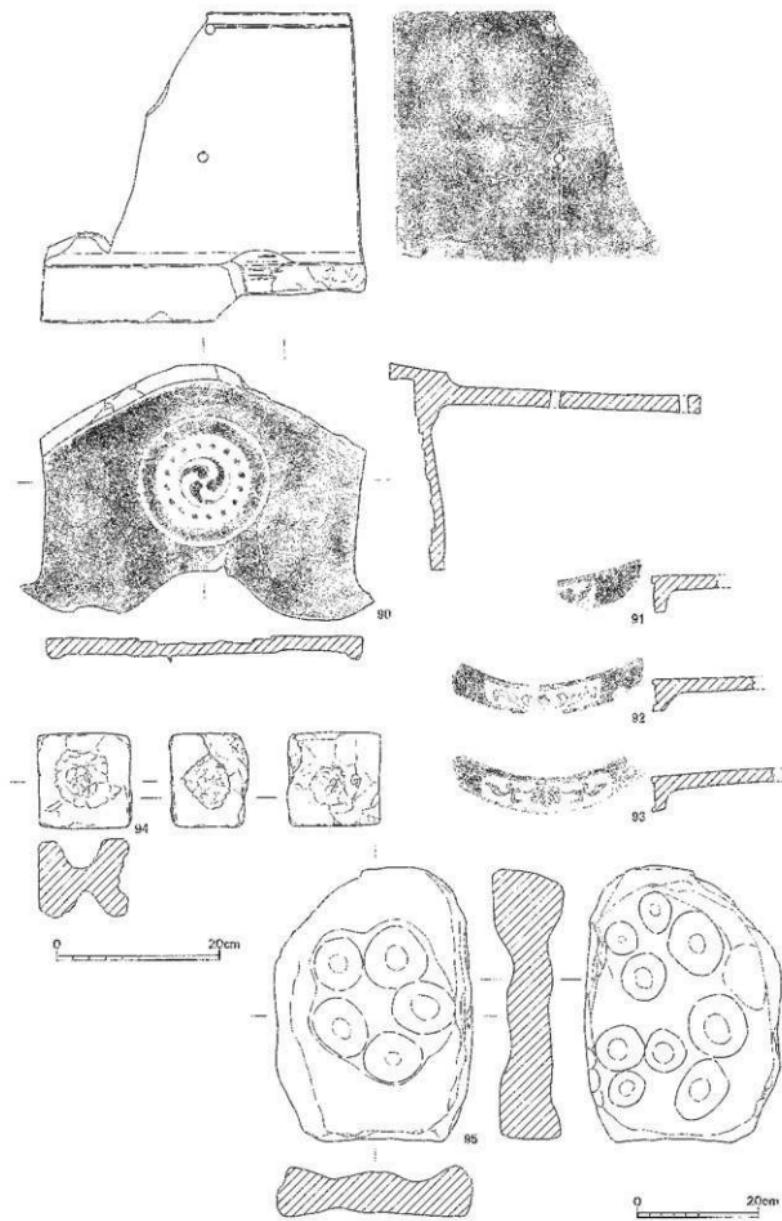


Fig.19 民布山谷地区第5地点出土遺物実測図V (S=1/6、1/8)

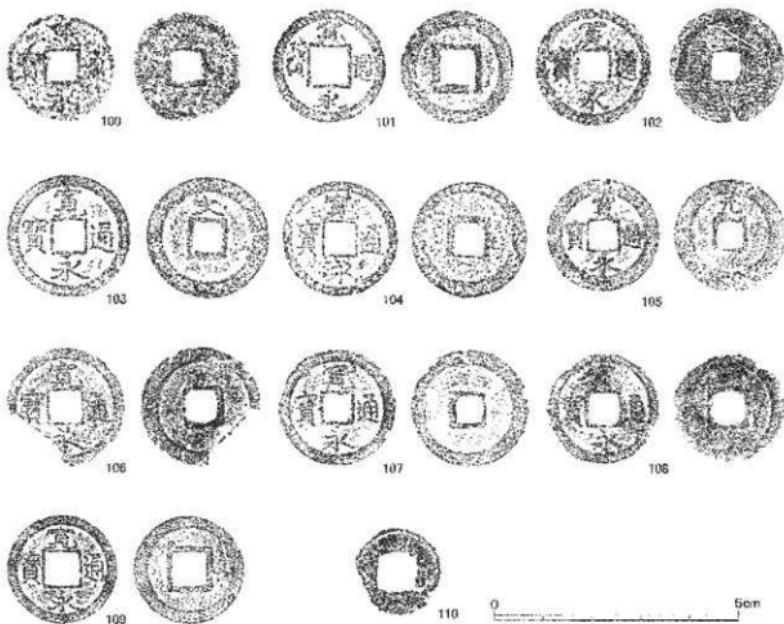
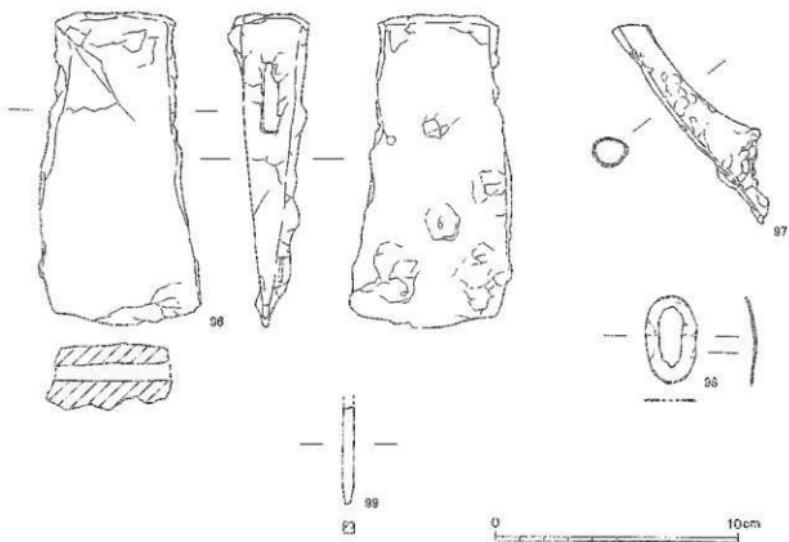


Fig.20 民布山谷地区第5地点出土遺物実測図VI (S=1/1、1/2)

Tab. 3 岩手山谷地区第5地点出土遺物調査表

探査 番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			色調	成形・刺 繡・文様	備考
				口径	器高	底径			
1	I a 区 表土	土師質土器	皿		(1.1)	(5.6)	浅黄褐色		
2	II a 区 表土	瀬戸?	小鉢	(6.2)	2.9	2.7	透明釉	I 線付	
3	I a 区 表土	肥前磁器	碗	(7.2)	(4.5)		透明釉		
4	I a 区 表土	肥前磁器	鉢	(11.8)	(5.8)		透明釉		
5	II a 区 表土	肥前磁器	蓋		(1.5)		つまみ縁 (5.0)	透明釉	
6	I b 区 表土	瀬戸?	蓋	(9.5)	2.4		つまみ縁 (4.0)	透明釉	
7	I c 区 S B O 1	瀬戸・美濃	皿	(10.8)	2.1	(6.0)	灰釉	トチン	
8	I a 区 表土	肥前陶器	皿		(1.8)	3.7	長石釉	胎土目	
9	I a 区 表土	肥前陶器	碗	(13.0)	4.9	(4.3)	長石釉		
10	I c 区 表土	肥前陶器	蓋		(6.0)		灰釉		
11	I c 区 表土	肥前陶器	鉢		(6.2)		灰釉		
12	I c 区 表土	信楽?	波か壺		(10.3)		灰釉		
13	II a 区 3層	不明陶器	すり鉢		(10.0)		褐釉		
14	I b 区 4層	肥前陶器	灯明皿	(9.2)	2.0	(5.0)	長石釉		
15	I c 区 4層上面	在地系陶器	盤	(14.8)	(2.3)		褐釉 サビ釉	飛蛇	
16	II a 区 7層	肥前磁器	碗	(10.2)	(5.7)		透明釉		
17	II a 区 7層	肥前磁器	碗	(9.2)	6.0	(4.2)	透明釉		
18	II a 区 7層	肥前磁器	紅皿	(4.8)	1.4	1.2	透明釉		
19	I c 区 7層	青花	皿		(1.2)	(6.8)	透明釉		
20	II a 区 7層	不明陶器	皿	(9.0)	2.0	(4.3)	褐釉		
21	I d 区 5層~8層	肥前磁器	碗	(11.5)	(3.9)		透明釉		
22	I d 区 5層~8層	青花	皿		3.0		透明釉		
23	I d 区 8層	肥前磁器	碗		(2.1)	(4.6)	透明釉		
24	I c 区 9層	肥前磁器	碗	10.4	6.4	4.6	透明釉		
25	I c 区 石垣内	七輪質土器	焰塔		(4.5)		にぶい橙色		
26	I c 区 5層~8層	肥前磁器	碗	(10.6)	6.3	4.3	(外)青磁釉 (内)透明釉	四方縁文	
27	I c 区 30層・31層	肥前磁器	皿		(1.5)	(4.4)	透明釉		
28	II c 区 S B O 2上層	肥前磁器	皿	(6.7)	2.7	2.1	透明釉		
29	II c 区 S B O 2上層	瀬戸	碗	(10.8)	6.4	(4.1)	透明釉		
30	II c 区 S B O 2上層	肥前磁器	碗		(5.4)		透明釉		
31	II c 区 S B O 2上層	肥前磁器	鉢		(3.7)	(8.6)	透明釉	丸の目印形 高台	
32	II c 区 S B O 2上層	瀬戸	蓋	(8.7)	2.9	つまみ縁 (3.3)	透明釉		
33	II b 区 S B O 2上層	石見系	鍋	(17.8)	8.0	7.0	束帶釉		
34	II c 区 S B O 2上層	不明陶器	すり鉢	(33.4)	(9.1)		褐釉		
35	II b 区 S B O 2下層	肥前磁器	碗	(11.5)	(4.1)		(外)青磁釉 (内)透明釉	四方縁文	
36	II b 区 S B O 2下層	肥前磁器	碗	(11.0)	(3.9)		透明釉		
37	II c 区 S D O 3	肥前磁器	碗	(8.3)	5.1	3.4	透明釉		

Tab. 4 民布山谷地区第5地点出土遺物表(後編)

38	II b 区 SD 03	肥前磁器	碗		(4.7)		透明釉		
39	II b 区 SD 03	石見系	灯明皿	(6.4)	1.3	(2.6)	長石釉		
40	II b 区 SD 03	石見系	皿	(10.6)	2.3	(4.0)	長石釉		墨青
41	II b 区 SD 03	石見系	鉢	(9.7)	(4.5)		長石釉		
42	II b 区 第3層	布志名	湯呑?		(3.4)		銀線釉		
43	II a 区 SD 03	不明陶器	蓋	(15.5)	(1.2)		サビ釉		
44	II b 区 SD 03	石見系?	水注	(3.4)	4.0	4.2	白釉輪 透明釉	双付	
45	II b 区 SD 03	石見系	甕		(13.4)	(11.2)	米味釉		
46	II b 区 SD 03	上製品	サナ	現存長 7.5	現存幅 5.0	現存厚 1.5	にぶい褐色		43.2 g
47	II a 区 SD 04	肥前磁器	碗	(7.7)	(4.0)		透明釉		
48	II c 区 SX 09	肥前磁器	皿		(1.9)	4.7	灰釉	胎上目	
49	II b 区 第3層	肥前磁器	蓋	(10.0)	(1.9)		透明釉		
50	II b 区 SX 10	肥前磁器	蓋	(8.2)	2.3		透明釉		
51	II a 区 第1面	肥前磁器	碗	(9.2)	4.5	(4.6)	透明釉		
52	II c 区 第1面	肥前磁器	碗	10.5	5.8	3.9	透明釉		
53	II a 区 第1面	肥前磁器	碗	(9.9)	(4.7)		透明釉		
54	II c 区 第1面	肥前磁器	碗	(10.6)	6.1	(4.3)	透明釉		
55	II a 区 第1面	肥前磁器	皿	7.6	2.3	4.0	透明釉		
56	II c 区 第1面	不明陶器	蓋	7.8	1.0		サビ釉		
57	II c 区 第1面	不明陶器	蓋		(1.4)	つまみ径 4.0	サビ釉	飛び鉢	
58	II c 区 第1面	石見系	土鍋	(22.2)	8.8	9.0	來待釉		
59	III 区 表模	石見系	蓋		2.7	7.0	長石釉		
60	II c 区 1層	肥前磁器	大皿	(30.1)	3.6	(17.4)	透明釉		
61	II c 区 1層	石見系	鉢		(3.4)	(5.8)	長石釉		
62	II c 区 1層	石見系	土瓶	7.0	(6.7)		長石釉		
63	II b 区 3層	肥前磁器	碗	(9.2)	(3.7)		透明釉		
64	II b 区 3層	肥前磁器	鉢		5.3		透明釉		
65	II b 区 3層	肥前磁器	蓋	9.1	3.0	3.5	透明釉		
66	II d 区 3層	在地系陶器	灯明皿	(7.0)	1.3	(3.2)	長石釉		
67	II b 区 3層	石見系	灯明皿	8.0	2.2	3.3	長石釉	双付着	
68	II b 区 3層	石見系	鉢	(15.4)	(7.7)		長石釉		
69	II c 区 7層	肥前磁器	碗	(11.8)	6.4	(5.9)	透明釉		廣東碗
70	II c 区 7層	肥前磁器	碗	10.5	5.9	4.1	透明釉		
71	II a 区 7層	肥前磁器	蓋	(9.1)	2.6	つまみ径 (5.5)	透明釉		
72	II c 区 7層	秋	碗	(8.8)	5.0	(2.6)	長石釉		
73	II c 区 7層	在地系陶器	皿	9.2	1.7	4.0	長石釉	胎上目 双付着	
74	II c 区 7層	石見系	皿	(9.8)	3.3	4.0	長石釉	双付着	
75	II c 区 7層	石見系	小壺	(3.9)	(2.7)		長石釉		

Tab. 5 昆布山谷地区第5地点出土遺物観察表

76	II c 区 7層	石見系	蓋	(11.0)	2.3		銅緑釉		
77	II d 区 8層	肥前磁器	碗	(11.3)	6.1	(6.3)	透明釉		廣東釉
78	II d 区 8層	肥前磁器	碗	(7.4)	(4.2)		透明釉		
79	II b 区 8層	肥前磁器	蓋	(9.6)	(1.9)		透明釉	四方摩文	
80	II b 区 8層	布志名	碗	(9.2)	(5.6)		銅緑釉		
81	II a 区 8層	不明陶器	皿	(8.0)	1.3	3.0	サビ釉		
82	II a 区 8層	肥前陶器	鉢		(2.8)	(6.0)	長石釉		
83	II b 区 8層	不明陶器	蓋	2.6	2.0		長石釉		墨青
84	II a 区 8層	不明陶器	すり鉢		(15.0)		鐵釉		
85	I + II 区 SW 0.2	須佐	すり鉢		(3.6)		サビ釉		
86	I d 区 17層	肥前磁器	すり鉢		(7.9)		鐵釉		
87	III d 区 SB 0.4	石見系	蓋	(44.0)	(23.4)		未特徴		
88	III 区 北抜張区 14層	萩	蓋	8.7	5.2	3.4	鎧灰釉		
89	III 区 北抜張区 14層	土御賀土器	瓶身	(15.9)	18.0	16.0	暗灰色		
拂肉 番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)				重量(g)	色調
				現存長	現存幅	現存厚			
90	III 区 北抜張区内	瓦	烟瓦	高さ 31.6	幅 43.4	奥行 38.1	6860	暗灰色	
91	I 区 表土	瓦	軒平瓦	10.5	13.5	4.4	360	暗灰色	
92	I 区 表土	瓦	軒棟瓦	13.5	24.2	3.9	760	暗灰色	
93	I 区 表土	瓦	軒棟瓦	18.0	24.0	4.4	990	未特徴	
94	I a 区 表土	石製品	石造物	11.6	11.5	9.7	2040		
95	I a 区 表土	石製品	かなめ石	45.3	32.9	11.7	25.8kg	灰色	
96	I c 区 表土	鉄製品	鉄斧	12.8	6.2	3.3	560		
97	I c 区 4層上面	鉄製品	注口	10.0	2.6	0.1	22.2		
98	I c 区 4層上面	鉄製品	セッパ	3.6	2.1	0.1	1.8		
99	II c 区 SX 09	ガラス製品	管?	4.0	0.5	0.5		青色	
100	I c 区 表土	錢貨	寛永通寶	2.2	2.2		1.7		
101	II c 区 SD 0.3	錢貨	寛永通寶	2.3	2.3		2.3		
102	II a 区 表土	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4		2.8		
103	II b 区 3層	錢貨	寛永通寶	2.5	2.5		2.8		
104	II b 区 3層	錢貨	寛永通寶	2.3	2.3		2.3		
105	II d 区 3層	錢貨	寛永通寶	2.3	2.3		2.2		
106	II d 区 3層	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4		1.5		
107	I d 区 4層	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4		2.3		
108	II c 区 7層	錢貨	寛永通寶	2.3	2.3		1.6		
109	II a 区 8層	錢貨	寛永通寶	2.2	2.2		1.8		
110	II c 区 7層	錢貨	寛文銀	1.8	1.8		0.6		

# 第3章 宗岡家住宅の調査

## 第1節 調査の概要

### 第1項 調査地の周辺環境

宗岡家は大森の町並みでも南方に当たる駒の足地区にあって、大森市街線の東側に位置する。宗岡家は江戸初期の銀山役人を代表する一人である宗岡秀右衛門を初代として、代々組頭を務めた家系であるが、6代目の宗岡喜三兵衛が寛政2(1790)年に銀山附役人を罷免されて大森を離れている。現在の宗岡家住宅は、宗岡家の3代目宗岡長蔵が文政6(1823)年に同心として再雇用されて川本村(現在の世田谷区川本町)から大森に戻ってきた際に求めた住居である。宗岡長蔵が屋敷地とする以前は榎本家の屋敷地として使用されており、文政4(1821)年に作成された屋敷図が残っている。宗岡家住宅には近年まで子孫の方が居住していたが、現在は大田市に寄贈されている。主屋が道路より控えた位置に建てられ、道端に面して庭があるという、大森の武家屋敷の典型的な構造をしており、建物自体も古相をよく残していることから、市の指定文化財に指定されている。平成18(2006)年に道端に面した庭の発掘調査を実施し、庭の施設とみられる遺構が検出されたほか、下層で17世紀初期の遺物包含層及び遺構が確認された。

本年度の発掘調査は宗岡家住宅の活用を目的とした保存整備事業に先立ち、建物の修理や復原に必要な情報を得ることを目的として実施した。宗岡家住宅については幕末頃に作成された家相図が残っている。家相図には主屋と離れ、蔵のほかに現存していない建物や渡り廊下などが記載されており、それらの正確な位置と規模が問題となっていた。それらの課題を解決するために発掘調査を実施した。

### 第2項 平成26(2014)年度の発掘調査の概要 (Fig.22)

本年度は敷地の東半部分の約195m<sup>2</sup>を対象として発掘調査を実施した。発掘調査期間は平成26(2014)年5月7日から6月30日までである。

発掘調査に当たっては調査対象地を第I~IV区の4区画に分けて出土遺物を取り上げた。発掘調査によっ

て建物や渡り廊下跡などの宗岡家に関連する遺構の他、宗岡家が造つ以前の遺構も一部検出された。特に、第IV区では家相図に記載されていない施設の遺構が検出され、建築当初の姿を復元する上で重要な資料が得られた。

## 第2節 調査の成果

### 第1項 検出遺構 (Fig.23~27)

#### 【S B 01】(Fig.23・24)

S B 01は調査区北部で検出された建物跡である。家相図に記載のある部屋・湯殿・壇場部屋・薪納屋とみられる。規模は桁行約9m×梁行約3mである。基礎は東西で横溝が残っており、踵部部分は延石にほぞ穴を彫り込んで直接柱を立てる構造で、湯殿から車は割石を並べている。

建物の南側には犬走りと溝がある。犬走りは幅約60cmで、幅20cm程度の長方形の延石によって区画されているが、薪納屋の前から東側は割石を並べて区画している。犬走りを区画する延石には、ほぞ穴が開いており、柱が立っていた可能性もある。昭和30年頃に撮影された写真には、棟が東西方向で南北に平部を持つ切妻屋根の建物が写っており、発掘調査成果と矛盾しない。犬走りの南側には幅約40cmの溝がある。この溝は大きさ30cm程度の川掠石で構築されており、屋敷東側の鍾山川に降りる階段までつながっている。溝の機能としては生活排水のほか、建物の雨落ち溝が考えられる。溝は主屋から4.5m程度東に離れたところから始まっており、始点からは南方向にもS B 02と接するまで石が並びている。これは、戸戸から出した水が蔵の方へ流れないための措置などの可能性が考えられる。

昭和30年頃の写真が残っており、そのころまで建物自体は残っていたようである。しかし、建物の用途は使用人部屋や宿泊などにしていた時期もあり、建物内の設備も改修されていた可能性が高い。また、延石基礎部分と割石基礎部分では建物の軸が異なっており、東西で建てられた時期が異なる可能性がある。

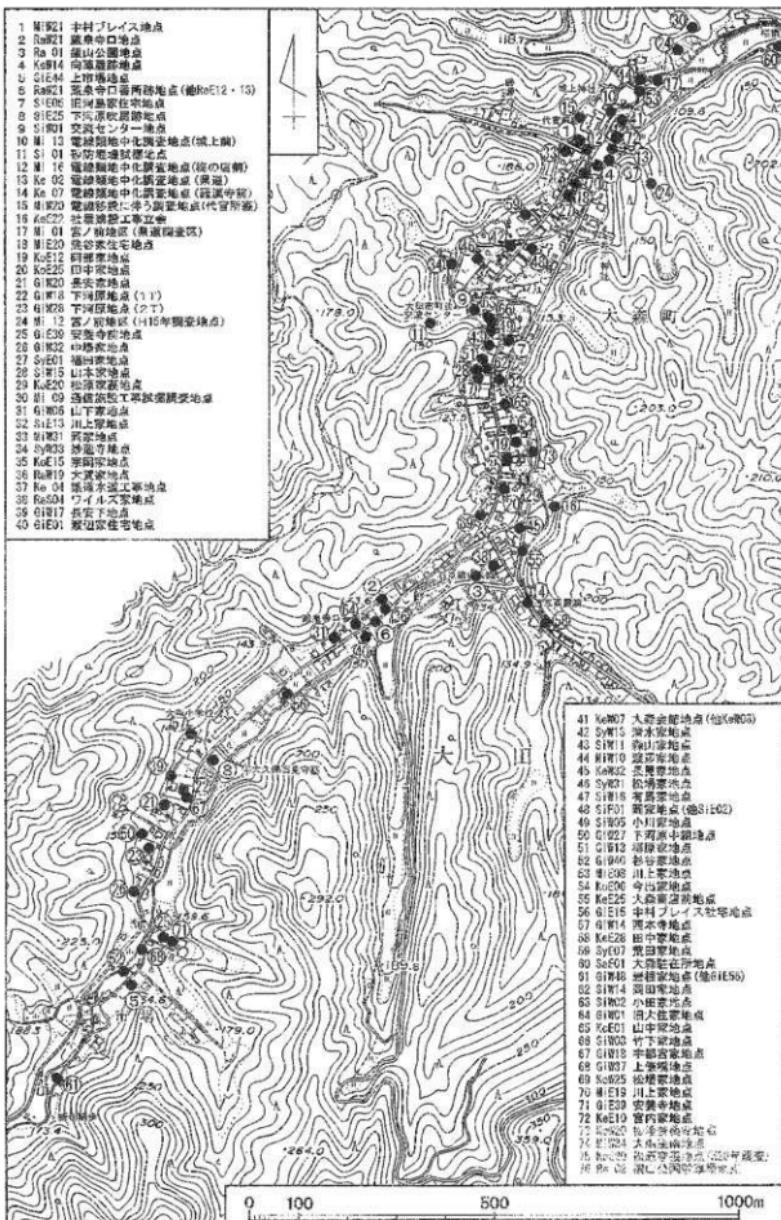


Fig.21 大森銀山伝建地区内調査・試掘・立会地点 ( $S = 1/10,000$ )



Fig.22 宗岡家住宅調査区配置図 ( $S=1/1,000$ )

### ①SB01 部屋跡

部屋跡はSB01の西端に当たる。規模は横行約4m×奥行3mである。東西の基礎には10cm×4cmのほぞ穴が8カ所に開いており、そこに柱が立っていたものと想定される。ただし、南東部のみ基礎が2段になっており、ほぞ穴のある上段の南半部は壊されてお

る。屋の省混ぜ石に施用されていたため、南東部のほぞ穴は検出時には確認できなかった。柱間は約1.5mだが、南東部はやや狭くなっている。約1mである。南壁東側部のほぞ穴は他のものに比べて一つ分間へずれている。これは引き戸を設けるための措置とみられ、部屋の東側を入り口としていたことを示すと考えられる。

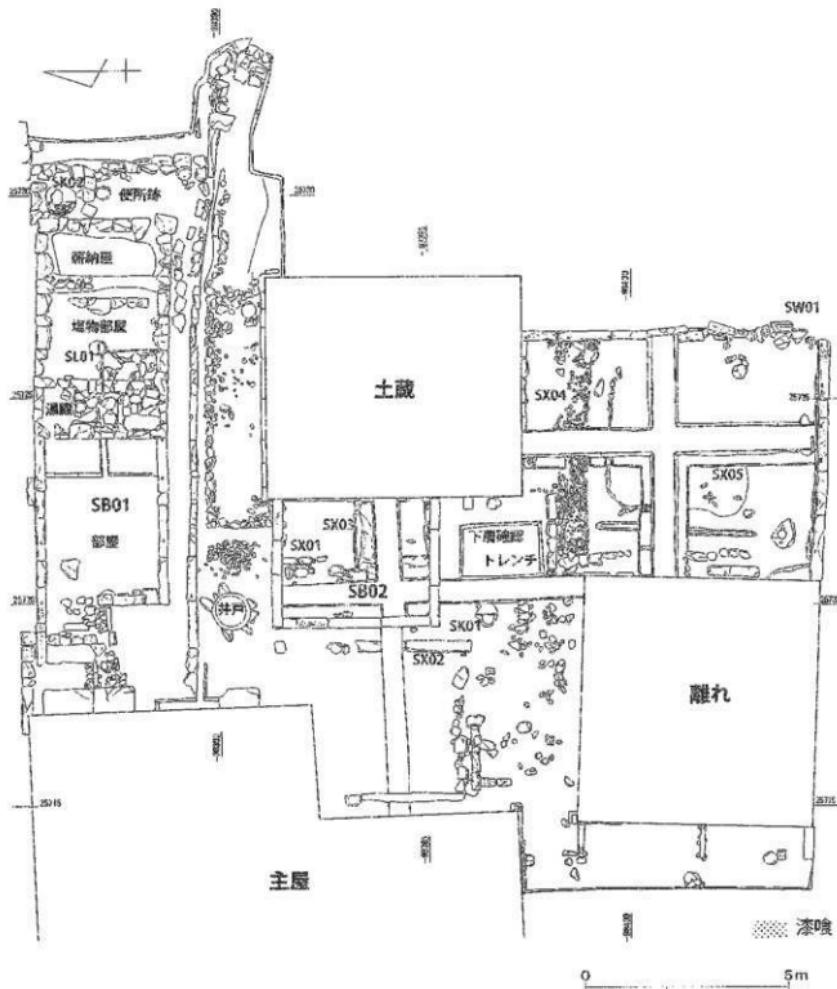


Fig.23 宋岡家住宅検出遺構配置図 (S = 1 / 120)

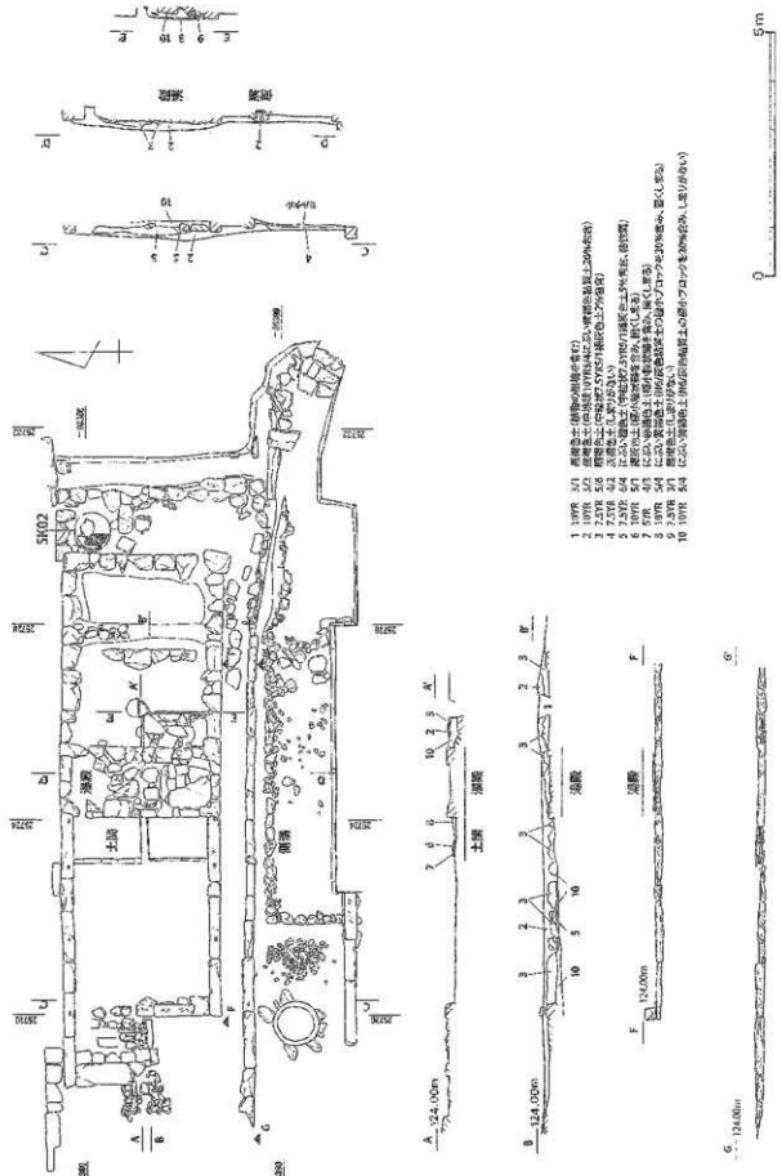


Fig.24 宗國家住宅S-B-01 平面図・断面図・立面図 ( $S = 1 / 100$ )

構築面は緑色で固くしまった面だが、西側に向けてやや下がっているため、部屋の西部では一部に黒褐色の土を入れて床面としている。西側の基礎はこの黒色土の上に据えられており、建築前に造成が行われたことを示している。部屋では、東壁沿いの幅約90cmで土間面が検出された。土間は厚さ5~7cmで、上面には灰が含まれており、灰褐色を呈している。土間は頗る二段階で作られており、黄褐色土、赤褐色土、褐灰色土の順番に重ねられ、叩き締められている。

部屋の西側には東西約1m、南北約1.7mの施設が付設してある。範囲内は複数しているが、後後の利用によるものであり、元々は部屋の押入として利用されていたとみられる。

#### ② S B 01 洞殿跡

S B 01 のほぼ中央部、建物の西側に位置し、家相圖の「御殿」に該当する部分である。コンクリート壁を建築する際に北側の一部が壊されている。規模は幅約1.2m×梁行約3mである。基礎は割石を並べて構築している。床面には石敷きをしており、南半の敷石が密な部分が洗い場で、北半のやや疎な部分に湯船をおいていたとみられる。湯船部分には排水設備や板熱床がないことから、桶を置いてお湯を別の場所から

持ってきて溜めるタイプの風呂であったとみられる。石敷きの間にには漆喰で目詰めしており、水が漏れないための措置とみられる。

#### ③ S B 01 墓物部屋跡

湯殿跡の東側に位置し、家相圖の「墓物部屋」に該当する部分である。規模は幅行約2.3m×梁行約3mである。西側に波打痕(S L 01)があるが、後世のものとみられる。南西の一隅を掘り下げたところ、角礫の土に床面を貼っている構造が明らかとなった。東側の犬走り部分には墓物部屋の前から薪筋屋の前まで割石を鋪えている。

#### ④ S B 01 新納屋跡

墓物部屋跡の東側に位置し、家相圖の「薪納屋」に該当する部分である。規模は幅行約1.9m×梁行約3mである。基礎の部分はよく残っていたが、戦後にブロック層が建築された際に大きく破壊されており、床面はほとんどが剥り返されていたほか、ブロック基礎部分には基礎を入れるための溝が掘られていた。

#### ⑤ 便所跡

S B 01 の東隣に位置する。検出された位置より、家相圖に記載された「便所」に該当する遺構とみられる。規模は東西約1.2m×南北約1.3mで、中央部に

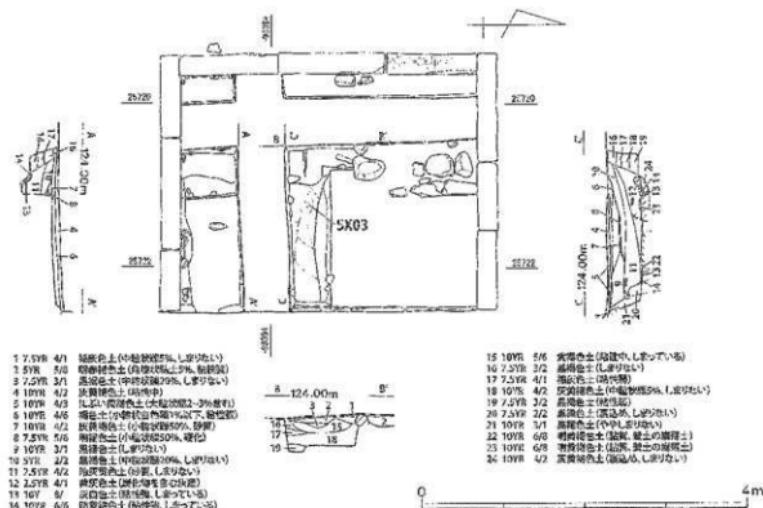


Fig.25 宗國家住宅 S B 02・S X 03 平面図・断面図 (S = 1 / 60)

便槽と見られる直徑約80cmの土坑（SK 02）がある。土坑の深さは約60cmで、中からは木製の桶が出土した。桶の中には糞便が堆積していなかったため、廐棄する際に汲み取られたものとみられる。東相間には大便器と小便器が記載されているが、発掘調査で検出された土坑はこの1つのみである。

#### 【S B 02】(Fig.23・25)

S B 02は敷地内東部にある蔵の西側に建っていた羅前物の基礎部分である。平成10年までは建物が残っていた。規模は横行約3m×縦行約4mで、四角く切った延石を上台としている。S B 01とは接ってはぞ穴がないため、はぞ穴から柱の位置を復元することはできない。S B 02の南側には延石が蔵に沿って

南北に二個あり、北側の隣石は家相間に記載された藏前物の「コミ」に相当する部分で、南側の隣石は藏前の南側に設けられた「待合」に関連するものとみられる。

#### 【S K 01】(Fig.23)

第III区の京壁沿いで検出された。平面形は直径50cm～60cmの楕円形で、断面形は瓶型である。埋土内に出土遺物はなく、焼成の性質も不明である。

#### 【S L 01】(Fig.23・24)

S B 01の施物部屋内東部の床面で検出された焼成瓶である。直径24cmの円形で、被熱深度は約2cmである。中央部がやや黒くなっているが、周囲に炭や煤の散布はないため、移動式のかまどを使用した跡の

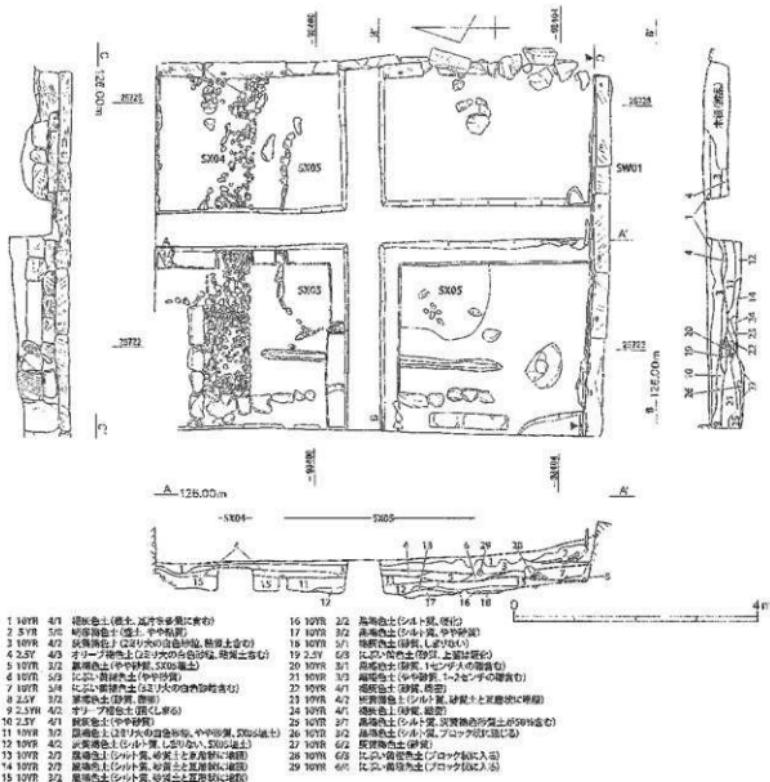


Fig.26 宗岡家住宅 SW 01・S X 04・05 平面図・断面図 (S = 1 / 80)

可能性が考えられる。壇物部屋が保存用の部屋ならば、部屋の機能にそぐわない造構であるため、改設されて部屋の利用方法が変わってからできた比較的新しい造構とみられる。

[S X 01] (Fig. 23 - 25)

II c 区の S B 02 北部で検出された遺構である。長さ約 40cm、幅約 20cm の川原石を南北に並べ、西側に面を持つ。検出範囲が狭られており、周辺に隣接遺構や遺物を伴っていないため、機能を明らかにすることはできなかった。S B 02 の構築面よりも下位で検出されたため、S B 02 以前の遺構である。

[S X C2] (Fig.23)

S B 02 の西側で検出された遺構で、家相間に配基された渡り廊下の跡とみられる。S B 02 の西側で幅30cm×長さ約160cmの延台と幅25cm×長さ115cmの延石が南北に並んだ状態で検出された。渡り廊下として

ては大きな延石を使用している。主屋の南東側でも延石がいくつか検出されたが、主屋に彫り込まれた渡り廊下を取り付けるためのほぞ穴と場所が合わない。主屋の南東部分には延石を組み合わせて火憩として利用していた形跡が残っており、それを構築する際にSX-02は軽体されたものとみられる。

[S X 03] (Fig. 23-25)

II c 区及び IV a 区で検出された遺構である。構築面が現在の宗祠家の整地面よりも下であるため、宗祠家より古い遺構と判断できる。宗祠家が建つ前は柳本家の屋敷として利用されていたため、柳本家に隣接する遺構と考えられる。一部が残または S B 02 の下に在るため、全体を検出することはできなかったが、平面形は一边が約 1.8 m の隅丸方形と考えられる。断面形は深さ約 70cm の深四段である。床面は石を祀した後に鰐頭瓦を青灰色の粘土と漆喰混じりの白色の粘土で埋

- 1 7.5W 4/4 遊び道(和歌、歌麿)♪  
 2 7.5W 4/4 遊び道(シルバーライブ、歌麿)♪  
 3 7.5W 5/6 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪  
 4 7.5W 2/R 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪  
 5 7.5W 3/R 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪  
 6 7.5W 4/R 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪  
 7 7.5W 3/R 遊び道(シルバーライブ)  
 8 10W 4/R 遊び道(シルバーライブ)、解説文入り歌麿  
 9 10W 3/R 遊び道(シルバーライブ)、歌麿  
 10 7.5W 4/R 遊び道(シルバーライブ)  
 11 7.5W 3/R 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪  
 12 7.5W 3/R 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪  
 13 7.5W 3/R 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪  
 14 7.5W 3/R 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪  
 15 7.5W 3/R 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪  
 16 7.5W 3/R 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪  
 17 7.5W 2/R 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪  
 18 7.5W 3/R 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪  
 19 7.5W 3/R 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪  
 20 7.5W 2/R 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪  
 21 3TR 1/R 遊び道(モーリス・シルバーライブ)♪

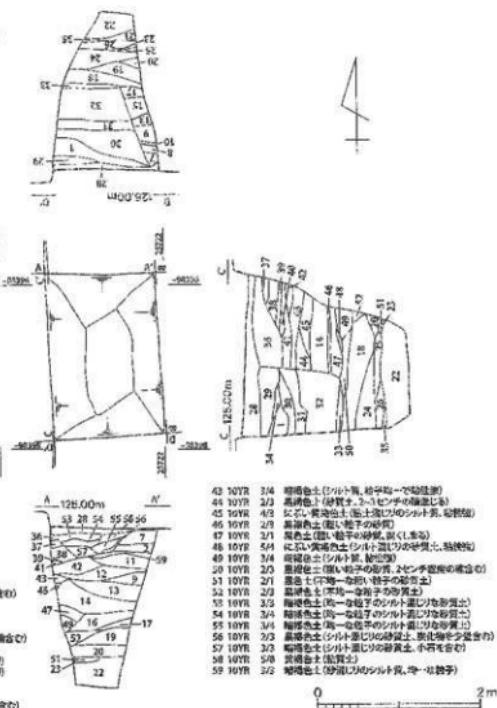


Fig.27 地図案住宅下層階部トレンチ平面図・断面図 (S=1/60)

めている。また、側面も黄褐色と白色の2種の粘土で固めている。水を漏らさないための工夫が看取できるため、水を溜めるための施設と判断し、水溜めか便槽として利用されていた遺構と考えたが、検出状況のみでは用途を判断できなかったため、遺構壁土の一剖面を科学分析した。その結果、元々便槽として使用していた可能性のある施設に野菜などを捨てた跡であるとの分析結果が提示された。詳細は第5章を参照されたい。

埋土内から出土した遺物には18世紀末～19世紀初頭の広東碗(172・173)が含まれており、遺構の施設年代を示すものとみられる。

#### 【S X 04】(Fig.23・26)

IV a・b区で検出された遺構で、幅15～20cmの川原石を層さ約5.5m、幅50～60cmで二列に並べ、間に10cm弱の川原石を差し詰めた通路状の遺構である。家相図には記載されていない施設であり、裏門から屋敷地内に入るための通路の跡で、内露地の一部と考えられる。東端部には約35cm×20cmの平らな端石があり、入口を示すものとみられる。差し詰められた小縫に交じって礫瓦が出土した。S X 04の北側は離れ東側の縁側を区画する石列に接している。S X 04の北側には切石と川原石を東西方向に並べて15cm角程度の隙間に小縫を詰めている。東半が崩れていたことから、修理の跡を示すものとみられる。

#### 【S X 05】(Fig.23・26)

IV a～c区で検出された遺構で、大きいもので幅30cm×10cm程度の川原石を並べた遺構である。大部分が壊れているが、残存部分から復元すると東西約3.3m×南北約3.4mの隅丸方形に並べていたものとみられる。縁石の内側はたま泡穴に20cm程度掘りくぼめており、遺構埋土は堆積物・堆積状況共に水成堆積の様相を呈していることから、水に間連する遺構で、離れやS B 02南側の待合から眺めるための施設の跡とみられる。可能性としてまず池が挙げられるが、S X 05の床面は礫や粘土で固めるなどの水が抜けないような措置が講じられていないため、池とは考えにくい。ほかの候補として花壇が挙げられるが、普通の花壇であれば縁石を置くだけでなく、中を削り凹めている理由が説明しにくいく。大森町内では熊谷家の裏庭に、この遺構と同様に縁石で区画した範囲を掘り塗めた施

設がある。熊谷家ではそれを湿地状にして花壇として利用しているが、S X 05もそれに似たような施設の可能性がある。

#### 【S W 01】(Fig.23・26)

IV b～d区で検出された遺構で、家相図に記載された屋敷地を区画するための樹の基礎部分とみられる遺構である。東側は延台のみで区画しているが、南半が後世に生えた樹木の影響で崩れている。南側は石積みの上に延石を乗せている。石垣は布積み風で、四角く切った石を2段積み上げて構築している。1段目の石は幅40～100cm、高さ約25cmで、2段目には幅約40cm、高さ約20cmの石を使用している。延石は幅25cm、長さ80～130cm、厚さ約20cm程度で、上面には約1m間隔で7cm×4cmのぼぞ穴がある。上面と遺構面の比高差は1m程度である。石垣及び延べ石の表面には顔による加工痕が残っている。樹葉面が遺構面から30cm程度離れており、S W 01南側はIV cの他の遺構群とは時期が異なる可能性がある。

#### 【IV a区下層隙間トレンチ】(Fig.23・27)

2006年の調査で屋敷地の西側の下層から江戸初期の遺物包含層が検出されていたことを受け、東部での調査を明らかにすることを目的としてIV a区北側の遺構が検出されなかつ部分を対象に断ち切りを行なった。トレンチの大きさは東西1.3m、南北2mとした。

トレンチ内では宗閥家建築時の荒縁面(Fig.27、第28頁)の下面でS K 02～04が検出された。これらはトレンチの断面で検出されたため、それぞれの平面形は不明である。S K 02は南壁と西壁で確認した遺構で、直径2m程度と推定され、深さが約1mの大さな上坑である。上坑の下半分は黒色土で、上半分は黄色の粘土で埋められている。底部に褐色の粘土を5cm程度敷いている。粘土は底部のみで側面に敷いていないため、水溜れ対策としては不十分であり、目的は不明である。S K 03は東壁で確認された遺構である。規模は断面では幅55cm、深さ40cmで、断面形はボウル形である。S K 05は北壁で検出された遺構である。断面形は深皿形で、規模は断面で幅95cm、深さ30cmである。北側の側面の一部にS X 03と同様の黄褐色と白色の2層の粘土があり、S X 03の後壁とみられる。検出面より、いずれの遺構も宗閥家が建つ前の遺

構と判断できる。検出面は綿まりの弱い砂質～シルト質の土層で遺構構築面としては軟らかい土質だが、SK 02～04やSX 03など多くの遺構があることから、人為的に造成された土層である可能性が高い。地表面から40cm以下は10cm程度の円礫やシルト質土が互いに堆積している。この堆積変因については、三瓶自然館の川村唯史氏から「河川による自然堆積によるもの」と指摘された。遺物としては第21層(Fig.27)から、體前焼の壺(201)が出土したが、当初の目的である江戸時代初期の遺構は検出されなかった。

#### 第2項 出土遺物(Fig.28～32, Tab. 6～8)

発掘調査を実施した京國家住宅東半からは陶磁器類や石製品・金属製品など多くの遺物が出土した。出土した陶磁器類の生産地は、肥前及び瀬戸を中心としているが、石見系陶器などの在地のものもみられる。以下、出土遺物について種類別に記載する。

##### 【陶磁器類】

調査地点から出土した陶磁器類には體前陶磁器と姫戸・石見系陶器などの在地系陶器に大別できる。出土量では肥前陶器が圧倒的に多く、それ以外は点数としては少ないが、器種はいずれも多くの種類の資料が出土している。肥前陶器は他の出土遺物とは異なり、17世紀代の遺物が含まれているが、出土数が少ないことが特定の地点や遺構からまとまって出土するような状態は確認できなかったことから、京國家住宅自体や敷地内で検出された遺構の年代を反映するものではないと判断できる。

##### ① 肥前陶器

121・163・170・171・172・173・174・186・189・190は縄・小輪である。163は見込み部を蛇の目輪刺ぎした資料で、122には体部外側に燕の絵と見込み部に星虫の文様が、163には体部外側に折枝梅がある。121は舟台の外側に二重の脚輪と縦方向に連続する縦状の文様がある。170は体部外側に葉花散らし文をもつ小輪で、外側に二次被熱の痕跡が認められる。172と173は広東陶の破片で、172には体部外側と見込み部に文様が、173には体部外側に輪刺がある。174は見込み部に崩れた五弁花文のような文様がある。186は体部外側に丸文が、底部に文字がある。189は口縁部外側を若干へこませて横

に線を引いているほか、体部外側には七条一組の縄とその間に「福」の文字がある。190は外側体部に植物の文様が、内面口縁部に四方桙文がある。

128・129・176・177・195は縄の蓋である。128は表面に太陽のような文様と、口縁部内面に四方桙文、見込み部に福氏番文がある。129は表面に牡丹と動物の輪柄と、口縁内側に青文、見込み部に草の文様がある。また、つまみ部に文字が記載されている。176は表面に5羽の鶴と、見込み部に亀の文様がある。177には内外に崩れた梵字と見込み部に「壽」の文字がある。つまみ部にも二重四角の中に文字があるが、字体が崩れている。195は体部外側に植物と六角形の文様が、口縁部内面に渦の文様がある。また、見込み部にも文様がある。129・176・195は増反頭の蓋である。

111・113・114・159・175・185は皿である。111は見込み部に番号がついており、17世紀前半の資料である。114は蛇の目四形高台を持つ資料で、内面体部に唐草文様と、見込み部に文様がある。159は外側体部に梵字と見込み部に文様がある。175は高台が小さく、見込み部に草花の文様がある資料で、器形の特徴から17世紀中頃のものとみられる。

123は蛇の目四形高台を持つ萬葉口である。体部外側に「壽」の丸文と、見込み部にコンニャク印判の五弁花文があり、底部には2重の方形区画の中に文字がある。

126・198は段卓で、126は外側体部に墨紙摺りによる唐子文が施されている。198は体部外側に文様があり、口唇部が輪刺ぎされている。

これら以外に瓶(120・178)、篠利(167・179)、戸車(130)、青炉(192)、灯火具(194)が出土した。

時期は111・175・189など17世紀前半の資料も含まれているが、ほとんどは19世紀前半の資料である。また126など、明治時代の資料も含まれている。

##### ② 體前陶器

165は茶灰軸のかかった碗で、他の碗に比べて一回り程度大きい。体部が丸くやや膨らんでおり、器形も特徴的である。138は鉢で、見込み部が蛇の目輪刺ぎされている。166は青磁軸のかかった蓋である。199・137は皿である。137には砂目が、199には

胎土口がそれぞれ付着しており、17世紀前半の遺物である。

#### ③ 漆戸、不明磁器

器種としては碗(116・117・157・158・187)、小碗(119)、蓋(127・160)、皿(112・115)、徳利(179)、灯火具(124・125)、仏壇飾(197)、壺(119)、小环(189)、人形(162)が出土した。115・116・117・118・119・124・125・157・158・160・162が漆戸で、112・127・187・188は産地不明の磁器である。

115は見込み部に松と家・山水があり、「別天地」などの文字が記載されている。127はうにを入れていた容器の蓋で、上面に「山庵百貨店」などの文字がある。157は、体部外間に「山所」、底部に「壺」、体部内面に「功」の文字がそれぞれ記載されている。体部外表面は「大森躰山所」、底部は「藤田社」にそれぞれ復元できるものと考えられる。体部内面の文字は、剥がれて配置から本来は5文字であったものとみられる。187は桙付けが露胎した壺で、見込み部に五方花弁がみられる。

197は表面に体部外間に文様が、表面には焼継による補修痕がある。隔壁が底部に向かって厚くなっていることから仏壇飾とみられる。

119には底部外間に櫻鉢と、外面体部に金で描かれた蝶があり、消えているが緑と房の痕跡も認められる。188は小杯で、底面に陶刻がある。

#### ④ 在池系陶器

139は小碗で、底部を露胎している。150は盤で、体部外間に黒釉の垂れが見られる。148・149は壺で、口唇部を難削ぎしている。144・145は蓋で、体部外間にコバルトを流しがけた模様がある。161・181は鉢である。161は折り返し成形の玉縁口縁を、181は玉縁口縁をもつ。181には見込み部に胎土口の痕跡がある。また、体部がやや膨らんでおり、體形の特徴から片口がつく可能性がある。191は徳利で、底盤は外面を露胎しており、縁辺部をへらで面取りしている。

#### ⑤ その他の土器、陶器、土製品

肥前や在地系陶器以外で特徴的なものとしてはすり鉢(151・200)、壺(201)がある。151は壺、200は

須佐である。201は僅前で、小片のため時期等の判断が難しいが、下層確認トレンチから出土した資料であるため、少なくとも宗祠家が造つ以前のものである。これら以外には瓦質・土質質の焼炉(133・134・135・202)、外面に鉄絵の文様を持つ壺(196)などがある。土製品としては漆道具のハセ(183)、燈籠の底に焼くサナ(182)が出土した。

#### 【石製品】

154・208は現である。154は山口県の赤開石とみられる暗赤褐色の赤色頁岩質で、残存部長軸方向に使用痕が確認できる。208は灰オリーブ色の粘板岩質で、表面に刻書がある。

153・206・207は厚さ1.6~4cmで、片面に切り込みのある石版状の資料である。色調は153と207が白色、206が淡赤褐色である。材質はモルタル質で表面には $\pm$ 程度の窓が含まれている。用途は不明だが、タイルなどの可能性がある。

#### 【金属製品】

鉄釘(203)、箆鍔(204)、鏡貸(155・156・205)がある。203は長さ11.7cmの角釘で、鍛造による裏點である。204は断面八角形の銅型の箆で、裏面に「川月」の文字が刻まれている。155・156・205は銅製の鏡の裏面質で、いずれも新鏡面である。

### 第3節 小結

本年度は屋敷地の東半部分の調査を行なった。調査の成果としては、①家相図に記載されているが現状ではなくなくなっていた遺物の基礎部分(SB 01, SX 02)が検出され、正確な位置や接続が明らかとなったこと、②第IV区において家相図に記載のない庭の施設跡(SX 04・05)が検出され、当時の地役人の生活や文化を明らかとする上で重要な資料が得られたこと、③一部ではあるがトレンチ調査によって宗祠家が造つ以前の遺構(SX 01・03)が検出されたこと、④下層確認によって土地の成因が明らかとなったことなどが挙げられる。

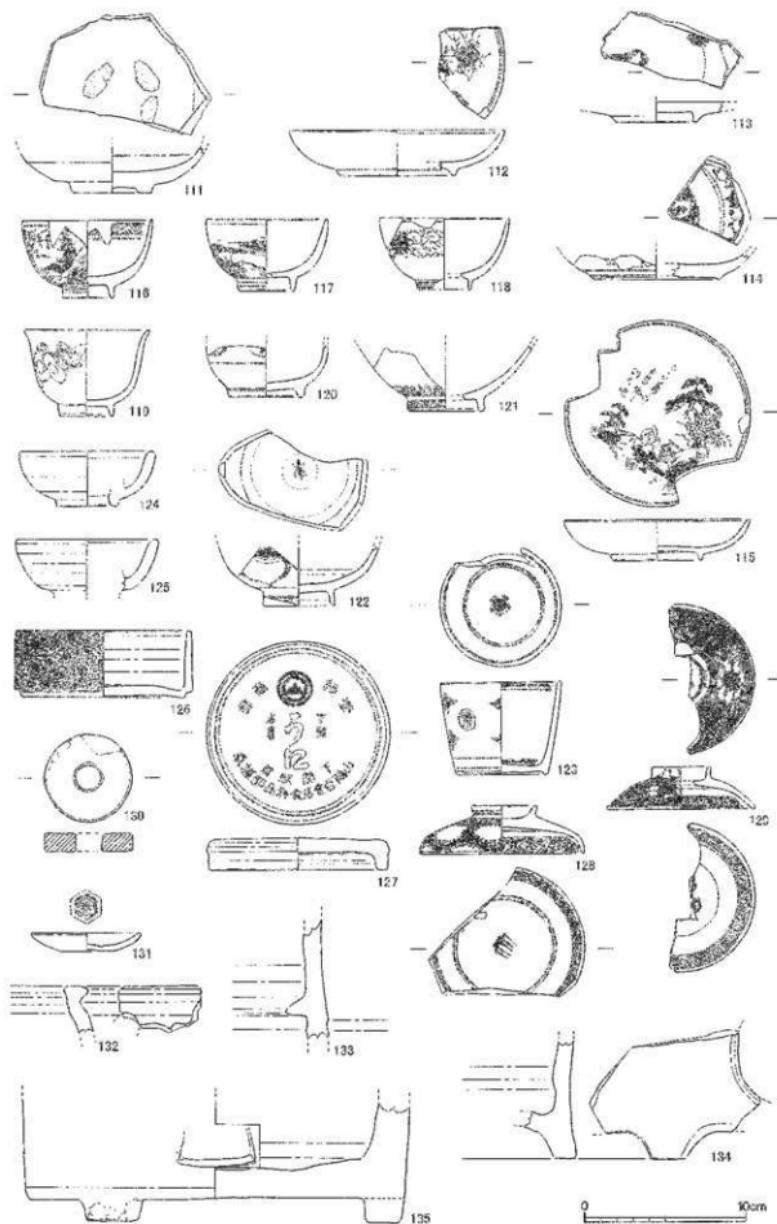


Fig.28 宗國家住宅出土遺物実測図 I (S = 1 / 3)

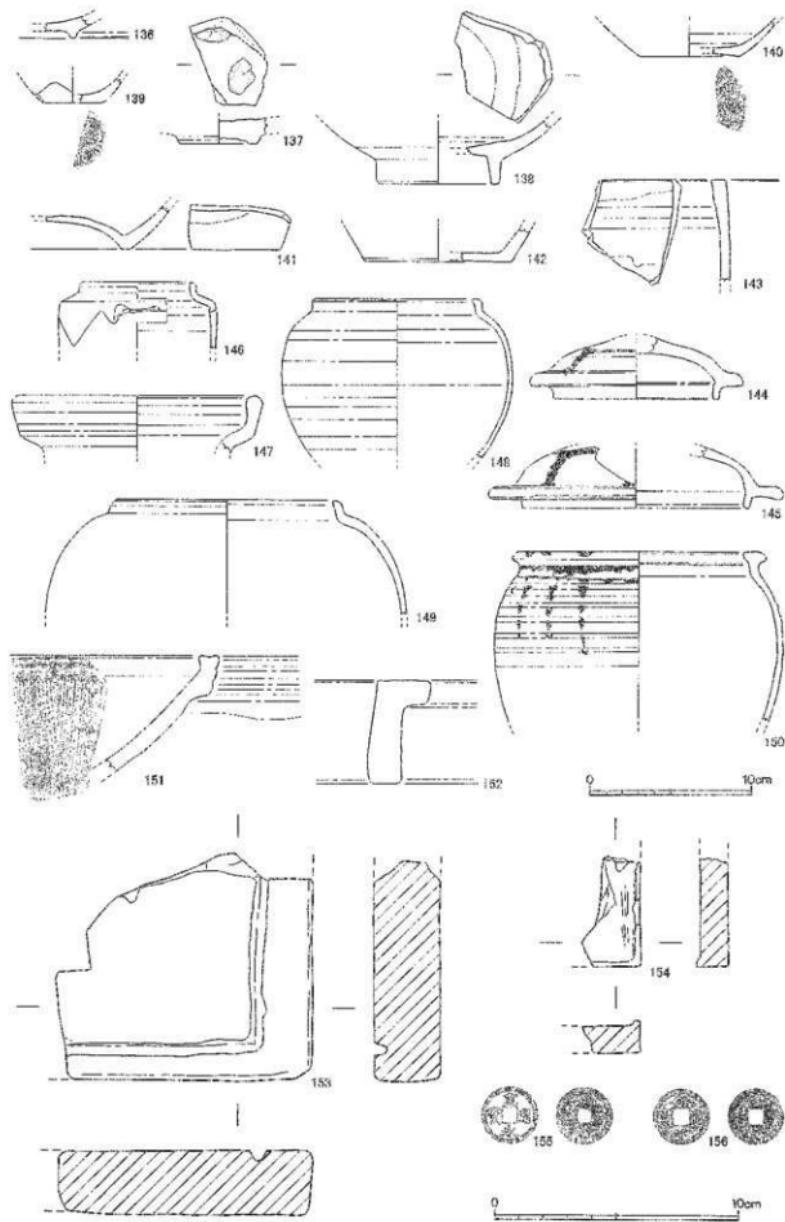


Fig.29 宗岡家住宅出土遺物実測図 II (S=1/2、1/3)

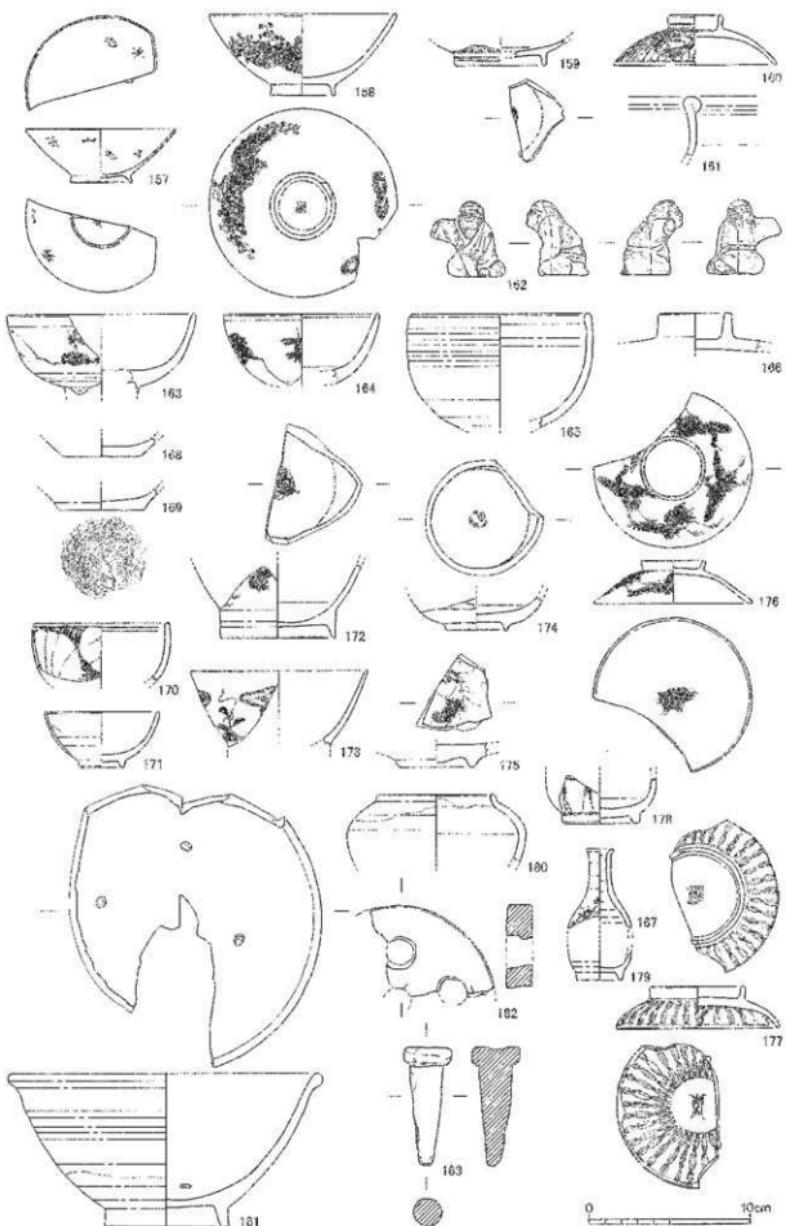


Fig.30 宗岡住宅点出土遺物実測図面 (S=1/3)

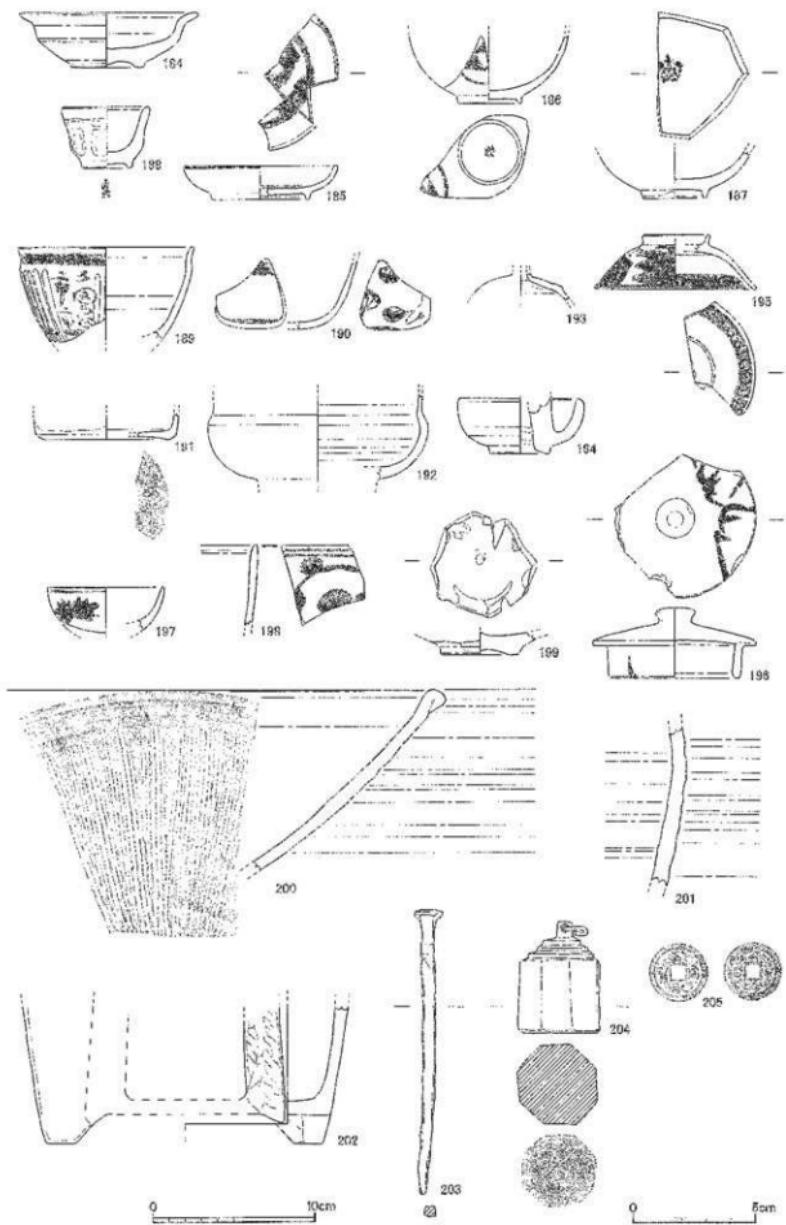


Fig.31 宗岡家住宅出土遺物実測図IV (5=1/2、1/3)

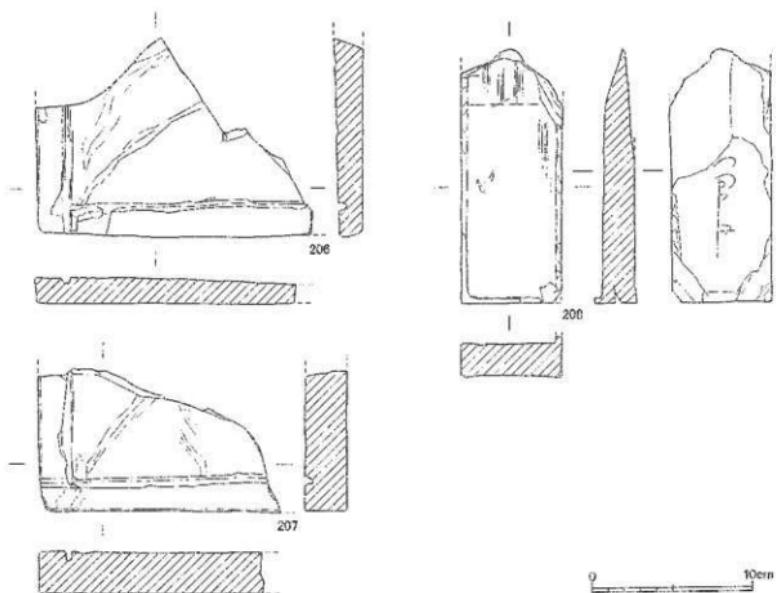


Fig.32 宗岡家地点出土遺物実測図V (S=1/3)

Tab. 6 宗岡家住宅出土遺物観察表

通 考 査 号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			色調	成形・調 理・文様	備 考
				口径	盤高	底径			
111	Ⅲ区 西部表土	肥前磁器	皿		(2.8)	4.8	透明釉	砂目	
112	Ⅳa区 南半表土	不明磁器	皿	(13.1)	(2.8)	(7.0)	透明釉		
113	Ⅲ区 西部表土	肥前磁器	皿		(1.3)	(4.8)	透明釉		
114	Ⅲ区 東半表土	肥前磁器	皿		(1.6)	(7.7)	透明釉	蛇の目模様台	
115	Ⅲ区 東半表土	瀬戸	碗	11.3	2.6	5.4	透明釉		
116	Ⅳa区 南西部表土	瀬戸	碗	(7.8)	4.8	3.0	透明釉		
117	Ⅳa区 南半表土	瀬戸	碗	(7.3)	4.5	(3.2)	透明釉		
118	Ⅱd区 1b区 表土	瀬戸	小瓶	(7.9)	(4.5)	(3.2)	透明釉		
119	Ⅲ区 東半表土 Ⅳ区	瀬戸	环	7.6	5.3	3.1	透明釉	色絵	
120	Ⅳa区 南半表土	肥前磁器	瓶		(3.2)	4.3	透明釉		
121	Ⅲ区 四部表土	肥前磁器	碗		(4.1)	(4.4)	透明釉		
122	Ⅲ区 東半表土	肥前磁器	碗		(3.6)	(4.2)	透明釉	蛇の目模様	
123	Ⅲ区 東半表土 東壁	肥前磁器	直彫口	7.3	5.7	5.4	透明釉	蛇の口模様台	
124	1b区 表土	瀬戸?	灯火具	(8.2)	4.5	(3.8)	透明釉		
125	1b区 表土	瀬戸?	灯火具	(8.6)	(3.2)		透明釉		
126	Ⅱc区 S B 0 2表土	肥前磁器	段鉢	10.6	4.1	9.7	透明釉		
127	Ⅲ区 東半表土	不明磁器	蓋	10.9	2.0		透明釉		
128	Ⅳa区 北半表土	肥前磁器	蓋	(9.9)	3.0	つまみ縁 3.8	透明釉	西方擇文	

Tab. 7 宗間家住宅出土遺物觀察表 II

129	IV a 区 S B 02 表土 IV a 区 北側表土	肥前陶器	蓋	(9.1)	2.6	つまみ押 (3.4)	透明釉		
130	IV c , d 区 表土	肥前陶器	ノホ車	現存高 5.4	現存幅 5.4	現存厚 1.2	透明釉		
131	IV c 区 表土	土師質土器	皿	6.7	1.2	3.0	淡黄色	鉢印	
132	IV a 区 南側表土	土師質土器	芋かき?		(2.9)		淡黄色		
133	Ⅳ区 S B 02 , SX 04 南側表土	瓦質土器	壺		(7.4)		暗灰色		
134	I b 区 表土	瓦質土器	壺		(7.3)		暗灰色		
135	表土	土師質土器	壺		(7.4)	23.0	淡黄色		
136	Ⅳ区 東側表土	小明陶器	皿		(1.4)		長石釉		
137	IV a 区 表土	肥前陶器	皿		(1.6)	(4.8)	灰釉	砂目	
138	Ⅳ区 南半表土	肥前陶器	終		(3.9)	(3.7)	灰釉	蛇の目釉調者	
139	IV a 区 南半表土	石見系陶器	小碗		(1.6)	(3.7)	米特釉		
140	IV a 区 南半表土	小明陶器	上腹?		(2.2)	(5.2)	不明		
141	IV a 区 S B 02 表土	在地系陶器	土瓶		(2.7)		灰釉		
142	IV c 区 表土	不等腰器	瓶		(2.1)	(9.0)	長石釉		
143	IV a 区 S B 02 表土	在地系陶器	切木鉢?		(8.5)		青磁釉 透明釉		
144	IV a 区 北半表土	石見系	蓋	(10)	(3.8)		長石釉 灰釉		
145	IV a 区 南西部表土	石見系	蓋	(16)	(3.8)		長石釉 灰釉		
146	Ⅳ区 顕微表土	石見系	急須	(7.0)	(4.1)		長石釉		
147	IV d 区 表土	不明陶器	瓶?	(14.8)	(3.5)		透明釉		
148	Ⅳ区 表土 Ⅳ区 東半表土	石見系	蓋	(10.2)	(9.8)		長石釉		
149	I b 区 表土 Ⅳ区 東半表土 IV a 区 北半表土	石見系	蓋	(13.5)	(7.0)		長石釉		
150	IV a 区 北部表土	石見系	蓋	15.0	(10.4)		米特釉		
151	IV e 区 S B 02 表土	滑	すり跡		(7.2)		赤褐色		
152	IV d 区 表土	不明陶器	後翻		(6.4)		透明釉?		
種類番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (m)			重 量 (g)	色 調	備 考
153	IV e 区 北半表土	石製品?	不明	現存高 9.3	現存幅 10.5	底径 2.7	370	白色	
154	IV a 区 北半表土	石製品	硯	4.5	2.4	1.3	22.5	暗赤褐色	
155	II c 区 表土	鐵貨	空玉通貫	2.3	2.3		2.7		
156	II d 区 表土	鐵貨	空玉通貫	2.4	2.4		2.4		
種類番号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (m)			色 調	成形・調 察・文様	備 考
157	II c 区 S B 01 表土	漆戸	鏡	現存高 (9.2)	現存幅 3.3	底径 (3.6)	透明釉		
158	II a , c 区 2層 II a , c 区 S B 01 ベルト内	漆戸	鏡	11.4	5.0	3.8	透明釉		
159	II d 区 S B 01 2層	肥前陶器	皿		(1.7)	(5.3)	透明釉		
160	II c 区 S B 01 天井 II c 区 土礫付近表土	漆戸	蓋	10.0	3.1	3.1	透明釉		
161	II c 区 S B 01 天井	石見系	跡		(3.7)		長石釉		
162	II d 区 S B 01 2層	漆戸	人形	現存高 4.6	現存幅 4.6	現存厚 3.8	白色		素地
163	II c 区 S B 02 2層	肥前陶器	鏡	(11.4)	(5.0)		透明釉	蛇の目釉調者	
164	II c 区 S B 02 2層 II c 区 SX 03 11系	肥前陶器	仏龕器	(9.5)	(4.4)		透明釉		
165	II c 区 SX 03 2層 II c 区 S B 02 2層	肥前陶器	鏡	(11.0)	(7.1)		藍灰色		
166	II c 区 S B 02 2層 II c 区 SX 03	肥前陶器	蓋		(2.4)	つまみ押 4.4	青磁釉		
167	II c 区 S B 02 南壁サブトレ	肥前陶器	後翻	1.8	(4.9)		透明釉		

Tab. 8 宗間家地住宅土建物調査表III

168	II c 区 SX03	土築實土器	皿	(1.2)	(4.6)	褐色	
169	II c 区 SX03	土築實土器	皿	(1.4)	5.2	に赤い褐色	
170	II c 区 SX03	肥前磁器	碗	(8.0)	(3.6)	透明釉	
171	IV a 区 SX03 10 層 IV a 区 SX03	肥前磁器	小碗	7	3.4	2.7	透明釉
172	II c 区 SX03 12 層	肥前磁器	碗		(4.6)	(7.0)	透明釉
173	II c 区 SX03 南壁	肥前磁器	碗	(10.5)	(4.8)	透明釉	灰質釉
174	II c 区 SX03	肥前磁器	碗		(2.1)	3.6	透明釉
175	II c 区 SX03	肥前磁器	皿		(1.5)	(4.6)	透明釉
176	IV a 区 SX03 10 層	肥前磁器	蓋	9.8	2.7	つまみ付 3.8	透明釉
177	II c 区 SX03	肥前磁器	蓋	(10.0)	2.6	つまみ付 (5.8)	透明釉
178	IV a 区 SX03 11 層	肥前磁器	蓋		(2.9)		透明釉
179	II c 区 SX03	肥前磁器	碟		(1.9)	2.7	透明釉
180	II c 区 SX03	不明陶器	小壺	(7.1)	(4.2)	鉢形 鉄輪	
181	IV a 区 SX03 11 層	石見系	鉢	(18.8)	(9.5)	7.7	長石類
標 識 番 号	出土地点	種別	寸 幅	大きさ (cm)		重 量 (g)	色 調
				現存長	現存幅		
182	IV a 区 SX03 10 層	土製品	サナ	5.6	7.6	1.6	淡黄色
183	II c 区 SX03	窓道具	ハセ	7.3	3.0	3.0	淡黄色
標 識 番 号	出土地点	寸 幅	器 種	大きさ (cm)		重 量 (g)	色 調
				現存長	現存幅		
184	皿区 蓼西側整地土	肥前磁器	皿	(1.0)	3.4	4.4	灰褐色
185	II b 整地区 SX03 7 上面	肥前磁器	皿	(9.3)	2.1	(5.8)	透明釉
186	II b 整地区	肥前磁器	碗		(4.2)	3.8	透明釉
187	II b 整地区	不明陶器	碗		(2.8)	(3.9)	透明釉
188	II b 整地区	不明磁器	小杯	(5.2)	3.8	3.0	透明釉
189	皿区 蓼西側整地土	肥前磁器	碗	(10.6)	(5.9)		透明釉
190	II c 区 SX03 南壁	肥前磁器	碗		(4.3)		透明釉
191	II c 区 モルタル下	石見系	碟		(1.5)	(7.7)	長石類
192	IV d 区 南半 3 層	肥前磁器	香炉		(5.3)		青銅類
193	IV d 区	不明陶器	碟		(1.6)		和輪 鐵輪
194	II b 整地区	肥前磁器	灯火昇	7.6	(3.6)	3.6	透明釉
195	II b 整地区	肥前磁器	蓋	(9.8)	3.4	つまみ付 (4.0)	透明釉
196	II b 整地区	不明陶器	蓋	(8.1)	4.3	つまみ付 (2.4)	長石類 鐵輪
197	IV a 区 深堀トレンチ 2 級	肥前磁器	仏塔器	(7.2)	(2.3)		透明釉 ワニカガ印付
198	IV a 区 深堀トレンチ 13 級上面	肥前磁器	政重		(5.0)		透明釉
199	IV c 区 東壁サブトレ 18 層	肥前陶器	皿		(1.4)	(4.8)	長石類
200	I a 区 下面	須佐	すり鉢		(11.2)		米甕類
201	IV a 区 深堀トレンチ 21 級	須佐	帶		(9.8)		に赤い赤褐色
202	IV a 区 深堀トレンチ SK05	上海瓦上器	壺		(8.5)	(17.0)	褐色
標 識 番 号	出土地点	種 別	器 種	大きさ (cm)		重 量 (g)	色 調
				現存長	現存幅		
203	II c 区 井戸周辺モルタル下位	磁製品	釣	11.7	0.4	0.4	11.8
204	II d 区 SB01 2 層下部	磁製品	鉢	4.6	3.3	3.3	215
205	II a ~ c 区 SB01 ベルト内	鏡	寛永通鏡	2.4	2.4		2.9
206	IV c 区	石製品?	不明	12.3	17	1.8	395 淡赤褐色
207	IV 区	石製品?	不明	8.9	14.9	2.6	515 白色
208	IV a 区 SB02 表土 IV a 区 SX03 11 層	石製品	鏡	15.7	6.2	2.5	390 灰褐色 裂片

## 第4章 本年度の試掘・立会調査

### 第1節 本年度の試掘・立会調査対象箇所とその対応

#### 第1項 大森山伝統的建物群保存地区 (Fig.21)

①松原豊栄家地点浄化槽埋設に伴う工事立会

対象地は大森区域内でも駒ノ足地区にあたり、地点番号では KoW20 に該当する。

調査は掘削が実施される 6 月 10 日に行い、内容は浄化槽埋設に伴う工事立会である。掘削の規模は約 1.5 m × 2 m で、深さは 1.9 m 程度であった。

掘削を開始すると、山側で現地表下 40 ~ 50 cm 程で岩盤となり、東側に無鉛しながら下っていた。

岩盤の上層は厚い盛土で、調査区東端の岩盤まで掘り下げたが、明確な遺構は検出されなかった。

遺物は、地表直下で近代以降と推定される石見系陶器の破片が出土したのみである。

このため、当該地区には明確な遺構は無いものと判断し、工事を続行、翌日工事を終了した。

#### ②大森座南地点浄化槽埋設に伴う試掘調査

対象地は大森区域内でも駒ノ前地区にあたり、地点番号では MiW34 に該当する。

調査の詳細については次節で報告する。

#### ③松原家庭地点浄化槽埋設に伴う工事立会

対象地は大森区域内でも駒ノ足地区にあたり、地点番号では KoE20 に該当する。本年度調査の松原豊栄家とは通りを隔てた東側となるが、調査地は遺物背後の銀山川沿いに立地する。

当該地は平成 17 年度調査地点 (Fig.21) のすぐ北側にあたり、掘削の規模は約 1.5 m × 3 m であった。

調査は掘削を行う 10 月 28 日に実施し、内容は浄化槽埋設に伴う工事立会である。調査地は銀山川河岸石垣のすぐ西側で、深掘削から厚い盛土が予測された。

掘削を行うと厚い盛土が確認されたが、地表下約 1.4 m の高さで、ほぼ水平に整地されたと考えられる黄褐色土層が確認された。この層上では遺構は確認されず、整地土も硬くしまってないため、一時的な整地と判断し、掘削を続行した。整地土も厚く盛土で造成されており、表上下約 2.1 m 程度下がった時点で計画深度に達したため掘削を終了した。

出土遺物は、18 世紀から近代までの肥前磁器、少量の瀬戸・美濃、上野製の燈籠・煙灰炉や、石見系陶器の皿・すり鉢・花瓶などが出土している。表土からの遺物以外、層位による時期差は認められないものの、19 世紀代の遺物が多い傾向にある。また、麻糸工具も 2 点確認されている。

#### ④銀山公園駐車場清掃施設設置に伴う立会

対象地は、大森区域内でも瀬戸内地区にあたるが、基準となる通りに面していないため、地点番号は銀山公園地区 (Ra01) と同様、通りの東西を示す W・E は付さず、Ra02 とした。

調査は、ソフトバンクの通信施設埋設に伴う工事立会で、12 月 8 日に実施した。掘削の規模は、約 2.5 m × 3.5 m であった。

対象地の現状は平坦に造成され、碎石を敷いて駐車場として利用されている。このことから、調査前から上面は削平或いは造成されているものと推定された。

掘削を行うと、碎石直下から黄褐色土の造成土が露出され、現地表下約 50 cm で岩盤が検出された。この岩盤はほぼ水平に削平されており、瀬戸内東側の山側には、岩盤を削ってコンクリート製の排水溝が設置されていることが明らかとなった。

こうしたことから、対象地は銀山公園造成時に、南側の山塊の一部を削平して平坦地を設け、岩盤上に黄褐色土で造成を行ったものと判断した。

工事は岩盤を約 10 cm 削平し、表土下 60 cm で計画深度に達したため掘削を終了した。

本調査で遺物は出土していない。

#### 第2項 温泉津伝統的建物群保存地区 (Fig.33 ~ 35)

##### ①下水道工事に伴う地盤調査立会

調査は、温泉津伝統的建物群保存地区において計画されている下水道工事に先立ち、地盤の強度を調べる試掘調査について立会したもので、10 月 16 日に実施した。試掘箇所は 2ヶ所で、掘削順に西側を 1 T、東側を 2 T とした。

##### 【1 T】(Fig.34)

対象地は、温泉津伝統的建物群保存地区内でも海岸

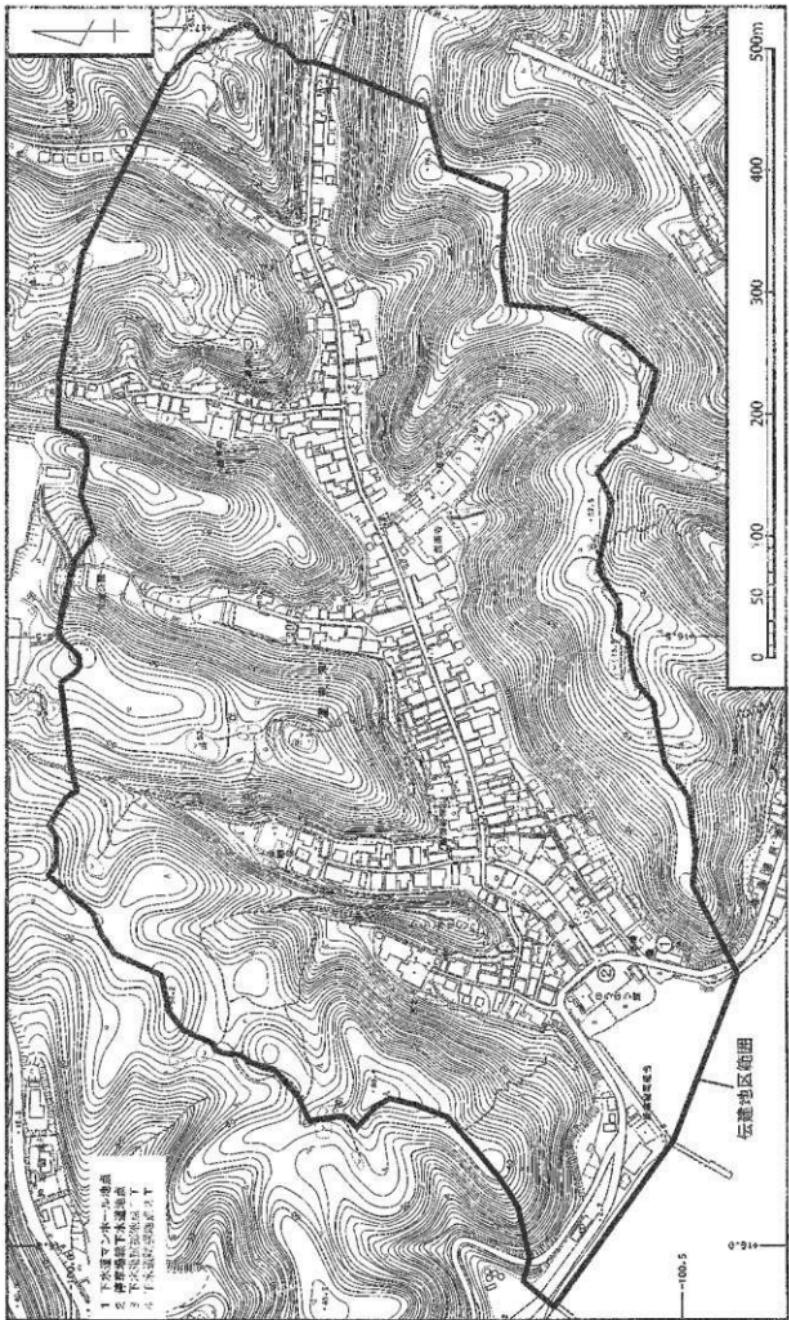


Fig.33 温家湾丘陵地区内试验·立会地点 ( $S=1/4,000$ )

に近い場所で、県道温泉津港線からおよそ35m東の位置である。現状は道路で、元禄5(1692)年に塗かれた絵図でも道として記載されている場所である。

調査は、アスファルト舗装面に1m×2mの切れ込みを入れ、この範囲で行った。掘削を開始するとアスファルト下の碎石直下で淡灰色の硬化した層が検出され、舗装段階の道路面と推定される。その下層では、大槻の礫を含む黄褐色土が約60cmの厚さで堆積しており、道路建設時の造成土と考えられる。この層下は、前段階の溝路面とみられる淡赤褐色上の硬化面で、厚さは約10cmであった。さらに、20~30cmの暗赤褐色土の造成土をはさんで、茶褐色の硬化面が検出された。この硬化面も溝路跡と考えられるが、厚さは2~5cmと薄かった。この下層は灰褐色の粘質土で、厚さは30cm程度である。この粘質土の下層は暗灰色の有機物層で、16世紀代の遺物が多く出土した。この有機物層は少なくとも40cm以上堆積しており、土壌化していない木の葉や枝などが多く含まれていた。遺物の中には貝殻や人骨、獸骨等も含まれており、こうした堆積状況は、河口付近の疊みなどに自然に堆積した状況を示していると推察される。

ここまで確認した段階で、掘削を終了したためさらに下層の堆積状況については確認できなかった。

出土遺物は、上層では出土せず、検出量下層の暗灰色有機物層で、まとまって出土している。内容は、青花碗6点、青花皿9点、白磁皿5点、瓦質上船火鉢1点で、肥前陶器は含まれていない。青花には、瀬州窯産と考えられるものが8点含まれている。こうした遺物組成から、16世紀第4四半期から第4四半期前半の限られた時期の遺物群と推定され、石見銀山の時期区分では銀山1期に該当する。

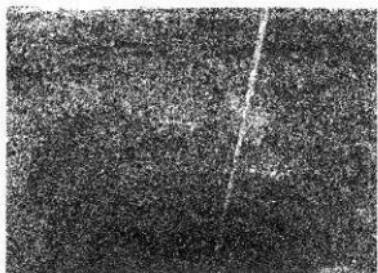


Fig.34 1T 堆積状況 (北西から)

これまで、銀山での調査では、ほとんどの遺構面で肥前陶器が含まれており、明確に銀山1期と認められる遺物群は少なく、本遺物群は遺構には伴わないものの貴重な遺物群と言える。

上層で検出した道路遺構については伴う遺物が出土していないため、時期は不明であるが、16世紀後半以降に段階的に造成されたものと推定される。

また、最下層は自然堆積の状況を示していることから、当該期にはまだこの地点まで、市街化が及んでいなかったことが想定できる。元禄5(1692)年の絵図では町屋の一角となっており、この時期までに町屋が拡張されたものと考えられる。したがって、有機物層上の粘質土がこの地点の最初の造成土と考えられ、その上の硬化面が初期の道路遺構と推定される。

#### 【2 T】(Fig.35)

対象地は、1Tから約90m東方の道路上にある。規模及び掘削方法は1Tと同様で、掘削を行うとアスファルト直下で互層状に堆積した非常に硬くしまった層が約15cmの厚さで確認された。何度も整地が繰り返された状況が窺えるが、遺物が出土しておらず時期は不明である。

この層下では現在の道路と平行に延びる石組の水路遺構を検出した。最上部の石材は地表面より30~40cm位となる。石材上部で16世紀後半とみられる肥前陶器陶が出土した。水路遺構は幅約60cmで、方形に加工された石材をほぼ垂直に積み上げて構築しており、確認した範囲では深さは1.4m以上ある。検出位置、規模、方向などから温泉津伝陸地区における主要道路の側溝である可能性が極めて高い。

他の出土遺物は、地表下40cmの位置で、肥前陶器陶が出土したが細片のため時期は不明である。

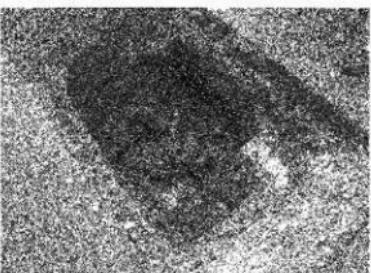


Fig.35 2T 水路検出状況 (北東から)

## 第2節 大森座南地点浄化槽埋設に伴う試掘調査

### 第1項 調査の概要

調査地は大森区域の宮ノ前地区に当たる。代官所から南東に約100mの地点に所在する旧大森郵便局舎の南側で、道を挟んで東側には旅館や住宅がある。試掘調査は旧大森郵便局舎を改修したオペラハウス「大森座」建設における、浄化槽の設置に伴って実施した。掘削の規模は東西約4.4m、南北約2.6mであった。

調査は7月7日～9日に実施した。

### 第2項 尾序 (Fig.36)

ここでは試掘調査で確認できた堆積層の中でも、時期が明らかとなったものと、遺構が確認された堆積層について報告する。遺構と遺物の詳細についてはそれぞれ第3項及び第4項を参照されたい。

第3層は褐色の整地土層で、上面は標高109.8mである。堆積層から時期を反映する遺物は出土していないが、上面に寛政12(1800)年の大森大火に伴う焼土・炭屑の可能性がある第2層が存在することから、江戸時代後半に整地されたものと判断できる。

第5・6・8層は、第5層が黒色砂質土層、第6層が黒色有機物土層、第8層が青灰色粘質土層となっており、それぞれ土質が異なっているが、いずれの堆積層からも江戸時代初期の遺物が出土している。特に、第6層と第9層に回には第7層を挟んでいるが、出土遺物に時期差を認められないため、当該時期に活発な土壌の変動、または水害があった可能性が考えられる。第12層からは時期が特定できる遺物が出土しなかつたが、第9層と同一面上であるため、第9層とほぼ同時期の堆積層と判断できる。

遺構としては、第5層上面から遺物の礫石とみられる石が1点と、第9層下面から掘りこまれている複数箇所が1基検出された。また、第12層下面では2個の石を並べた石列が検出されたが、性質は不明である。

第17・20層は、第17層が暗青色粘質土、第20層が灰色粘質土で、堆積層からは13世紀代の遺物(231～233)が出土した。また、第18層上面からは柱穴とみられる遺構(S P 01)と木片などの有機物が詰まった土坑(S K 01)が検出された。13世紀代の遺物が出土したことは石見銀山遺跡で初めてであり、非常に重要な成果である。

### 第3項 検出遺構 (Fig.36)

#### 【S 01】

S 01は北壁の断面で検出された遺構で、扁平な石を用いた埴物の礫石とみられる。検出面は第5層上面で、標高は108.7mである。1点のみの検出であるため、建物の規模や方向は不明である。検出層位から江戸時代初期の遺構と判断できる。

#### 【S D 01】

S D 01は調査範囲の西型で検出された溝の断面である。検出層位は第9層上面で、標高は108.3mである。検出範囲での規模は幅62cm、深さ28cmで、遺構埋土は黒色の有機質土である。東型断面でも第13層下面で落ち込みが確認されていることから、本来は東西に走る溝であったとみられる。遺構埋土から遺物は出土しなかったが、検出面である第9層の出土遺物から、16世紀末～17世紀初頭までに形成された遺構と判断できる。

#### 【S K 01】

S K 01は第17層上面の標高108.0mで検出された遺構で、平面形が隅丸台形の土坑である。規模は底径40cm、深さ44cmである。埋土は木片を多く含む黒色の有機物層で、埋土内から遺物は出土しなかった。遺構の性質は不明である。

#### 【S P 01】

S P 01は第17層上面の標高108.0mから検出された遺構である。規模は直径30cm、深さ42cmで、平面形は円形である。埋土には一部に木質を含んだ第2層と、色調は同様であるが、縁まりがあり、木質を含まない第3層がある。断面形は2段になっており、途中からやや狭くなる。検出状況から柱穴と判断でき、第3層が柱底で、第2層が柱穴埋土とみられる。

#### 【S X 01】

S X 01は第12層下面の標高108.4mで検出された遺構である。最大径30cm、高さ30cmの円形の自然石と、最大幅32cm、高さ20cmの平面形がやや扁平な石が二つ検出された。用途等は不明であり、転石の可能性もある。

### 第4項 出土遺物 (Fig.37～40、Tab. 9・10)

遺物は各層から陶器、石製品、金属製品、木製品などが出土している。

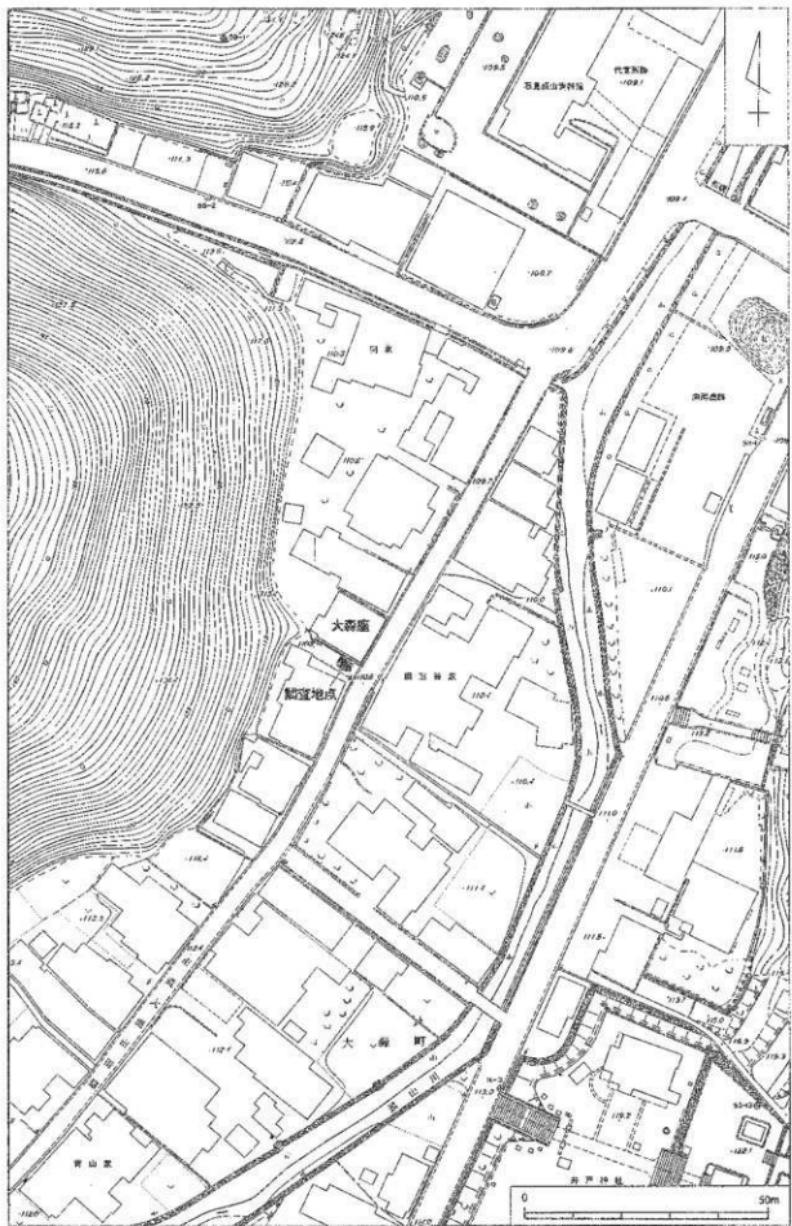


Fig.36 大森座南地点調査地位位置図 ( $S = 1 / 1,000$ )

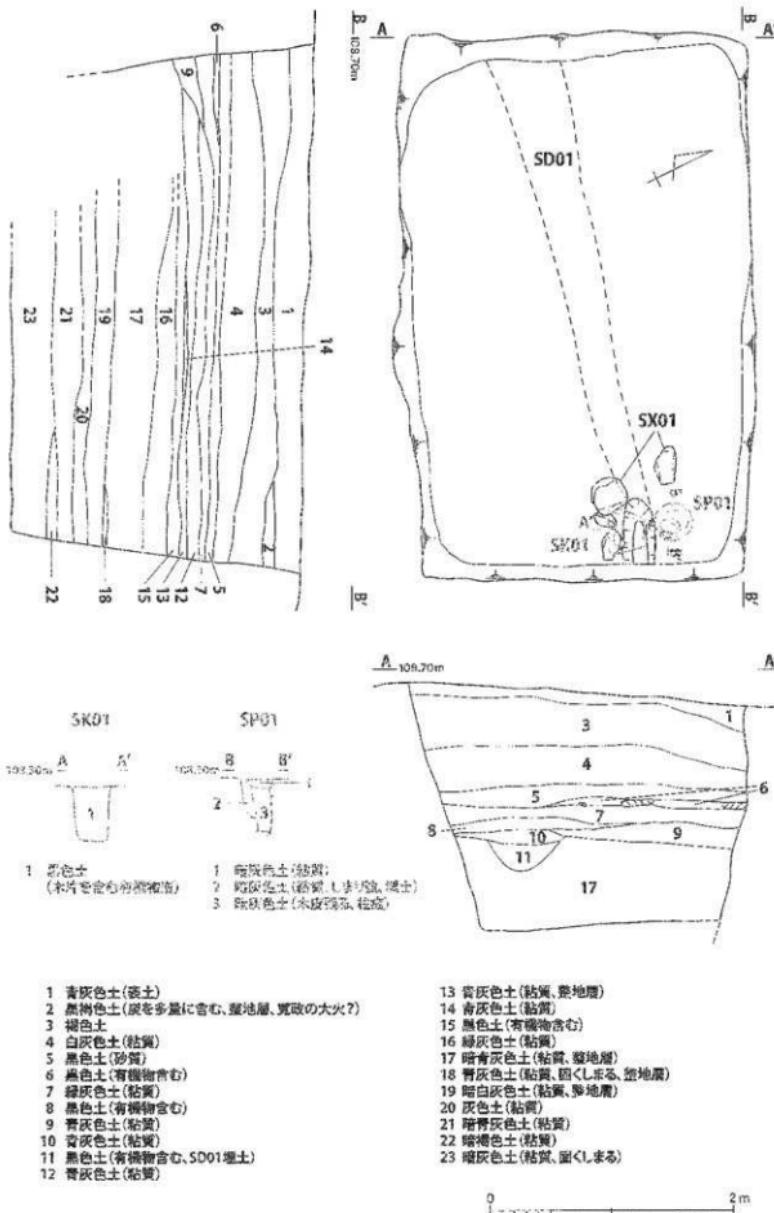


Fig.37 大森座南地点トレンチ平面図・断面図 (S = 1 / 40)

陶器類を上層からみると、第3層で17世紀初頭と考えられる肥前陶器皿(209)が出土しているが、1点のみの出土で、擾乱による混入の可能性が高い。

第5層からは、肥前陶器の皿(210～212)、鉢(213)、すり鉢(214)などが出土しており、いずれも1590年から1610年頃と考えられるもので、16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。

第6層からは、七輪質土器皿(215～217)、青花大皿(218)、肥前陶器皿(221・222・225)、碗(227)などの他、白磁の仏像(229)が出土している。この白磁の仏像は、胎土や釉薬などから中國徳化窯産の可能性が考えられる。また、土師質土器のうち、216と217は京都系土器である。碗は、所謂青茶碗と呼ばれるものである。時期については、いずれも16世紀末から17世紀初頭に位置づけられるもので、第5層の遺物群とはほとんど時期差が認められない。

第9層からは、青花皿(219)、碗(220)、肥前陶器皿(223・224)、碗(227)、片口鉢(228)などが出土している。時期は16世紀末から17世紀初頭の年代組が与えられ、第7層をはさんで第5・第6層より下層ではあるが、時期差はほとんど見られない。

さらに下層では、第17層から中世須恵器皿(231)、古瀬戸瓶(232)が、第20層からは壺器系の甕(233)が出土している。甕は底部のみで明確ではないものの、越前か常滑と想われる。これらはいずれも13世紀後半～14世紀初頭に位置づけられると考えられ、これまでの銀山調査では出土していない時期の遺物で、今後の銀山研究にとって貴重な資料となろう。

この他、第2層からは自然釉のかかった陶器(230)が出土している。同層は寛政12(1800)年の大森大火に伴う焼土・炭層と考えられており、当該期の資料と考えられるが、陶器は中世的な特徴を持つことから、後世の混入も含め、注意深い検証が必要である。

石製品では、第5層から石鉢(234)、石臼(236・237)が出土している。石鉢については口縁付近から内上面部が被焼してあり、内部で火を扱う用途に使用したものと考えられる。石臼(236)は茶白である。また、第6層からは、礫石(235)の破片が出土している。年代については第5層、第6層から出土した陶器類から16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

金属器については、第9層からキセルの雁首(238)、鍔(240)、火箸(241)、小刀製品(243)が出土している。第12層からは、キセルの吸口(239)が、第17層からはツルハシ(242)が出土している。第12層からは図示できる陶器類は出土していないが、第9層と同様に堆積しており、第9層とほぼ同時期の遺物と考えられる。

調査は、第9層(245～251)と第12層(252～256)を中心に出土している。第5層からは1点(244)のみ出土している。いずれも無文鏡で、鷲谷分類ではB-II-3型、B-III-2型、C-II-3型の範疇に収まるものである。時期は、同層から出土した陶器類から、16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

木製品は、第9層から鏡の刃床部(258)、謙の柄(260)が出土しており、第15層からは油壺下駄(257)、第17層からは板状木製品(259)が出土している。謙の柄については同層から出土した鏡の刃部(240)と同一固体になる可能性が高い。板状木製品については両側面に竹釘の目痕が残っており、数枚を連結して円形の板としていたと考えられる。端部の加工状況から削蓋であった可能性が高い。

また、出土座位は明確にできないが、第4層～第14層の間で柱材が2点(261・262)出土した。261は断面が方形に削取されており、両端部が残存する。このことから、長さは約42cmと判断し、床などを支える東柱であったと思われる。いずれも時期は不明であるが、261の方が上層から出土したと考えられ、第4層に伴うものであれば18世紀代まで下る可能性がある。

### 第3節 小結

大森座浄化槽埋設に伴う試掘調査では、江戸時代初期に位置づけられる遺物とともに、遺構面が2面検出されたことと、13世紀代の遺物と遺構が検出されたことの2点が大きな成果として挙げられる。また、江戸時代初期の遺構面である第5層上面では、礫石建物が利用されていた可能性があるが、江戸時代以前の堆積層である第18層上面では柱穴が検出されたことから、中世の段階では掘立柱建物を建てていた可能性もある。

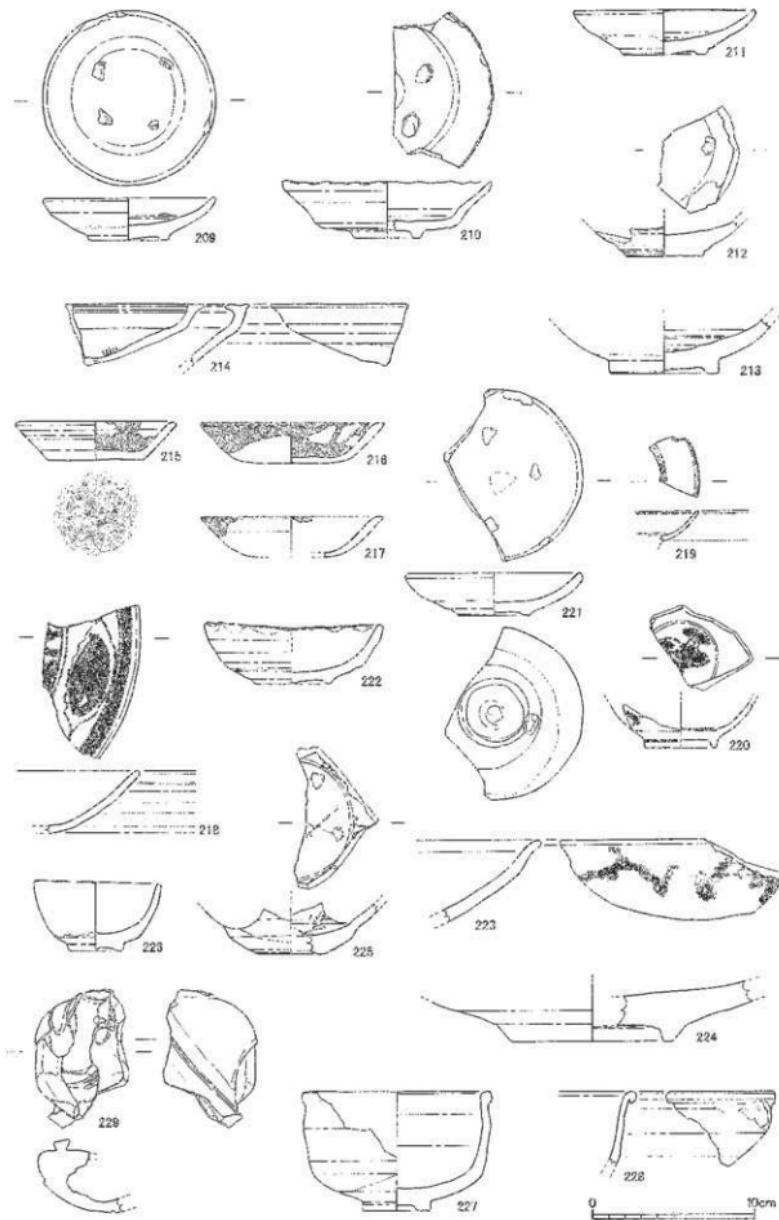


Fig.38 大森座南地点出土遺物実測図 I (S = 1 / 3)

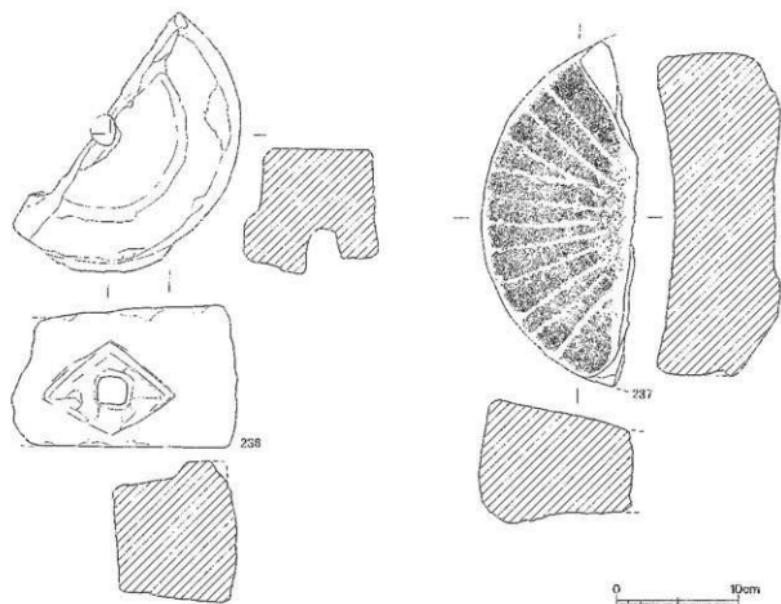
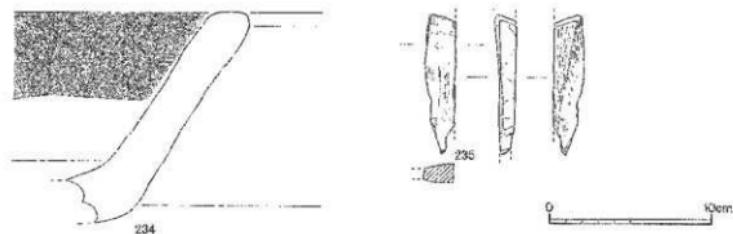
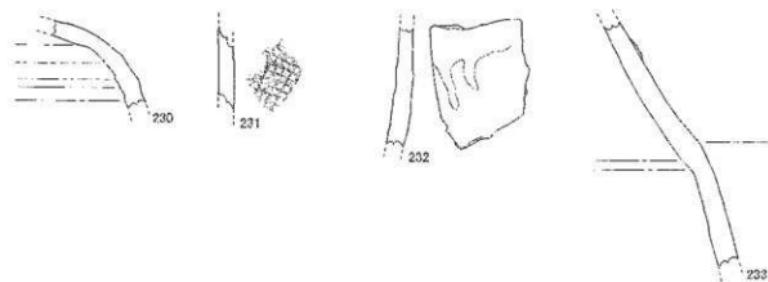


Fig.39 大森序南地点出土遺物変則図 II ( $S = 1/3, 1/4$ )

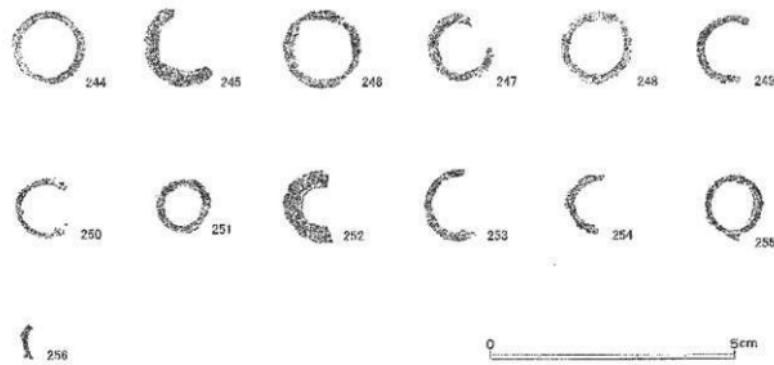
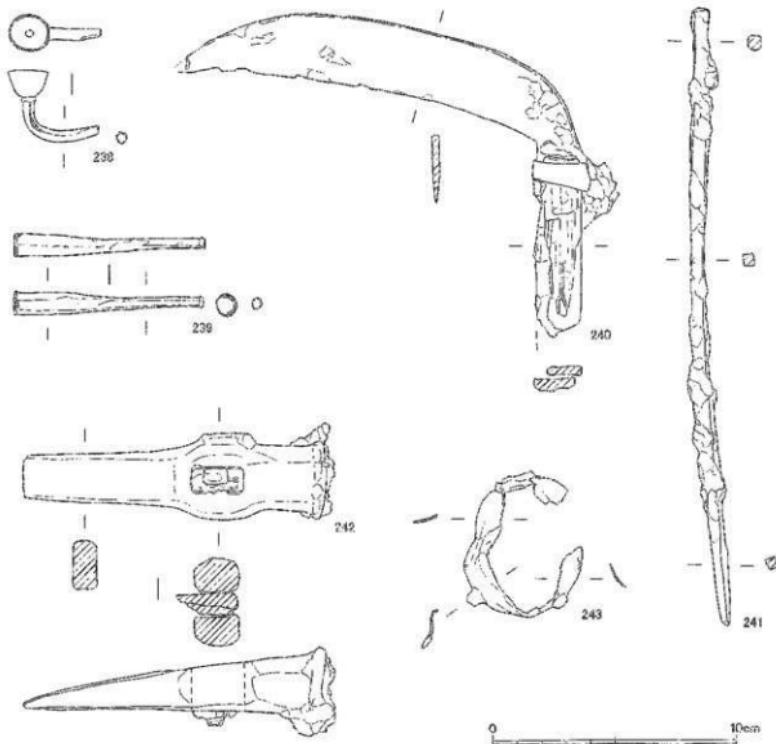


Fig.40 大森座南地点出土遺物実測図III (S=1/1, 1/2)

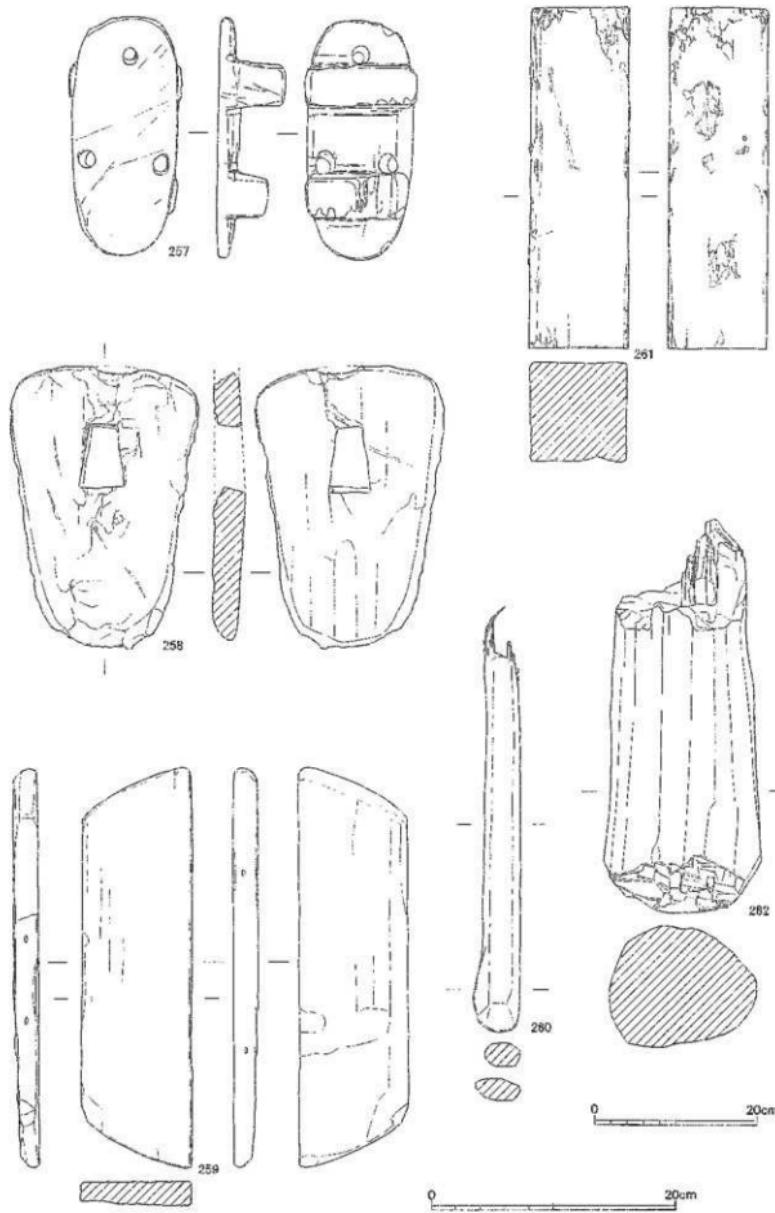


Fig.41 大森座南地点出土遺物実測図IV ( $S = 1/4, 1/6$ )

Tab. 9 大森座南地点出土遺物観察表

番号 器名	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			色調	成形・磨 擦・文様	備考
				直径	縦高	横幅			
209	3層	肥前陶器	皿	10.6	2.6	4.8	灰輪	胎土目	
210	5層	肥前陶器	碗	(12.8)	3.5	(4.0)	灰輪	胎土目	
211	5層	肥前陶器	皿	(10.9)	2.8	(5.0)	灰輪		
212	5層	肥前陶器	瓶		(2.2)	(4.8)	透明釉	胎土目	
213	5層	肥前陶器	鉢		(3.4)	(6.6)	灰輪		
214	5層	肥前陶器	すり鉢		(3.8)		鉄輪		
215	6層 黒色土	土師質土器	瓶	(9.8)	2.4	(5.7)	浅黄色	双付着	
216	6層 黒色土	土師質土器	皿	(11.2)	2.5	(6.0)	にぶい黄緑色	双付着	京都系
217	6層 黒色土	土師質土器	瓶	(11.2)	2.5	(5.0)	にぶい黄緑色	双付着	京都系
218	6層 黒色土	青花	大皿		(3.9)		透明釉		
219	9層	青花	皿		(1.8)		透明釉		
220	9層	青花	瓶		(2.9)	(3.4)	透明釉		
221	6層 黒色土	肥前陶器	皿	(10.6)	2.6	4.3	薄い長石釉	胎土目	
222	6層 黒色土	肥前陶器	皿	10.7	3.7	4.3	長石釉	輪花	
223	9層	肥前陶器	瓶		(5.0)		灰輪		
224	9層	肥前陶器	大皿		(3.7)	(10.0)	灰輪		
225	6層 黒色土	肥前陶器	皿		(2.7)	(3.4)	灰輪	胎土目 鉄輪	
226	6層 黒色土	肥前陶器	环	(7.5)	4.4	3.1			
227	9層	肥前陶器	碗	(11.2)	7.4	4.2	長石釉	唇輪	
228	9層	肥前陶器	片口鉢		(4.6)		灰輪?		
229	6層 黒色土	白磁	仏像	現存高 8.5	現存幅 5.8	現存厚 4.6	白磁輪		中国 徳化窑?
230	2層	不明陶器	瓶か壺		(5.4)		灰輪		
231	17層 灰色粘 質土	中世須恵器	甕		(5.3)		灰輪		
232	18層	鏡	瓶		(7.4)		灰輪		
233	20層	姿屋系	甕		(15.2)		褐色		越前?
234	5層	石製品	石鉢		(13.0)		灰色		

Tab.10 大森塚南地点出土遺物観察表II

掘出 番号	出土地点	種別	基種	大きさ(cm)			重量(g)	色調	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
235	6層 黒色土	石製品	礫石	8.6	1.9	1.3	26.0	淡黄色	
236	5層	石製品	石臼	21.3	18.4	11.5	3980		
237	5層	石製品	石臼	28.3	12.6	10.0	4420		
238	9層	鐵製品	キセル (櫛首)	3.7	1.5	0.1	4.5		
239	12層	鐵製品	キセル (吸口)	7.8	1.0	0.1	3.9		
240	9層	鐵製品	鍬	13.2	17.7	2.0	80.7		
241	9層	鐵製品	火箸	25.3	1.2	1.1	36.4		
242	17層	鐵製品	ツルハシ	12.7	3.6	3.8	305		
243	9層	金銀製品	不明	6.0	4.4	0.2	10.6		
244	5層 黒色土	銭貨	無文銭	1.5	1.5		0.1		
245	9層	銭貨	無文銭	1.4	1.2		0.1		
246	9層	銭貨	無文銭	1.6	1.6		0.1		
247	9層	銭貨	無文銭	1.4	1.4		0.1		
248	9層	銭貨	無文銭	1.4	1.4		0.1		
249	9層	銭貨	無文銭	1.4	1.0		0.1		
250	9層	銭貨	無文銭	1.2	1.2		0.1		
251	9層	銭貨	無文銭	1.1	1.1		0.1		
252	12層	銭貨	無文銭	1.5	1.0		0.1		
253	12層	銭貨	無文銭	1.2	0.7		0.1		
254	12層	銭貨	無文銭	1.5	0.9		0.1		
255	12層	銭貨	無文銭	1.2	1.2		0.1		
256	12層	銭貨	無文銭	0.8	0.2				
257	15層 黒色土	木製品	下駄	19.6	9.2	5.5			
258	9層	木製品	鋸刃床部	23.1	15.4	2.6			
259	9層	木製品	桶の底板	42.8	9.0	2.0			
260	9層	木製品	縁の柄	34.9	3.8	2.2			
261	不明	木製品	柱材	42.0	12.2	12.2			
262	不明	木製品	柱材	48.3	19.3	15.3			

## 第5章 石見銀山遺跡宗岡家住宅発掘調査検出便槽状遺構の自然科学分析

### 第1節 はじめに

石見銀山遺跡は島根県大田市大庭町地内に立地する遺跡である。本報は、同遺跡内、宗岡家住宅で検出された「便槽状遺構(SX03)」が「便槽」であったことを確かめるために、大田市教育委員会が文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した、寄生虫卵分析及び全リン分析、CN分析の概報である。

### 第2節 採取試料について

Fig.41に示す位置に置いて、分析試料を採取した。Fig.42の断面図中に採取試料の詳細な位置を示す。中央地点試料No.1(中央1)で寄生虫卵分析を、同地点試料No.1、2(中央1、中央2)で全リン分析を実施した。またCN分析は、全4試料を対象に実施した。

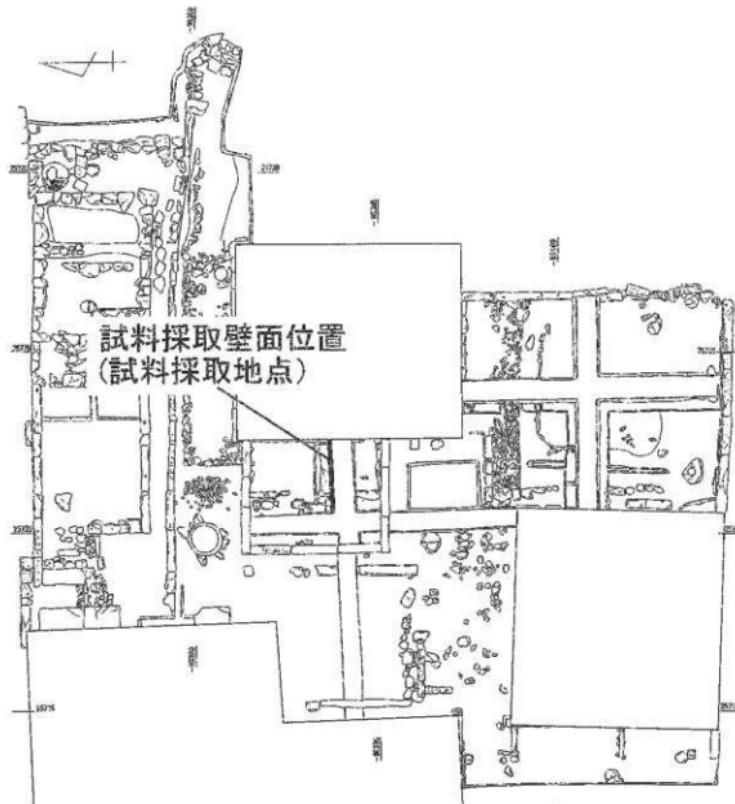


Fig.42 調査区配図及び試料採取地点

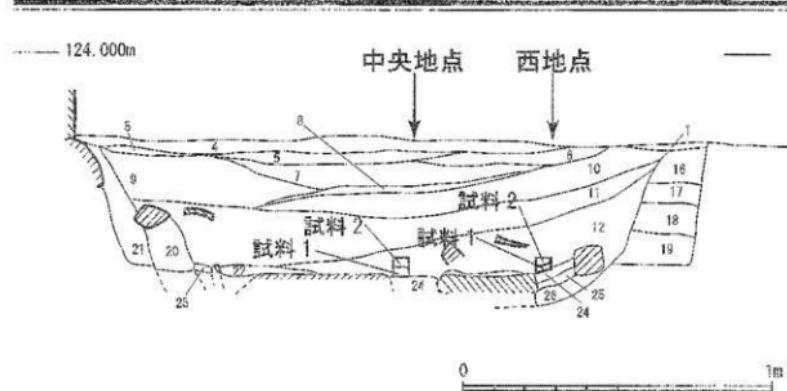


Fig.43 SX 03 断面図及び試料採取位置

### 第3節 分析方法及び分析結果

#### 第1項 寄生虫卵分析

##### ① 分析方法

金原(2003)に従い分析処理を行い、プレパラートを作成した。作成したプレパラートを光学顕微鏡下400~1000倍で観察し、検出される寄生虫卵の同定・計数を行った。

##### ② 分析結果

Tab.11に分析結果を示した。中央1から、回虫卵が1個体検出された(Fig.43)。また、回虫の生態をTab.12にまとめた。

#### 第2項 CN分析及び全リン分析

##### ① 分析方法

浜辺(2014)に従って、測定を行った。

Tab.11 検出寄生虫卵化石組成表

試料名	中央1(12層最下部)
1 回虫卵 <i>Ascaris(lumbricoides)</i>	検出個体数 1
	検出密度 (個体/cm <sup>3</sup> ) 2
総数	1
寄生虫卵密度 (個体/cm <sup>3</sup> )	2
稀釀率 (1/X)	2

Tab.12 寄生虫の種類と生態的な特徴

種類	固有宿主	寄生器官	感染方法
回虫	ヒト・ブタ	小腸	幼虫包藏卵の経口摂取(堆肥の施肥により、野菜などの生食)

Tab.13 P C N測定結果一覧

試料No.	Nitrogen (%)	Carbon (%)	Sulphur (%)	C/N	P/C	リン含有量 (g/kg)
中央1	0.074	0.838	0.021	11.35	0.166	1.39
中央2	0.189	3.013	0.026	15.96	0.09	2.84
西1	0.163	1.514	0.062	9.28	-	-
西2	0.175	2.349	0.034	13.45	-	-

## ② 分析結果

C/N 測定結果及び全リン分析結果を Tab.13 に示す (Tab.13 には、C/N、P/C も示した)。

### 第4節 遺構が「便槽」であったことの可能性

昭和前半以前は、「し尿」は貴重な資源であったこと、更に臭気や衛生面から、便槽を廐棲する際には「し尿」をくみ取ることが多い。今回の「遺構」でも、「便槽」であったことを意識し、「し尿」のくみ取り残を求めて「12層」最下部を分析試料とした。

#### 第1項 寄生虫卵分析結果から

中央 1 で寄生虫卵が検出された。しかし、その密度は 2 粒/cm<sup>2</sup> と少なく、この遺構を「便槽」とするには低い値であった。

#### 第2項 リン分析、CN 分析から

し尿そのもののリン、窒素、炭素を測定した資料はないが、し尿を活用した「A Z 有機」という肥料では、リン酸が 6.93%、窒素が 5.47%、炭素が 37.2% を示すことが報告されている（清和肥料工業株式会社、HP）。この値から求める P/C は 0.081、C/N は 6.8 となる。「A Z 有機」ではし尿を「微生物」によって分解しており、「A Z 有機」には微生物の遺骸も大量に含まれている。「バクテリア」の P/C(0.056) や C/N(5.6%) に近いことから、実際には「し尿」の P/C、C/N は、この値より高い可能性がある。

今回の測定で、中央 1 の P (リン) の濃度は 1.39g/kg(0.139%)、P/C は 0.166、C/N は 11.35 を示した。P/C、C/N ともに、先に示した「A Z 有機」に比べ高

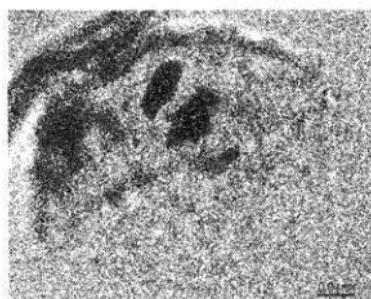


Fig.44 検出された寄生虫卵化石

い値であり、し尿を示すとは考えられない値であった。一方、中央地点では P/C が上位で低く、C/N は上位で高い。更に西地点でも C/N は上位で高い。植物の P/C は低く、C/N は高いことから、今回のように上位ほど P/C が低く、C/N が高いことは、植物が混入しており、上位ほど混入量が多かったことを示唆する。

### 第5節 小結

寄生虫卵分析結果、化学分析 (リン分析、CN 分析) 結果とともに、この遺構を「便槽」とするには不十分なものであった。P/C が高く、寄生虫卵が検出されることから、骨や野菜屑などを埋めたゴミ穴であった可能性も指摘できる。ただし、少量でも寄生虫卵が検出され、上位ほど植物の混入量が多かったことから、底層に「し尿」が残った「便槽」を、植物片を多く含む上層で埋めた可能性も否定できない。

## 引用文献

- 植村 清・井関英弘・平井和光・木村災作 (2002) 寄生虫学テキスト [第2版]、263p、文光堂、東京。  
金原正明 (2003)、遺跡の土壤分析、歴史考古学マニュアル、77-84、同成社、東京。  
清和肥料工業株式会社 (HP)<http://www.shk-net.co.jp/seminar/page/AZ301.pdf>  
渡辺正巳 (2014) 荒縄遺跡で検出された木棺遺構のPCN分析、市井深田遺跡 荒縄遺跡 鈴見B遺跡1区一般国道9号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、2、103-107

# 第6章 総括

## 第1節 鹿布山谷地区

### 第1項 I区

I区では、調査区西側の岩盤上に崩壊状遺構や溝状遺構(S D 01・02)、水溜め状遺構(S X 03)、柱穴(S P 01~07)、用途不明遺構(S X 04)などの遺構が彫り込まれた岩盤加工遺構(S X 02)が検出された。S X 02には柱穴や窓みが多く加工されていることから、岩盤に沿って植物があった可能性が想定される。

I区の平坦山の一部にトレンチを設定して下層の確認を行なった結果、現地表面より下でも岩盤の加工をしていることが判明した。S X 02の最下面で検出されたS D 02の埋土から17世紀前半頃の遺物が出土したことから、S X 02は少なくとも江戸時代初期から利用が始まったことが明らかとなった。下層確認トレンチの断面では硬化面が7箇所確認され、江戸時代をとおして何處かの造成がなされていたようである。また、石垣が造られ、現在の地形が形成されたのは出土遺物から18世紀代とみられる。

石垣(S W 02)によって標示された平坦面上からは植物遺構(S B 01)が検出された。第2章でも報告したが、S B 01は東西4.8m(約16尺)、南北3.2m以上の礫石建物跡である。柱間は東西が三間、南北が二間以上で、一列の長さは約2mである。ただし、東西の柱間の内で中央部のみは約110cmで、東西の柱間の約半分になっている。これまでの発掘調査で検出されている建物遺構の多くは一列が197cm(六尺五寸)を基準として建てられていることが多いが、S B 01はその基準では建てられていない。I区が石垣で造られた平坦面のため、広さが限定されていたなどの理由が考えられる。

I d 区北側に沿って東西にトレンチを設定し、下層の確認を行なった。その結果、最下部で岩盤加工遺構(S X 05)などの遺構が検出された。S X 05は西端部に隙間が加工され、その縁が被削した遺構である。製錬に関連する遺構の可能性も考えられるが、現段階では一部が検出されたのみであるため言及を控え、今後の調査の課題としたい。

### 第2項 II区

II区では、調査区の中央部で検出された建物遺構(S B 02)を中心として、それに関連する遺構が検出された。S B 02は長辺約10.5m、短辺4m以上の礫石建物跡である。柱間は長辺が八間、短辺が四間以上で、柱間の長さが約80cmと非常に短い。S B 02は半間ごとに柱を置く構造であったとしても、一間が160cm程度であり、S B 02もこれまでの認識で検出されてきた197cm(六尺五寸)の基準では建てられていない。S B 02は朝が西面の石垣(S W 02)とは平行になっておらず、東側の石垣(S W 05)と平行になっている。S W 05は鹿布山谷の邊と敷地を区画するための石垣と考えられ、谷筋を通る道と平行していたものと想定されることから、S B 02は邊と平行になるように建てられていたと考えられる。S B 02の南側と西側には溝状遺構(S D 03)があり、雨水等が建物内に入らないための工夫とみられる。

個別の遺構としてはS B 02内からは溝状遺構(S D 04)、土坑(S K 01)、S B 02に面する遺構(S X 07~11)が検出された。S X 07は検出状況から製錬炉とみられる遺構で、S B 02が製錬にも関連する施設であったことを示すものである。S X 08はS X 07に近接して検出されたことから、S X 07と関連する施設であった可能性を考えられる。S D 04はS B 02内部を通る溝で、南端部がS X 10につながっていることから、S X 10に溜ったものをS B 02の外に出すための溝の可能性がある。S X 10は方形の遺構で、床面が硬化していることから水溜めとして利用されていた可能性はある。しかし、深さは約10cmと浅く、水溜めとしての機能を十分に果たせるかどうかは疑問であり、遺構の機能を想定することが難しい。S X 09は赤褐色土を層状に叩き締めてつくられた遺構で、遺構面より10cm程度高くなっている。調査時には擂盤としての機能も考慮していたが、周辺から筋跡が検出されなかったため、断定はできなかった。S X 09~11はこれまで検出例のない遺構であるため、現時点では普及を避け、類似の検出を待ちたい。

### 第3項 Ⅲ区

建物遺構 (S B 04) が検出された。S B 04 は東西約 5.7 m、南北約 5.0 m の割石を並べた基礎も持つ土台造物跡で、造成土から石瓦系陶器の大甕が出土したことから明治時代以降の建物と考えられる。S B 04 内部には炉跡とみられる遺構 (S X 15・16) や、金床石を固定していた跡の可能性がある遺構 (S K 02)、輪台の可能性のある遺構 (S X 14) などがあり、鍛冶場の可能性が高い。S K 02 と S X 14・15 は近接しており、それらが検出された南東隅を鍛冶場としていたものとみられる。

S B 04 の建築年代について、調査成果から考察する。第2章で報告したように、Ⅱ区の南東部で体部に鉄船で文字が書かれた土瓶 (62) が表採された。藤山新が銀山地内に構えた事務所は何度か名称を変えており、明治20(1887)年までが「大森銀山所」で、明治21年に「大森銀山出張所」に変わり、明治25年には「大森銀山出張所」となっている。本年度の発掘調査で出土した上瓶には「藤<sup>二</sup>組大森銀山所」と書かれしており、この遺物がS B 04 に伴うならば、S B 04 は明治20年以降に建てられたものといえる。

一方、藤田船が銀山經營に関連する遺物の挖えや記録を綴った『岩書録』には、明治21年10月に「逸摩郡佐藤村（現在の大森町）二丁七治恵地」に桁行三間、梁行武間半で鍛木葺のが根を持つ鍛冶場を建てたことが記録されている。本年度の調査地点は大山市大森町二270-1番地で、裏書録に記載された番地とは一つ北にずれている。しかし、裏書録に記録されている建物の大きさ及び機能はS B 04 と共にしており、S B 04 はこの鍛冶場であった可能性は高いと考えられる。なお、岩書録の記録によると、この建物は明治23年9月には解体届が出ており、2年程度しか利用されなかったようである。

### 第2節 宗岡家住宅

宗岡家住宅の発掘調査は保存整備事業に先立ち、建物の修理や復原に必要な情報を得ることを目的として実施した。調査の結果、遺物遺構 (S B 01) や廃施設間連通構 (S X 04・05)、宗岡家より古い建物に隣接する遺構 (S X 03) などが検出され、施設の様相や

正確な位置・規模・土地利用の変遷履歴に関する成果が得られた。

S B 01 は屋敷地の北東部で検出された桁行約9m、梁行約3mの遺物遺構である。東半と西半で基礎の構造が異なっており、東半が割石基礎、西半が延べ石基礎である。西半の切石基礎にはほど穴が開いているが、このほど穴が柱を立てるためのものであれば、S B 01 西半部は一間を150cm(五尺)とする建物であったといえる。

宗岡家の主屋は朴門を197cm(六尺五寸)としていることから、主屋と納屋では途てる際の柱が異なるようである。

また、S B 01 の東半の割石基礎部分と西半の延べ石基礎部分は軸が若干ずれており、それぞれの建てられた時期が異なる可能性がある。検出状況から、東半は單独で建物が庭つようになっているが、西半は東側に基礎がなく、東半の割石基礎につながる構造になっている。そのため、東半の割石基礎部分が先に建てられ、西半の延べ石基礎部分が後から建てられたと考えられる。

離れ東側の庭庭では通路跡 (S X 04) や石列 (S X 05) などの庭の施設に隣接する遺構が検出された。同じく離れ東側で検出された遺構に南蔭との境になっている石垣 (S W 02) があるが、S W 02 の積築面はS X 04・05よりも上であることから、庭施設を埋めたのちに樹蓋した遺構と考えられる。離れはこのS W 02 の上に南側の柱を截せていることから、現在の施設は石垣と同時に後から建てられたと考えられる。

下層旅館トレンドでは、地表面から約40cmよりも下位は河川による自然堆積層であることが明らかとなった。宗岡家屋敷地の東側はS X 03 などが構築された段階から利用が開始されたものと考えられる。

S X 03 は宗岡家が建つ前にこの屋敷地を所有していた福本家に隣接する遺構とみられ、福本家が居住していた頃に屋敷地東側の開発が行われたものと考えられる。平成18(2006)年度に屋敷地西部の発掘調査を実施した際には16世紀末～17世紀初頭の遺構が検出されており、早くから利用されていたことが明らかとなっているが、屋敷地東側の利用は西側に比べてかなり遅れるようである。

### 第3章 試掘・立会調査

平成26(2014)年度は立会調査を4か所で、試掘調査を1か所で実施した。

特に、顕著な成果が得られたのは大森座浮化構造面に伴う試掘調査である。ここで検出された堆積層の内で第2層は寛政の大火による灰と焼土とみられるが、この第2層は調査区内で道に面した西側でのみ確認され、東側には広がっていなかった。これは火が及んだ

範囲を示すものと考えられ、寛政の大火の被害範囲を推定する上で重要な資料である。

また、江戸時代初期における活発な土地利用の様相が明らかとなったほか、銀山では初となる13世紀代の遺物が出土した。この遺物は石見銀山の研究において非常に重要な資料であるが、出土数が非常に限られているため、今後の資料の増加に期待したい。

### 引用・参考文献

- 島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書』第1冊【遺跡の概要】
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書』第2冊【発掘調査・科学調査編】
- 島根県大田市 2006『史跡石見銀山遺跡保存管理計画書』
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会 1999『石見銀山遺跡発掘調査報告書』I
- 中田健一他 2005『石見銀山遺跡発掘調査報告書』II 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 中田健一・新川 隆 2013『石見銀山遺跡発掘調査報告書』III 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2000~2004『石見銀山遺跡発掘調査報告書』10~14
- 大田市教育委員会 2006~2014『石見銀山遺跡発掘調査概要』15~22
- 新川 隆 2013『史跡石見銀山遺跡総合整備事業に伴う発掘調査報告書』大田市教育委員会
- 愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史 別編 義象2 中世・近世 湖沼系』
- 江戸遺跡研究会 2001『国税江戸考古学研究事典』
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の縦年』
- 大橋康二 1984『肥前陶磁の変遷と出土分布』『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1994『古伊万里の文様 初期肥前磁器を中心に』理工学社
- 小野正敏「15~16世紀の染付碗・皿の分類と縦年」『貿易陶磁研究』No.2 1982
- 尾村 勝 2014『石見銀山遺跡尾畠布山谷地区の土地利用の変遷ー文獻史料と分布調査成果から見るー』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』4 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 船谷和彦 1994『堺出土の銭鋳型と中世後期の模範銭生産』『中世の出土銭一出土銭の調査と分類』兵庫県埋蔵鉄調査会
- 西尾克己 2013『石見銀山遺跡出土の在地系陶器・石見焼について(1)』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』3 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 西尾克己 2014『石見銀山遺跡出土の在地系陶器・石見焼について(2)』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』4 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 西田宏子・大橋康二監修 1988『古伊万里』別冊太陽 日本のこころ 63 平凡社
- 藤澤良祐 1993『瀬戸美濃大窯の縦年』『瀬戸市史 陶磁史編 四』
- 守岡正司・新川 隆 2011『陶磁器から見た石見銀山遺跡』『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書』I 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 日次謙一 2002『石見銀山遺跡の出土無文鏡について』『石見銀山・石見銀山関係誌集』島根県教育委員会